無限の剣を持つゴブリン

超高校級の切望

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神様「転生特典は？」

転生者「『無限の剣製』!!」

目次

転生者 1
巣の殲滅、蠢く影 13
未来の勇者 26
昇級と剣聖 38
未来の剣聖と賢者の日記 49
４人の少女達 57
滅びる村 70
ゴブリン 80
ゴブリンスレイヤー 97
弟子 107
再会 114

転生者

それは歓迎されずに生まれた。まず最初にみたのは、嫌悪の、憎悪の、殺意の視線。自分が這い出てきた穴を持つ女の、憤怒の形相。

年の近い兄弟達はまだかわいげがある見た目。しかし兄、或いは父親達は何奴も此奴も醜い容姿をしていた。

長い鼻に、長い耳、小さめな瞳、鋭い牙、緑の皮膚。

母に当たる女をなぶり、痛めつけ、笑う。時折その女を助けにくる、或いは迷い込んだり、自分達を殺しにきた者を殺して、笑う。男は殴り、刺し、女は犯す。男の前で見せつけるように犯すこともある。

ああ、なんと浅ましくおぞましい生き物か。

だが、解るのだ。彼らの気持ちが。

女の悲鳴は心地良い。苦しむ顔と合わせると絶頂すら覚える。

男はもちろん同胞ですら死に瀕している姿を見ると笑いがこみ上げてくる。

ああ、おぞましい。なんとおぞましき生態か。

そのゴブリンには、平和な国の平和な街で生きてきた記憶があった。故に、その記憶と己の性根が噛み合わず途轍もない不快感を抱いていた。

勝てると思った。ゴブリンになるのは予想外だったが、自分には転生特典があるのだから。

『無限の剣製（アンリミテッド・ブレード・ワークス）』。ｆａｔｅという作品の中でもかなりのチートに部類されるであろう力。しかし彼は命からがら逃げ出していた。

そもそも『無限の剣製（アンリミテッド・ブレード・ワークス）』は一度見た剣を登録する固有結界。同胞が使う粗末な短剣や冒険者から奪ったであろうただの剣しか持っていない『彼』にはそもそも本来の持ち主のようにチートじみた性能は発揮しえないのだ。

彼は考える。どうすればいいか。まずは当然、力を付けるべきだ。しかし何処で？同胞の所業を見るに人間の前にでるのは危険だ。となると、心底不愉快だが同胞の群に混じるしかない、か？

女はいるだろうか？貸してもらえるだろうか？

「――――ＺＩ」

そんな思考になっていた己に舌打ちする。脳の形がそもそも違うのだろう。他者の苦しみを喜びにするそのあり方に、嫌悪を覚える。

確実に滅ぼそう。その後死のう。この種族をこの世界に一体たりとも残さない。この血を、遺伝子を、必ず消し去る。

だが、そのためには力が必要で、そのためには同胞に紛れる必要がある。ちょうど群を見つけた。ゴブリンシャーマンと呼ばれる奇跡を使う個体が長をしていた。

そこらの獣をかりそれを対価に奇跡を教わることにした。獣を狩るのは、簡単だ。前回の群で学んだことだが自分には型月世界の固有結界を扱える能力があり、副次効果で魔術回路がある。転生特典上、扱えるそれを検証し強化を覚えた。並みのゴブリンよりよほど優れた成果を出せる。

ゴブリンシャーマンから一通り奇跡を学ぶと殺した。新しいボスの誕生かと首を傾げていたゴブリン達も殺した。捕まっていた雌達も腹の中にゴブリンが居たので殺した。

自身の知らぬ奇跡を扱えるゴブリンシャーマンが居たら学んでから滅ぼし、居なかったら滅ぼす生活を続けていると体に変化が現れた。

肥大化したのだ。人の子ほどのサイズだったその体が少しずつ大きくなっていた。何故か脂肪も付きやすくなっていたので体を鍛える時間を増やした。せっかく付いた肉だ、筋肉にしなくてどうする。

柔軟もしっかりやり、筋肉も付きすぎない程度に鍛え、食事量を制限する。剣の使い方もだいぶ覚え――――負けた。

ゴブリン共に英雄と呼ばれていた個体。自分もゴブリンより巨体で、しかし大柄なゴブリンに比べると食事制限のせいで小柄。せいぜい長身の人程度だがその大柄な個体を上回るさらに巨大なゴブリン。鎧を着込み剣を振るう。剣の実力は、自分より上。奇跡を放つ隙がなかった。

そいつはバカだが――――ゴブリンじたいバカだが群のボスは他の

個体に比べて知恵を持っていた。大柄だが太っていない、体系的には自分に近いそのゴブリンは王を名乗って、戦力として加われと言ってきた。

受けなければ死ぬだろう。故に受けた。

力が必要だ。経験が必要だ。だから襲いかかってくる冒険者には糧になって貰った。強いのも多い、何度か死にかけたが治癒の魔術を練習していたおかげで命拾いした。

剣以外にも、鎧などを投影できるようになっていた。しかしその頃には英雄と崇められる存在が増えていた。とんだ失態だ。

一匹一匹なら勝てる。しかし全部が相手となるとキツい。

もっと鍛えなくては。それと、間引きもしっかり意識しよう。なるべく生き残りがでないようにしなくては。

剣を振るう時剣に加わる力に意識を向けるようにした。今までは膂力にモノを言わせて叩ききってたからな。剣を一目見れば理解する特性上、力の加わり方を知るのは簡単。止まってさえいれば鉄でも切れるようになってきた。それと、ミスリル製の武器を手に入れた。間引きはうまく行き英雄共は増えていない。

そういえば、と『彼』は鍛錬をしながら、ふと思い出す。以前とても強い女冒険者がやってきた時、群のボスが人語で何か言っていた。おそらく命乞いをしていた記憶がある。その女冒険者もボスに背を向け後ろから殴りつけられ今ではハラミ袋にされたあと喰われたが、ゴブリンとは人語を発せられるのだろうか？確かに人型に近く、独自の言語を扱う知能もあるが……。

いい加減ゴブリン社会に混じるのも嫌になってきた。いい加減というか、最初からだが。鎧で肌を隠して人の言葉を使えば、まあ文明レベルが低いこの世界なら紛れ込めるか？

ゴブリンは同族意識が薄い。同じ群でも同胞が苦しむ姿を笑い物にする。他の群など知ったことではないし、知ったら取り込もうとす

るだけ。その点人間ならば家畜や娘を攫うゴブリンを退治してもらおうと冒険者などに情報を渡すはずだ。
一応ボスに頼み込んでみた。普段全く願い事をしない無愛想な『彼』からの懇願だ。ニヤニヤ笑みを浮かべ、断った。
ある日新しい雌達が来た。その中には年端もいかぬ子供がいた。まだ孕めぬだろうが性欲処理にはなる。そして、孕めないから直ぐに殺されるであろう子供。『彼』は今までの功績の報酬として寄越せとボスに言った。
ボスとしてはまた断っても良かったのだが、狭すぎて使い物にならなそうなガキだ。いたぶって遊んで殺す楽しみが減るのはいただけないが今回はだいぶ補充できた。特別に許可を与えると『彼』はさっさと自室に引きこもってしまった。
『彼』はせっかくの雌を抱かない。今までもそうだった。優秀な遺伝子を残すなんて知能のないゴブリンは目くじらを立てることなく、むしろ回ってくる回数が少しでも早くなるから気にしてなかったが『彼』が専用の雌を持った。味わおうとした輩がいたが四肢の関節に杭を打たれ大きな石を口に加えさせ蹴りつけ顎を破壊され、のたうち回りながら餓死した。以来迂闊に近づく者は居なくなった。『彼』はこの群で最強なのだ。数で押せば勝てなくはないだろうが確実に半分は死ぬ。誰もその半分になりたくないのだ。

父親の牛乳売りに、無理矢理ついていった。姉達みたいに父親の役に立ちたかったのだ。その帰りに、ゴブリンに襲われた。父親は殺され、自分は姉達と共に森の奥深くまで運ばれ古い炭坑に入る。
ゴブリン達の視線が、怖い。身体が震える。木の枝で出来た王冠を被ったゴブリンが一言命じれば、きっと私たちは直ぐに食べられる。そんな不安がよぎる。姉たちはもっと絶望していた。少女と違い性知識がある彼女達はゴブリンが何故人を攫うのか知っているからだ。
と、そこへ一風変わったゴブリンがやってきた。人に近い体型のゴ

ブリン。漆黒の全身鎧をまとったゴブリンは少女を指さすと何やら呟く。王冠を被ったゴブリンは一瞬顔をしかめ、しかし鎧ゴブリンが言った何かを了承したのか手をしっし、と振るう。鎧ゴブリンは少女の腕を掴むと歩き出した。

「ひっ!?や、やめて!はな、放してください!」

必死に叫ぶ少女だがしかし鎧ゴブリンは少女の懇願を無視して通路を進む。道中ゴブリンの死骸が転がっていて、逆らう気も失せた。

やがて木の板で出来た扉が現れ、その向こうに放り投げられる。開けた部屋だ。部屋の奥の壁と天の境目に穴があり、光が射し込む。しかし、なんというか。ゴブリンの部屋とは思えない。

ランプがあり、包丁など料理器具があり、鳥などもいる。鎧ゴブリンは火をつけると木組みのベッドに腰をかける。

「……」

「――あ、あの」

言葉は通じないと解っていても、つい尋ねてしまう。不安なのだ、何か話さないと。しかし鎧ゴブリンは何も答えない。沈黙が耳にいたく、と、その時きゅう、と少女の腹が鳴る。

「……」

鎧ゴブリンは部屋の隅の坪の蓋を開ける。取り出したのは生きた魚。腹を捌いて、内臓を取り出すと鳥に与える。魚は、口に棒を刺し塩をつけて焚き火に近付ける。

「あ、あの……」

いい匂いがしてきた。ゴクリと唾を飲みもう一度声かける。返答はない。が、魚が差し出される。少女が受け取ると鎧ゴブリンは坪から再び魚を捕りだし生で内臓ごと喰らい、少女を眺める。少女は魚にかぶりついた。

「――――ん」

特別美味しいというわけではない。塩もこく、所々完全に炭化している。それでも、一心不乱に喰う。そして、漸く涙が流れてくる。父親が殺されたという、受け入れがたい現実を改めて認識する。

「ふ、ぐ……ふぇぇ――うぇぇぇぇぇん!」

泣き喚く少女を見て、心地良い。今すぐにその泣き顔をさらなる苦悶に歪めたくなる。ああ、やはりゴブリンは滅びるべきだな。

そのゴブリンは不思議だった。ゴブリンというのは生で肉を喰うと聞いたのに、料理して喰うのだ。

美味しいけど。けど言葉は解らない。自分はいったい何のために彼に生かされているのだろう？飼われている、と言った方が良い。

鎧ゴブリンは基本的に部屋にいない。ご飯の時と朝に戻ってくるのだ。ゴブリンはもともと夜行性だからだろう。夜の間――ゴブリン達にとっての朝である――は何をしているのだろう？彼につき合ううちに自分もすっかり夜型だ。いや、つき合うも何もお互い完全に無言だし言葉も通じないから勝手に起きてるだけだが。

この部屋にきて十日ほどだろうか？部屋の外には出ていない。何気に固いのだ、あの扉。

「姉さん達、大丈夫かな？」

ゴブリンは思ったより怖くない。姉達も、自分のように美味しいご飯を食べているといいのだが。と、その時扉がガタガタ音を立てて開く。彼が帰ってくるには早い気がするが、と彼の通行の邪魔にならないように壁際に移動する。

「あれ？違うゴブリンさん？」

しかし入ってきたのは鎧ゴブリンではなかった。普通の、小さなゴブリン。自分と同じぐらい。鎧ゴブリンとのやりとりで恐怖も薄らいだ彼女は彼に用事だろうかと特に慌てることなくそのゴブリンを見ると、少女を見たゴブリンがニィ、と笑みを浮かべる。

「――!?」

その笑みに、恐怖が蘇る。本能的に、怖気が走り背を向けて駆け出し壁に立てかけてあった包丁をつかみ振り返る。が、押し倒された。背中を強打し痛みに呻く。ゴブリンはますます楽しそうに笑みを深め、少女の服を引きちぎる。

「い、いや！」
　ベロリと滑った舌が未熟な乳房を這いゾワゾワと膚が泡立つ。暴れても、逃げられない。暴れるのが鬱陶しかったのかゴブリンは少女の顔を殴りつける。
「ＧＵＧＹＡ！ＨＩＧＹＡＧＹＡ！」
「あぐ！うっ！や、やめて――――やめてください！」
　その痛みに涙を流し、恐怖から失禁する少女。その尿の匂いをかいでゲラゲラ笑うゴブリンは腰布をとる。少女の父のそれとは異なり大きく反り返ったそれを露わにして――吹っ飛んだ。
「――ＧＵＧＡＧＹＯＯ!?」
　壁に激突してピクピク痙攣するゴブリン。少女の前では全身鎧の甲冑騎士、顔を隠した鎧ゴブリンが居た。兜に刻まれた一本線からは表情が窺えないが、多分ゴブリンを睨んでいるのだろう。指の先端が鋭い爪のようになっている鎧でゴブリンの頭を握りしめる。持ち上げられジタバタ暴れるゴブリンは、しかし抜け出せない。先程の少女のように。何か喚いているが、鎧ゴブリンは無視する。少女を押し倒したゴブリンのように。
　そのまま何処からか取り出した杭をゴブリンの膝と肘に射し込むと手頃な石を噛ませ、壁に叩きつける。歯が折れ顎の骨が砕けゴボリと血を出すゴブリンは、そのまま部屋の外に投げ捨てられる。
「ＧＵＵＵ――――」
「ひっ!?」
　ゴブリンが迫る。それがどれだけ恐ろしいか理解した少女は目の前のゴブリンに恐怖を抱く。と、ゴブリンは動きを止める。そのまま周囲を見回すと、魚の壺とは別の壺を開ける。果物だ。蜂蜜に漬けていたらしい。それを皿に載せると床に置き少女から距離を取る。
「――――」
「――――」
　それでも少女が動かないと知ると部屋から出ていく。残された少女は怯えながら、しかし小腹が空いてきた。こんな時でも少女の身体は正直だ。果物に手を伸ばし喰らう。甘かった。美味しかった。蜂

蜜のせいで手がベタベタになった。

「――ん、んぅ――？」

少女はムクリと起きあがる。どうやら寝ていたらしい。しかし、何時間に寝台に入ったのだろう？

寝る前の記憶があやふやで、頭が発揮するまで少しかかる。月明かりが天窓から部屋を照らす。夜（朝）だ。確か寝る前は夕方（明け方）だった気がする。一日中寝ていたのだろうか？

「――ッ!!」

と、部屋の中にあのゴブリンが居ることに気付く。ビクリと震えて毛皮のシーツで身体を隠す。

襲ってくる気配は、ない。ゴブリンは立ち上がると部屋から出ていこうとする。自分が起きたから、だろうか？

「あ、あの！」

「――――」

ピタリとゴブリンが止まり、振り返る。

「――あ、あの――えっと――ありがとう」

「――――」

「た、助けてくれて――それと、ごめんなさい」

「――あ、い――あと？」

「――へ？」

不意にくぐもった声が聞こえる。一体誰が？と周囲を見回すもここにはゴブリンと自分しかいない。

「――貴方、ひょっとして言葉が解るの!?」

「――こと、ば――わあ、る――」

「す、すごい――本当に言葉を発してる。ね、ねぇ！お願い、ここから出して！姉さん達に会わせて！」

「ねーさん――あわせて――こ、ことば――」

「――？」

「おえがい――ことば――」

言葉が通じているとしたら、反応がおかしい。これは、完全にオウ

ム返しだ。
「……なんだ、言葉が分かる訳じゃないんだ」
「ことば――わがる――」
「いや、だから言葉が――」
「ことば――こ、とば――こぉどば――」
「……？」
何故、急に言葉と連呼するのだろうか？今までの行動をみる限り意味のない行動をするとは思えないし――。
「……ひょっとして、言葉を覚えたいの？」
「ことば、お……ぼえ、だい――」
少女の反応から、少女の言っている意味を理解したのかその言葉を繰り返すゴブリン。少女は一つ決心をした。

察しのいい子で助かった。あれから、頻繁に話しかけてくるあの子のおかげで人の言葉も覚えてきた。外で拾った炭をあげ絵を描いたりして、それの名前も聞く。だいぶ人の言葉も覚えたと思う。それと、彼女の最後の姉が死んだ。最期まで俺を睨んでいた。俺があの子に何かしていると思っているのだろう。彼女だけが平穏を過ごしたと知ったらどんな――やめよう。
まあ、もう十分だろう。ここにいてもこれ以上強くなることはない。まれにやってくる『渡り』や『はぐれ』を殺してもゴブリン共は消えてなくならない。そろそろ外に出よう。自分がゴブリンだと知る人間は、彼女以外は皆殺しにしよう。そして、この群を滅ぼそう。

ボスは混乱していた。突如群れ最強の戦士が孕み袋を殺したのだ。
戦力増強を期待していたボスは怒り、吼え、ボスの意を汲もうとした英雄が理不尽に斬り殺された。兜のせいで顔は見えないし視線も解らない。なのに、睨まれた気がした。

「■■■■■■■■■■■■■ッ!!」
「「「――――ッ!!」」」

その咆哮に、全ての小鬼が戦慄した。声に含まれた圧倒的な殺意、殺意殺意殺意殺意殺意殺意殺意殺意殺意殺意殺意殺意殺意殺意。群最強で、敵う者のいない戦士が突如群に牙をむいた。直ぐに殺すように命じ、自分は英雄を一人連れ穴の奥に逃げる。女だ、あの女がいる。あの戦士が異様に執着して、他の誰にも手を出させなかった人間の女。あれを使えば逃げられる!と、ドサリと倒れる音がする。こんな時に転んだ英雄に舌打ちしながら振り返ると回転しながら飛んでくる斧が見えた。

次の瞬間にはくるくる回る視界とその端に映る首なしの身体が見え、木の板が砕ける音が聞こえた。

大人達を皆殺しにした。後残るのは子供達だけ。

子供達が隠される部屋は知っている。扉を蹴破り、震える、人間の感性からしてもまだかわいいと言い切れるガキを踏み潰す。仲間の敵でも打ちたいのか石を持って襲いかかってくるガキが一匹。鎧に弾かれ呆然としているそいつの頭を蹴りつける。頭が首から離れ別のガキの頭にぶつかり砕ける。首の骨が折れ頭蓋の破片が顔に刺さりそのガキも死ぬ。残りは二匹。

片方の左腕を切り落とし片方の脚の骨を踏み折る。絶叫が響きわたり目に涙をためるガキども。

――嗚呼、なんて………なんて心地良い!

――叫べ!泣け!絶望し恐怖しろ!その涙こそ味合わずとも天上に誘う極上の甘露!

――苦しめもがけ!嘲笑してやろう、貶めてやろう!

本能が叫ぶ、苦しめろと。理性が笑う、殺せと。怒りが唆す、いたぶり尽くせと。

片腕になった小鬼に見せつけるように足を折った小鬼を痛めつける。内臓を傷つけぬように骨を折る。次はお前だ、そういうように。

首の骨をへし折ると流石に死んだ。次は片腕。逃げようとするが、ニガスモノカ――まず指を切り落として足の裏を骨が剥き出しにナルマデキリオトス。ソノアトハキズツケズオコウ。ソウダ、ユカヲホノオデヤイテオコウ。イタミニクルシミナガラヒッシニハシルサマヲミテアキタラコロス。

ソノタメニ、イチドツカマエテ――

「だ、駄目！」

「――――!?」

その叫びに、思考が蘇る。目の前には震えながら両手を広げる少女。固まっている自分に抱きついてきた。

「お願い！戻って、おかしくなっちゃやだ！」

「――――」

震えている。当然だろう。血に染まった黒鎧の戦士など、恐れない方が無理だ。なのに彼女は自分を止めようとしている。ゴブリンが可哀想だから？ではないだろう。ゴブリンの悪辣さは口が酸っぱくなるほど教えた。

「――だ、だーじょぶ……オチ、オチツイた――へーき、だ」

きっと彼女は自分に他の小鬼と同じようになって欲しくないのだ。他者の苦しみを、嘆きを、悲痛を、恐怖を嘲笑う存在になって欲しくないのだ。

「……」

ガキは逃げた。とはいえこの森は獣が多い。血の匂いを放つ片腕の人間の子供程度の強さのゴブリンの、さらに弱い子供など良い餌だ。ほうっておいても死ぬ。今はこの泣く少女の頭を撫でてやる。

その日奇妙な男が冒険者ギルドの扉を開いた。

肩に幼い少女を乗せた黒甲冑の男。騎士のような格好のその男は周りの視線も気にせず受付に立つ。

「あ、あの……本日はどのようなご用件で？」

「ぼーけんしゃ……登録、きた……」

やけにたどたどしい言葉。頭に顎を乗せている少女はまるで生ま

れたばかりの弟にお姉さんぶるような顔をしてニコニコ笑う。
「ぼ、冒険者登録ですか……あの、出来れば兜を」
「顔、やけど……」
「えっと……」
「お兄ちゃんは顔に大きな火傷があるから、顔を見せたくないの」
「そ、そうなのですか……えっと……文字は書けますか？」
「かけ、ない……よめない――まなびたい。かね、いる？」
「あ、えっと――取り敢えず登録からで。まずは種族や年齢、お名前などを」
「――只人（ヒューム）、21――なまえ――なま、え――――小鬼殺し（ゴブリンスレイヤー）――」

巣の殲滅、蠢く影

ゴブリンシャーマンが率いる群。天然の洞穴に巣を作ったゴブリン達は次は女を手に入れようと下卑た笑みを浮かべる。

もうじき夜になる。近くに村があった。家畜を持って行くついでに女も攫おう。もっとも、ついでは家畜になりそうだが……。ボスは来ない。命令するだけだ。最初に女を使うのもボスだろう。初めてを奪うのが一番楽しいというのに。

嫌悪感、忌避感、敵意、殺意……そんな感情で染まった顔が次の瞬間には破瓜の痛みで歪むのがたまらないのだ。しかしそれを楽しめるのはボスだけ。何時かは今のボスを殺して自分がその座を奪い、楽しもうと考える個体も少なくない。

今夜は曇り空。人間はまず遠くを見渡せない闇の世界。狩が楽に出来る、と笑みを深め洞窟を出ようとして、気づく。森の奥から黒い鎧に身を包んだ者が現れた。微かに感じる匂いは、同胞？と、首を傾げた一体の首がゴトリと落ちる。

「……ＧＩ？」

《死に絶えろ》

「――――!?」

同胞の言葉。やはり同胞。しかしいきなり襲いかかってこられるなど、これまで無かった。『渡り』などがボスになろうとした場合、普通殺すのはボスだけだ。その群を乗っ取るのに数を減らすのは無意味だし、ボスの死に様を見てみたいゴブリン達は基本的に邪魔しないのだから。

だが、感じる殺気は本物。混乱している間にまた一匹殺される。この同胞は、群を乗っ取るのではなく潰す気なのだ！後ろの方にいたゴブリンは目の前の同胞を鎧の異端者に向かって蹴りつける。

同胞が囮になっている内に、ボスに報告を！見たところ一風変わった田舎者（ホブ）。シャーマンであるボスなら近づけずに魔法で焼き払えるだろう。

《女だ！女が来たぞ！しかも一人だ！》

「!?」
　再び鎧の異端者が叫ぶ。洞窟の中まで響く大声。直ぐに欲望のこもった笑みを浮かべる同胞がかけてくる。真正面からぶつかり、どちらもバランスを崩す。そのまま腹を槍が貫く。
「――――!!」
　ゴボリと口から血を吐く。目の前で同じような顔する同胞を睨みつけ、睨み返される。そのまま腹に刺さった槍に力が加えられる。
　慣性の法則でミシミシと槍が振られる逆方向に力が加わり、しかし骨の隙間に入ったそれは肉を千切り抜けることなく激痛を与えながら二匹のゴブリンの頭を壁に叩きつけ潰した。

――――――――――――――――――――

　目の前の光景に混乱するゴブリン。ゴブリンスレイヤーは二叉の矛を投影するとその首に引っ掛け壁に押しつける。
《この群の規模を教えろ。ガキはいるか？》
「――？」
　同胞の言葉。行為と姿から人間の冒険者かと思っていたが改めて確認すれば確かに同胞の匂いがする。冒険者は自分の匂いを隠そうとしない。ゴブリン相手に小細工など必要ない、恥とすら考える。故にゴブリンは匂いを消しているのかなど考えない。実際、匂いは消していないが――。
《じ、１５！１５だ！子供は、いない！まだ、女を見つけてないんだ！お、教えたろ！た、助け――――！》
　ゴキリと首の骨が外れる。これで５匹。残り１０匹。
　ゴブリンは一匹たりとも生かさない。生かせば学習して成長するし、恨みを忘れないゴブリンはいずれ復讐しに来るだろうから。
《おい！女はまだ――――ぱけ!?》
　女と聞いて楽しみたくとも向かった人数から後回しになると考え、せめて犯される様を笑おうと奥で待機していたゴブリンの内一匹が中々連れてこない同胞に痺れを切らしやってくる。腹を蹴りつけ内臓を潰すと引き抜いた二叉矛で頭と頸椎を突き刺す。

残り９匹。
匂いを嗅ぎ、音を聞き、三日月刀（シミター）を投影する。通常のよりそりが大きいその三日月刀（シミター）を無造作に投げつける。
ここは産まれたばかりの巣だ。それでもこれほどの血が流れればその臭いや糞尿の匂いが鼻につく。が、それでもこれほどの血が流れればその匂いに感ずく者も現れる。もとよりゴブリン共からすればそんな匂い、慣れている。少し時期が経てば同胞の血の匂いにすらなれ気付くこともなくなるだろう。
しかしここは生まれたばかりの巣。匂いに気づき、武装したゴブリン達が向かってくる。そして回転する三日月刀（シミター）に首を切り落とされた。
残り８匹。
ゴブリンスレイヤーは街で見た強弓を投影して多少形を変え飛びやすくした剣をつがえる。
彼が持つ、彼だけに許された異世界の力。外なる神より与えられし異能、『無限の剣製（アンリミテッド・ブレード・ワークス）』は本来なら衛宮士郎という少年が持つ異能。
彼は弓道部で、その腕は全国クラス。本来弓矢というのは距離当てるのは難しい。鍛錬期間と才能が必要になる。では、『彼』はどうか？
放った矢は正確無比にゴブリンの頭を貫く。さらに同様の物を三本投影し、同時に放つ。やはりこれらも頭蓋を貫く。それが答えだ。
これで残りは４匹。
彼が『渡り』をしている期間はそこそこあった。修行期間は十分。何より、才能があった。剣も、弓も、槍も、斧も、鎌も。それらに命を預ける獲物達（師）も居た。命を預けた戦い方を、見て覚えた。
それが衛宮士郎（オリジナル）との違いだろう。故に英霊エミヤ（未来のオリジナル）には数格劣る物の、それでも英雄の領域に片足を踏み込んだ戦闘能力を有することが出来た。
――――忌まわしき神に感謝しよう。才能を与えくれたことを。そこだけには
自身を浅ましく、そのくせ自身だけを至高とするくせに強者に媚び

へつらいながらも常に相手を下に見て、悪徳を喜びとし、人の嘆きを悦びとする存在に生まれ変わらせたのは、絶対に許さない。だが才能には素直に感謝してやる。前世からか今世からかは知らないが、おかげでくず共を駆逐できるのだから。

半分は切った。もう既に気付かれたので、隠密を行う理由もなし。

「■■■■■■■■■■■■■■■■ッ!!」

地の底から響くような咆哮。人の口からは、喉からは決して放つことの出来ない咆哮。それはしかし同胞たるゴブリン達すら竦ませる。憎悪が、憤怒が、怨恨が、殺意が、あらゆる己に害をなす感情が込められた咆哮に小鬼達は震え上がる。

直ぐに死が駆ける。地を蹴り、進む。

その間に呪文を唱える。

バチリと雷の矢が形成される。直ぐに成長したそれは、まるで槍のような形となる。残りのゴブリン達が見えてくる。シャーマンが慌てて詠唱するが、遅い。

「――雷槍（サンダーランス）」

放たれる雷の槍。シャーマンに当たり、拡散し近くのゴブリン達も同時に焼く。それが幸いなのか不幸なのか、他の個体より少しは頑丈なシャーマンは耐える。耐えてしまう。しかし身体が動かず激痛に苛まれながら倒れる。

そうだ、死んだふりをしよう。人間は間抜けだ。きっと死んだと思うに違いない。確認しには来るだろう、顔を絶対に覚えてやる。必ず復讐してやる！

自分は見た目だけなら一番ダメージが多い。震えを懸命に止め足音が聞こえてきた方向に意識を向けつつ視線は絶対に合わせない。死んだ仲間を見る。

まったく糞の役にも立たない奴だ。呪文も使えないならせめて呪文を使う自分の盾になるのがどうりだというのにそれすら出来ないとは――！

苛立たしい、この場を乗り切ったら死体をぐちゃぐちゃに――する必要はなくなった。目の前で頭を踏み潰されたから。

（――――ッ!!）
大丈夫だ。大丈夫だ。息を殺せ。反応するな。きっと見逃してくれる。前の時もそうだった。
顔を見るのは諦めよう。そうだ、復讐などまた今度で良い。もう一度群を率いて、己の群を奪ったあの憎き片腕を殺して巣を取り戻し、この辺りの村を滅ぼしてやれば現れるだろう。その時こそ殺せばいい。
グチャ、グチャと頭を潰していく音が聞こえる。これ、死ぬのでは？と、指がピクリと動いた。
「ＧＵＧＩＩＩ!!!!」
音からして最後の死体の頭が潰された。次は自分。逃げ出そうと走り、首が落ちる。体が数歩ペタペタ走り倒れた。

――――――――――――――――――――――――――――――――

「――――ちが、う……な」
ここは依頼にあったゴブリンの巣ではない。攫われた家畜はいない。骨もない。本当に、出来たばかり。いまだに狩すら行っていない群。まあ被害を出す前に殺せただけ僥倖だろう。次は本命だ。全ての死体の心臓や頭蓋を潰した後、外に出る。
「――――」
「ＧＵＧＩＡＡ!?」
「生き残り……ではないな」
洞窟を出た瞬間、入り口の上に潜んでいた小鬼の首を掴み持ち上げる。毒塗りの短剣を必死に刺そうとするが生憎その程度の柔い鋼は投影していない。
《この群の監視か？さっきまで居なかったな、どこから来た》
《!?お、お前田舎者（ホブ）か!?ま、まってくれ助けて！》
《質問に答えろ――――しかし、酷い匂いだ。それで隠れようなどと笑わせる》
鼻が優れた自分や獣人でなくとも気付くほどの匂いに鎧の奥で顔をしかめるゴブリンスレイヤー。

……妙だ。小狡い小鬼がそんなミスをするとは思えない。匂いを消すとは思えないが、これは明らかに匂いを強くしている。

「――お、おまえ、おとりか？」

だいぶ馴れてきた――話したくなかったゴブリン語と違いだいぶ話して既に使った回数が超えた――共通語を思わずつぶやき慌てて周囲を見渡す。小鬼の気配は、ない。と、首を掴まれた小鬼が叫ぶ。

《くそ！何してる！早く来い！》

ゴブリンは囮などにならない。うっかり死ぬかもしれない役職など、途中で逃げ出す。つまり此奴は自分が囮であることを知らなかったのだろう。恐らく自分より地位のある個体に匂いを濃くするように言われてから、監視に向かった。巣の監視は２匹以上居たのだろう。残りか片方は匂いを濃くした奴が囮だと聞かされていたに違いない。その上で、捕まった同胞を笑っていたのだろう。

逃がした……。

《お前の巣は何処だ。さっさと案内しろ――誓うなら、この手は放してやる》

《あ、案内する！助けてくれ！》

手が離される。地面に腰を打ち付けた小鬼は鎧姿の同胞を睨みつけるが逆らわない。何時か殺すと内心誓い、駆け出す。ゴブリンスレイヤーは直ぐその後を追った。「ある程度遅くしてやる。それより遅く、追いつけるようなら首を切り落とす」と脅し文句を付けて。

走って２０分ほど。遺跡を見つける。森人（エルフ）の残した遺跡だろう。が、気配がない。見張りもいない。中に入れば使い捨てられた女が数人。

《あ、あれ？ま、待ってくれ！俺は、本当に――！》

ものぬけ殻の巣を見て混乱する小鬼は、慌てて振り返る。

ドゴン！と小鬼の頭を潰した拳が壁を叩き、人外の膂力が壁に大きな亀裂を走られる。ぐらりと首なしのゴブリンが倒れる。

「――くそが……くぞがぁぁぁ！いき、て、やがった！いぎでやがっだかぁぁ！」

ビリビリと大気が震える。ゴブリンスレイヤーが苛立ったように

吼えたのだ。
ゴブリン共に犯され既に生きるのを諦めガラス玉のように空虚な目をした女性達は漸く顔を上げゴブリンスレイヤーを見る。
ゴブリンスレイヤーが怒りに募らせるのは、この群を率いていたボスではなく、自分。
ボスは何故逃げたのか？群まで連れて。決まっている。報告を聞いて、勝てぬと判断したからだ。ゴブリンが？普通ならあり得ない。
自分こそ至高と考えるゴブリンならばそんなことはしない。監視がつくと言うことはあの群は追い出されたシャーマンが焼き出された『はぐれ』を集めて作ったのだろう。この砦の新たな主は少なくともシャーマンに勝てる実力に加えて監視を付ける知能がある。だからこそ絶対の自信を持つはずだ。その上で逃げた。理由は一つ、勝てないと知っていた。何故？会ったことがあるからだ。ゴブリンスレイヤーの強さを知るからだ。
これまで潰した群の生き残りではないだろう。徹底的に逃がさぬように殺したし、仮に生き残りがいたもても少し強くなれば図に乗る奴等。
だがもしゴブリンスレイヤーが田舎者（ホブ）はもちろん英雄（チャンピオン）さえ複数いる群を滅ぼしたことがあると知っていたら？それなら、逃げる。現戦力で勝ち目がないと判断できるから。
そしてそれを知るゴブリンの生き残りは一匹だけ。あの時片腕を切り落とした子供だ。
浅ましくも己の本能に溺れ、痛めつけようなどと考えた結果がこれだ。恐らく群の規模は数十以上。本来なら村を襲えるレベルには膨れ上がっていたはずだ。それでも堪え、他の巣を定期的に監視して冒険者が近付いていないか調べていた。
それだけならそれこそ金級冒険者を相手にした群の生き残りの可能性も――――そこまで考え首を振る。どちらにしろ自分のせいではない、そう言い訳しそうになっていた。本当に、この脳味噌はつくづく不都合なことを他人のせいにしなくては気が済まないらしい。
女達は動く様子もないので砦を見て回る。群の規模は恐らく７０

程。その内一割ほどが田舎者（ホブ）。英雄（チャンピオン）はいない。問題は、この規模がどうやって逃げたか――外には逃げた足跡はなかった。

「……」

人の骨で作られた玉座を蹴り飛ばす。地下へと続く階段を見つけた。階段を下りて進むと、奇妙な生物が見えた。

人の背丈ほどある眼球。瞼からは触手の先端には、更に眼球。その奥に鏡。

目玉は、この距離でなんの反応も示さない。ゴブリンの足跡も此方に続く。しばし考え、部屋の奥に入る。ギョロリと眼球が蠢き此方を見たが、直ぐに興味を失い前方の入り口に戻す。

ゴブリンだと気付かれたようだ。そして、ゴブリンは通す。足跡は鏡に向かって続く。

「……」

触れようとすると鏡面に手が沈む。伝説に聞く《転移（ゲート）》、その古代の魔法を宿した魔法の鏡と言ったところか。触れて、解析する。使い方は解った。出口は幾つか設定してあるようだが、何処に向かったかは解らない。

しかし、こんな物を小鬼が扱えるとは思えない。手引きした者が居るのだろう。それがあの目玉に鏡の番をさせた。とりあえず鏡は壊した。

「ＢＥＢＥＢＥＨＯＯ!?」

大目玉は叫びながら振り返る。当然だろう、彼、或いは彼女からしたら仲間でなくとも部下か奴隷のはずのゴブリンが重要な道具を壊したのだから。小さな眼球から光線が飛んでくる。それに対してゴブリンは片手をあげるだけ。しかし鎧の中で彼の腕に緑のラインが走り、兜の下で顔をしかめるゴブリンスレイヤー。あれが使える特性上魔力量が多く、かつ進化とともに魔力量も増えていた彼でも魔力が減っていく感覚は好きではない。特にこれは今までで一番消費した。

ゴブリンスレイヤーと大目玉の間に現れたのは鏡。先ほどゴブリンスレイヤーが壊したのと同じ、そして――効果も同じ。出口は大目玉の下。

「ＬＤＥＥＥＲＲＲＲＲＲＲＲ!!!!」
無数の熱線に貫かれる大目玉。己が敵に与える筈のものを自ら味わい、息絶えた。
「いい、ひろいもの――――した」
範囲攻撃などされた時には使えそうだ。海につなげて、地下に広がる巣を沈めたり深海に繋げて水圧で吹っ飛ばすのもありか――このサイズでは前世で見たウォーターカッターは使えそうにないが――。
取り敢えずは、上の女達を村まで送り届けよう。天上を通過した先程の熱線に貫かれた者が数人居たが、生憎とゴブリンスレイヤーは責任感を感じるような脳をしていなかった。しかし精神が直ぐにそんな自分に嫌悪感を覚えた。
面倒だ。きっと自分は『肉の盾』を使うゴブリンを躊躇いなく盾ごと切り裂くだろう。そのたんびに気にしない脳に精神が抗議する。それはとても面倒なことだ。しかし肉体の思うままに行動するなど己が許さない。
「――――おれ、は……人、間だ――――」
己に言い聞かせるように。己の苦悩を見て笑っているのか哀れんでいるのか解らない神に言い聞かせるように共通語でそう呟いた。

ゴブリンスレイヤーの連れの少女は年齢故に冒険者登録は出来ないが冒険者ギルドに頻繁に出入りする。というか一日の大半をそこで過ごす。
理由は本だ。代筆屋に文字を学び、ギルドが保管する閲覧可能な本を読む。未来の記録係になりそうな彼女は本好きもあわせて「司書ちゃん」などと呼ばれていた。今日はギルドの規則について書かれている本を読んでいる。このままギルド職員になってくれるなら、将来有望なのだが……。
「や、司書ちゃん。今日も読書？」
「あ、受付のお姉さん……うん。お兄ちゃん帰ってくるまで…それに、文字覚えるの楽しいし」

「そう。でも、ギルドにおいてある閲覧可能な本も残り少ないし、お兄さんに本屋で買って貰ったら？読み方は私が教えてあげる」
と、長い金髪の受付嬢がニコリと微笑む。司書の兄、ゴブリンスレイヤーと名乗る人物は金を払い妹に文字を学ばせ自分は仕事で金を稼ぐ。その後妹から文字を学んでいる。自分のためにもなるし、悪い話ではないはずだ。が、その言葉にんー、と考え込む司書。
「お兄ちゃんに任せると火の秘薬の上手な使い方とか覚えることになりそう」
「あー……」
確かにあの変わり者なら自分の妹に文字を教わる時、どうせならゴブリン退治に役立つ方法を調べる、とか良いそうだ。
「私が本を買って、それをあげたらお金くれるかな？」
「その方が良いかも……」
「そう。じゃあ、何か欲しい本ある？」
「料理」
「覚えたいの？」
「うん。お兄ちゃん料理うまいんだ。私も作って貰ってばかりじゃなくて、作りたいの」
意外だ、あんなゴブリンゴブリン言ってる全身鎧にそんな家庭的な一面があったのか。
「お兄ちゃん思いなんだね」
「うん。お兄ちゃんは、私の恩人だからね……」
ギルドでも名物になりつつあるゴブリン狂いとマスコット少女。この二人は本当の兄妹ではないらしい。ゴブリンの巣にいた彼女をゴブリンスレイヤーが外の世界に連れ出したのだとか。そして、遠い異国出身の彼は此方の言葉が喋れず、妹が教える。そうして付き合いが長くなりいつの間にか兄妹のような関係になったとか。
「司書ちゃんも冒険者になったりするの？」
「何で？」
「ほら、お兄ちゃんについて行きたいとか……私としては、おすすめしたくないけどお兄さんといれば安全だろうし」

「ゴブリン相手に安全なんてないよ」
「……え」
　と、司書の言葉に固まる受付嬢。
「ゴブリンは狡賢くて卑劣で夜目が利いて暗闇に潜む。安全なんてないよ……それに、私がゴブリンを殺せたらお兄ちゃんに捨てられる」
「え、捨て……え？」
「お兄ちゃんが私の面倒を見てるのは同情でも哀れみでも……罪悪感でもない。責任感に近いけど違う――――償い」
「つ、償い？」
「お兄ちゃんは、私の姉がゴブリンに犯されて、殺されるのを知ってて何もしなかった。その頃の群を潰せないから放置した――助けられるのは一人だけだった。それで、言葉が話せないお兄ちゃんは私を選んだ。子供って単純だから、助けてくれた人をいい人だと思った。お姉ちゃん達も同じような事になってると思った……」
「それは、でも――」
「うん。仕方のないことなんだよね」
　それぐらい解ってる、そういうように頷く司書に、何を言えばいいのか解らない受付嬢。
　誰だって万能ではないのだ。救えない命は存在して、救える命だけを救う。それは、決して間違ってるとは言えない。
「――あれ？でもそれって罪悪感なんじゃ――」
「全然違うよ。そういうのは感じてない。でもそれってほら、やっぱり人間っぽくないでしょ？だから、償い。自分は人間であると言い聞かせるために私に尽くしてるの……」
　ニコリと笑った司書。その瞳は闇よりなお暗く、ゾクリと悪寒が走る。
「……でも、私はそんな薄情で、姉を見殺しにしたお兄ちゃんが、必要なの。村はね、私たちを攫ったゴブリン達とは別のゴブリンに滅ぼされてた」
　この世界ではよくあることだ。小鬼を脅威と認識せず、他の誰かが

ちゃっちゃと倒すと判断して放置され、大きくなった群が村を滅ぼすなど。そうなってから漸く人は動くのだ。
「前の私を知る人は、誰もいない……でも少なくとも、お兄ちゃんだけは私に家族がいたことを覚えてくれてる。だから、お兄ちゃんが居なくなったら前までの全ての関わりが消えるような気になる。私はそうなるのがとても怖い……離れたくない」
　だけど兄はそうではない。あくまで人であり続けるために、罪悪感のない償いをしているだけ。自分が小鬼を殺せるようになれば、トラウマを乗り越えたと判断して置いていくだろう。だけど、自分が弱い間は兄は側にいてくれる。守ってくれる。自分を人間だと言い張るために利用してくれる。
「私はお兄ちゃんを愛してない。だけど大好きだよ。きっとお兄ちゃんも同じだと思う」
　少なくとも私を守っている間は人間のふりが出来るはずなのだから。そんな便利な道具を好きにならないはずがない。ゴブリンは自分に役立つものは大好きなのだから。

　それから二ヶ月ほどが過ぎた。ちょっと前までは受付嬢に買って貰った冒険譚の本を読み聞かせるのが、文字を教えるという形で、彼の役に立つのが日々の楽しみだった。そのためにも本をよく読んでいた。が、今はギルド裏の広場で本を抱え、しかし文字に目を通さない。視線の先には闇をそのまま纏っているかのような漆黒の鎧を着た愛せずとも大好きな、正体を隠した人間になりたいであろうゴブリンと、そのゴブリンに向かって木剣を振り回し蹴り飛ばされる黒髪の少女。黒髪の少女は地面を転がりながらも直ぐに立ち上がり再び駆ける。
　素人目から見ても最初あった時よりずっと強くなっている。その少女の頭を踏みつける人でなし（ゴブリン）。
「どう、した……？兜、したくない言った……なら、頭へのこーげき、くらうな」
「だからって頭踏む普通!?ボクだって女の子なんだぞぉ！」

「ゴブ、リンは……そんなの、きにしな……い」
「ゴブリン限定なんだね。ボクはもっとこう……かっこいい活躍したいよ……」
「お前の村、ほろぼした……ゴブリン……まず、は――倒せるようになれ」
「うん！行くよ、師匠！」
　彼が拾ってきた子供。隻腕の王（ロード）に率いられた群に滅ぼされた村の生き残り。彼が、責任感ではなく償いという形で拾った二人目。
　……早く冒険に出て、ゴブリンに犯されて死なないかなぁ。

未来の勇者

忘れるものか。あの異常者を！
忘れるものか。この恨みを！
彼奴は酷い奴だ！とても酷い奴だ！
何も悪いことをしていない自分達の故郷を滅ぼした！自分の腕を切り落とした！
あれから必死に生きた。獣から逃れるために糞尿で身体を汚し悪臭をつけ、なんとか見つけた群でおこぼれが貰えるように下手に出て、機会をうがって群の長を殺した。
それでも自分は片腕の小鬼。何時命を狙われるどころか、常に狙われている。全く同族だというのにこいつらも酷い奴らである！
だが下手に出ては駄目だ。調子に乗って群のボスの座を奪われては駄目だ。派手に動けばあの漆黒の鎧が来る。同胞達は馬鹿だから絶対に派手に動く。
出来るだけ森の奥に移動して、小さな村から一人ずつ攫う。
小さな村から攫った場合冒険者が来にくいことを学んでいたからだ。
同胞の扱い方も覚えた。ある程度の恐怖と、ある程度の賛辞。これをうまく使えば見下されず、しかし扱える。それと褒美だ。働きが良い者に優先的に抱く権利を与えると良く働く。
だがこれでは駄目だ。群は大きくなった。しかしあの群を滅ぼした彼奴はもっと大きな群を力で実質的に支配していた。彼が命令してこないだけで、誰もが当時のボスより彼の動向に気を使った。
あの群には田舎者（ホブ）や英雄（チャンピオン）達が多数存在した。それでも滅ぼされた。
他の群を襲い、部下にならぬなら殺すか追い出す。追い出した群は監視をつける。一人には嘘で匂いを濃くさせ、一人にはその旨を伝える。するとそいつは面白がると同時に自分は優遇されていると勘違いするのだ。実にやりやすい。
そして、彼奴がきた。直ぐに逃げた。今の戦力では敵わないから。

やたらとえらそうなローブ姿の自分達の言葉が解る奴が用意していた鏡を通る。囮として、田舎者(ホブ)数体と通常種を別の場所に逃がす。長く生きて貰わないと困るから足跡などは部下に消させておいた。

『奴』は頭が良い。逃がすのは少数に、逃げた証拠をしっかり消せば一度は見失うが必ず別れた群を見つけ潰すだろう。あの群も後数日の命か。自信満々に出て行った彼奴等が無様に死ぬと思うと笑いがこみ上げる。

あの群に捕まっていた娘達を村に送り返した後、手掛かりを探す。見つけた。隠されていたが所詮ゴブリン。探せば見つかり、痕跡を追う。そして見つけたのはボロボロな小さな村。

村を襲い、乗っ取ったのだろう。正面から堂々と進むと二匹見張りが反応し、しかしスンスン鼻を鳴らすと顔を見合わせる。『渡り』か、もしくははぐれた村から合流してきたと思ったのだろう。六本の短剣を指で挟むように投影して投げつける。正確に頭や喉を貫き叫び声も上げさせずに絶命させた。

村の塀を越えると中に入る。今は朝、普通のゴブリン達にとっては夜だ。殆ど寝ている。襲撃したばかりの自分達が襲撃されるとは思わなかったのだろう。

《沈黙(サイレンス)》系の呪文が使えないのが悔やまれる。だから一度に多く殺そう。目に見える範囲全てを殺そう。

「投影(トレース)――開始(オン)」

空中に無数の剣が投影される。それは矢よりも速く飛び、ゴブリンの頭蓋を切り裂く。直ぐにその音に気づき残りのゴブリン達が出てくる。

「――――――」

村の中央にたたずむ敵と思わしき相手は一人。それを確認した瞬間小鬼共は仲間の死体が見えていないのかニタニタ笑う。村を滅ぼしたことで増長してるのだろう。喧嘩している個体もいる、おそらく村を襲う前に他の群も取り込んだと言ったところか。

関係ないな。殺す。と、真銀（ミスリル）の剣を取り出す。本来は両手剣のそれをその膂力を持って片手で扱うゴブリンスレイヤー。

無防備に近づいてきた一匹を斬り殺す。下半身と上半身が泣き別れした同胞を見て固まった小鬼を蹴りつける。鉄製の靴が睾丸を潰す。

「ＧＵＧＹＡＡＡＡ!?」

「ＧＹＡＨＡＨＡＨＡ――――ＨＡＢＥ――――!!」

睾丸は剥き出しの内臓だ。それが潰され激痛に叫ぶ仲間をゲラゲラ笑うゴブリンの首が飛ぶ。その様子を間抜けな奴めと笑っていたゴブリンが更に死ぬ。

《何をしている！敵を前に油断するな！》

「「――――!!!」」

「――――む」

と、一体の田舎者（ホブ）が叫ぶ。多少の統率力はあるが完全に脳味噌が筋肉になってそうだな。叱咤しながらも陣形を命じず突っ込んでくる。

王（ロード）にはなれなくとも英雄（チャンピオン）になれる程度の才能はありそうだ。振り下ろされるのはゴブリンスレイヤーが持つ剣より大きなグレートソード。が、所詮鉄の塊。真銀（ミスリル）に比べれば柔い。

切り裂き、クルクル宙を舞うグレートソードの半身を掴み目の前の呆気にとられている喉に突き刺す。ズルリと落ちてきた頭の髪を掴み振り回す。遠心力で飛んだ血に視界を奪われた小鬼達に切りかかると風切り音が聞こえ後退すると鎖が叩きつけられる。巻き込まれたゴブリンが３匹ほど死ぬ。

鎖が接近してきた方向を見ると鎖を引き戻し回転させる田舎者（ホブ）の姿があった。鎖の先端は拳大ほどの鉄球。

呪文を唱え《火球（ファイアボール）》を放つが豪腕を持って回転させた鎖に散らされる。が、問題無い。同時に投げていた自家製の黒色火薬が入った瓶を投げつける。

回転した鎖に砕かれ黒色火薬が飛び散る。周囲に残っていた火花と反応し激しく燃え上がる。生憎と、前世の漫画で得た知識。材料は知っててもも正しい配合は解っていない試作品。大量の炎は生めても

爆発はしない。
「ＧＯＢＵＯＯＲＲ!?」
視界が炎に包まれ混乱する田舎者。その炎をかき分け真銀の剣が頭に突き刺さる。
田舎者残り3、通常種のうち弓2、石斧3、槍3、剣5。
飛んできた矢を撃ち落とし投げた剣の代わりを直ぐに投影する。そのまま足に捕まってきた剣を持った小鬼2匹を切り裂く。その隙に田舎者の一体が丸太を振り下ろしてくる。
「――――」
「ＧＵＢＵＵ――――!――ＧＵＡ!?」
が、遮るように鏡が現れる。関係ない、鏡ごと砕くと丸太を振り抜けば足に激痛が走る。
鏡に腕が半ば程吸い込まれ、吸い込まれた腕は己の足もとに現れ足を砕いていた。そのまま鏡に向かって倒れると己の下半身が見え、しかし直ぐに感覚が消える。切り裂かれていた。
「あ、あと……13ひき……」
そう呟きながらも三日月刀を小鬼弓兵に投げつける。見向きもせずに投げられたそれは見当違いの方向に飛んでいき小鬼弓兵達は笑いながら矢をつがえ――――弧を描き戻ってきた三日月刀に首を切り落とされた。
オリジナルのように特殊な異能があるわけではない。ただ純然たる技術。戻ってきた三日月刀を掴むと先程田舎者の頭に突き刺した真銀の剣を持って突っ込んでくる田舎者。
真銀とただの鉄。斬り合えばどちらが勝るなど一目瞭然。しかしゴブリンスレイヤーはこの世界で誰も使えない狡を使える唯一の存在。三日月刀に緑のラインが走る。
「しぃ――――!」
掛け声とともに放たれる二つの三日月刀。真銀で防ごうとした田舎者だったが一瞬で三等分され首と頭が切り裂かれる。眼球が切り裂かれ視界が闇に染まる。眼球が無事だったら首のない己の顔と上下を切り分けられた顔の下半分が見えたことだろう。

と、武器を手放したゴブリンスレイヤーに剣を持った2匹と石斧を持った3匹が襲いかかってくる。その内石斧持ちの1匹の足を掴み剣持ち2匹を吹き飛ばしその回転の勢いのまま石斧を蹴りつけ後退させ、最後の1匹を肘で打つ。

「ＧＵＧＩＩ!!」

「ＧＯＢＵＧＹＡＲ！」

立ち上がった剣持ちと石斧持ちの片割れ、次の瞬間三日月刀（シミター）がゴブリンスレイヤーの左右に分かれる形になった剣持ちの胴と蹴り飛ばされた石斧持ちの首、肘で殴り飛ばされ落下中だった石斧持ちの胸を切り裂く。

最後の剣持ちは既に逃走を始めていたが、背中に何かがぶつかる。石斧持ちだ。起きあがろうとした瞬間切り裂かれたはずの田舎者（ホブ）のグレードソードに2匹纏めて貫かれた。ゴボゴボと口から血を吐き何かを叫ぼうとするも声が血に沈む小鬼。その首が切り落とされ完全に絶命した。

生き残りがいないか村中探索する。逃げたのは居ないだろう。ゴブリン達は仲間が大量にやられない限り初見の相手を侮る。そこまで広くない村だ。増長もしていたはず。また死に苦しむ様を見たかった筈。故に隠れているのは絶対にいない。そういう生態だから。

戦う前に逃げるとすれば相手の強さを知っているか相手が自分達より多い時だけ。そして、ゴブリンスレイヤーの強さを知るゴブリンは一体だけ。

念の為村周辺に新しい足跡がないか探す。この村に襲撃した時の足跡だけだった。今度は偽装する暇もなかったろうから大丈夫だろう。

後は村の生き残りだ。家々を一つ一つ探して回る。床下を開き部屋の部屋の間に妙な感覚が有れば隠し部屋がないか砕いて時折旦那か妻のへそくりを見つけ懐に納めていく。

井戸の中も覗く。生き残りは、居なさそうだ。後は、まあ死体でも

片付けてやるか――――。と、村の死体を集め出す。奮闘して死んだであろう死体、嬲られて死んだであろう死体、犯されたあと死んだであろう死体。逃げてる途中に死んだであろう死体。女まで死んでいるのは、恐らく興奮していたのだろう。初めて村を手にして羽目を外しすぎた。そんなところだろう。

「――――――」

最後の死体。村の住宅地から離れた、畑の奥の生ゴミ処理用の穴の近くで事切れた女の死体。鼻の良い身としては余り近付きたくはない。蓋が落ちており匂いが広がり難いとは言え全くではないのだ。とはいえ死体を放置などそれこそ非人道的かもしれないと死体に近づき、湿った音と穴の蓋がゴトリと僅かな音を立てる。

「――――――！」

直ぐ様剣を抜くゴブリンスレイヤー。生き残りだ。しかし、どっちの？やはり匂いのせいで解らない。肥溜めでなかっただけマシかと肩をすくめ蓋を開ける。

肉や野菜、魚が腐ったツンとした匂いが湿り気を帯びむわっと顔にかかる。果たしてその穴にいたのは黒髪の少女であった。

よくよく見れば蓋を開けておく支えの棒も穴に落ちている。真っ二つになって。

腐らせるのを早めるために開けていたのだろう。畑仕事をする間は閉じていたのだろう。恐らく近くで死んでいた女は母か姉、この村の規模なら単なる近所もあり得るが、とにかくこの少女を抱え村を逃げ回っていて、矢にいられ倒れた時少女がこの穴に落ちた。その際支えを折って……。結果としてその匂いでゴブリン共から隠れられた。

頭の一部が腫れている。血こそ出ていないが殴られたのだろう。石ではなく木で。

その後この死体の女がゴブリンを突き飛ばし抱き抱えたと言ったところか？何ともまあ、運のいい少女だ。落ちた先も肥溜めじゃないし……きっと神に愛されているのだろう。

取り敢えず酷い匂いだ。死体の足を掴み引きずり、反対の手で抱え

ると井戸の近くに移動させる。そういえば、一応雑菌だらけの場所にいたのだ、解毒剤（アンチドーテ）を飲ませておこう。本来なら毒に合わせたり菌に合わせたりする必要のある薬もこれ一つでどうとでもなるのだからその部分は素晴らしい世界だ。

薬を飲める程度には体力も残ってたようなので井戸から組んだ水をぶっかける。

「ぷは！――――え、な、なに!?何事!?」

日の光の恩恵に預かれぬ暗い地下の闇に冷やされた冷水を浴び、慌てて目を覚ます少女。キョロキョロと周囲を見回し此方を見下ろすゴブリンスレイヤーに気付く。取り敢えず「ど、どうも――」と困惑しながら手を挙げ、彼の足下に転がっている近所のお姉さんの死体を見つける。

さて、知人の死体と血だらけの鎧姿の人物。普通の人間はどんな反応をするのか？答は簡単だ。目の前の相手こそが犯人だと思うだろう。そして、怯える。ゴブリンスレイヤーとしては別段それでも良い。どうせ生き残りは彼女だけ、怯える子供と漆黒の鎧騎士なんて衛兵を呼ばれる待ったなしの状況でも説明なんてしなくてすむし――。

「――――ッ！」

が、予想外の事が一つ。少女の目に浮かぶのは恐怖ではなく怒り。次の瞬間ゴブリンスレイヤーの横を駆け抜ける。振り返った瞬間石が飛んできた。とっさに短剣を抜き弾こうとするが、無い。よく見れば少女が持っていた。あの一瞬で奪ったのか。

感心している間に少女が突っ込んでくる。遅い。所詮は子供だ。それも女。ゴブリンと同等程度。とはいえ武装しているし、頭に血が上っている。一度気絶させるかと無造作に蹴りを放つ。狙いは腹。

「あぐ――!?」

「――――！」

が、蹴りが当たる前に少女が転ぶ。素人故に体格差も考えず突き刺そうと構えていた短剣は倒れる彼女の体重を乗せてどんな確率か足首を稼働させるための隙間に向かう。

直ぐに足を引き戻す。このまま少女が倒れて胸に柄を食い込ませ

肺の中の空気を吐くことになるかと思えば少女は直ぐに頭を下げ肩から地面にぶつかり転がると勢いそのまま立ち上がり速度を殺さず突っ込んできた。
運は勿論咄嗟の判断力もあるらしい。が、武器を投げ捨てたのは悪手である。元よりない勝ち目を完全に捨てた。
顔を逸らし飛んできた短刀をかわす。と、胸に何かが引っかかる。
井戸をくむバケツに繋がるロープだ。引っ張っているのは少女。
「――ぬ、お……!!」
短刀は意識をそらすためだったのだろう。予期せず加わった力にバランスを崩すゴブリンスレイヤー。先端に鉄球が付いた鎖を投影し井戸を囲む柱に引っ掛け落ちるのを止める。
井戸の闇に飲まれかけた上半身を地上に引き戻すと背を向けて逃げる少女。距離からして、バランスを崩した時点で走り出していたのだろう。勝つのではなく、生きる方法を選んだ。
「――――ほぉ」
鎧の下で、鋭い牙の並んだ口がグチリと歪む。やはり判断力がある。判断速度だけでなく、彼我の差もきちんと考えている。加えて、出目が良いのだろう。運も高く、動きからして才能もあるだろう。どの程度かは鍛えなくては解らんが。
と、こちらに意識を向けていたからかゴブリンの死体の血に足を取られすっころぶ。そのゴブリンの死体を見て漸く昨日のことを思い出したのか目を見開き固まり、ゴブリンスレイヤーを見る。その目には罪悪感が浮かぶ。
「あ、あの……ボク――――」
「きに、するな――あやま、りたい……なら、うめる、手伝え」
そういって何処からともなくスコップを取り出すゴブリンスレイヤー。村を失ったばかりの生き残りに村人の死体を埋めさせるなんて普通の感性からしたら顔をしかめるかゴブリンスレイヤーに殴りかかるか、どちらかだろう。とはいえ負い目もある少女。それに、彼女も知人友人家族には安らかに眠って欲しい。小一時間ほどで埋葬は終わった。

「――それ、で……どう、する？」
異国出身だというそのお兄さんは喋り方がたどたどしい。が、子供からすればむしろ聞き取りやすい。
「どうする、って？」
「寺、院に……せわになる、か……ふく、しゅう――したい、なら……鍛えて、やる……」
「え、っと……」
このご時世寺院の世話になる子供は少なくない。そうしてやがては修道女だの修道士だの神父や神官になっていくのだ。奇跡を行える回数が多い天才なら聖女などと呼ばれる存在になるだろう。
しかし、だ。決まってそういうところは規律が厳しい。自由が少ない。いや、お世話になるのだからそれは仕方ないとは思うが、自分はこんな性格だ。きっと適当な理由でホイホイ破る。
じぃ、と隣の漆黒全身鎧を見る。冒険者、なのだろう。話に聞いていたのとはずいぶん印象が異なるが……。
「……鍛える、ってさ……強くなれる？」
「なれ、る……お前、に……は才能――ある」
「そっか……」
敵討ちは、必要ないだろう。彼がこの村を襲ったゴブリンを殺し尽くしてくれたらしいし。とはいえ、冒険者には憧れる。
「うん。じゃあ、宜しく師匠！」

その後ちょっと……いや、かなり後悔する羽目になった。
ゴブリン共は暗闇の中で襲ってくる。目が見えない状態でも戦えるように訓練すると目隠しされた状態で森の中で修行。
あんな甲冑姿で殆ど音を立てずに木剣を打ち付けてくる。オマケに罠まであるのだ。気付けば音だけで周囲の地形を把握できるようになっていた。
次に洞窟内で爆音があると耳が聞こえなくなるからとわざわざ

《沈黙(サイレンス)》の巻物(スクロール)を持ってきて目も見えず音も聞こえぬ状態で攻撃をかわす訓練。ある程度避けられるようになってきて、方法を聞かれたら「勘!」と元気良く答えた。次の日の修行でしこたま殴られた。解せぬ。

曖昧なものに頼るな、気配を感じろ、との事だ。気配を感じるのは曖昧ではないのかと尋ねればそこに在るものを感じるだけが曖昧なはずあるかと言われた。良く解らないが一ヶ月ほどすれば解ってきた。

そこまで出来て漸く剣を振るという冒険者らしい修行が許された。師匠であるゴブリンスレイヤーの戦い方は平時ではその膂力にものを言わせて片手に両手剣、片方の手で投げナイフなどを扱う。というか武器をどっからか出して色んな戦法を取る。三日月刀(シミター)が木々の隙間を通り襲いかかって来た時はどんな魔法かと思ったが地形を把握して角度と回転速度を決めれば誰でも行えるらしい。やってみたけど一週間経った今でも止まっている的にしか当たらないし5回に1回しか成功しない。

戦い方を聞かれた時はやはり剣を片手にと言ってみる。短剣を渡された。もっと長いのが良いというと洞窟に連れて行かれ一日中素振りさせられた。

天上や壁にぶつけ何度も取り落としたが肘を胴に近づけ腰で振るというやり方を覚える。呆れたように許可をくれた。恐らく諦めさせたかったのだろう。勝った!と思わずにやけてしまった。

洞窟内での戦闘訓練にもなれてくると遺跡内部の大部屋や広い洞窟など剣がキチンと振れる場所での戦闘訓練。要するに、好きに振るって良いとの事。

広場で早速飛びかかる。勿論木剣で。

直ぐに地面に転がされた。昼になりゴブリンスレイヤーは「飯……」と呟きお金を置いてどっかに行ってしまった。

「……」

「……」

残されたのは自分と同じく彼に拾われたらしい、皆には司書ちゃん

と呼ばれる本好きの少女。
何となく嫌われてるなぁ、とは解るけどまあこれから一緒に過ごすんだ。仲良くなれるだろう、うん！仲良くしよう！

隻腕の王（ロード）が率いた、とはギルドに報告したが厳密には率いていたが正しかったか、そもそもまだ推測なんだし、と今更ながら考えるゴブリンスレイヤー。
まあどうでも良い。今は道具をより強く成長させる。あれは役に立つ。15になったら冒険者登録をさせゴブリンの巣に向かわせる。勿論自分とは別の巣に。そのためにも単体で巣を殲滅できる程度には強くなって貰いたい。
問題は剣術か――――。と、ゴブリンスレイヤーは考える。
彼は一度みた剣術なら一ヶ月程度である程度は再現できる。しかしそれは十全ではない。だから数多の武器を生み出せるという異能を用いた多数の手法で押し切るのだ。
彼女にそんな力はないから、剣を極めさせるべきだ。何処かに剣の師がいればいいのだが生憎とこの街に自分より強い奴など居やしない。弟子との修行風景を見て彼女達を解放しろと、虐待者扱いしてきた冒険者を半殺しにした。彼はこの街で一番強い剣の使い手。自分も剣で応戦してやった。まず間違いなく、残念ながら自分はこの街最強である。
ちなみにその青年剣士は幼馴染の女魔法使いと共に故郷に引き返した。雑魚狩り専門と揶揄される相手に為すすべもなく手加減まされ見逃されたのが相当堪えたのだろう。あの時の顔を思い出してしまうと、どうしたって笑える。自分はそういう生き物だから。
首を振り忘れることにした。今は取り敢えず弟子の育成だ。

さて、そんな風に弟子の育成に悩んでいるゴブリンスレイヤーを余所にここではない何処かで神々がダイスを振るっていました。

結果、『彼』の弟子に新しい師匠がつくことが決まりました。それだけなら良いのだが、なんというか関係ないはずの……いえ、まあ関係ないとは言い切れないはずの『彼』にも大きな影響がありました。というか『彼』との関係で《偶然》師事を得られたと言うべきでしょう。

何せその剣の師になりそうな相手は王都に住む剣術道場の師範にして現《剣聖》です。

『彼』の剣技も向上できる存在で在ると同時に、その弟子の一人に真銀（ミスリル）の剣を持ち冒険者になった者も居た。そう、真銀。彼が好んで使う剣はそれの投影品――――神々はどうなるどうなるとワクワクドキドキ。

正直『彼』に関しては神々も良く解りません。作った覚えのない歪な在り方。与えた覚えのない異端の力。

神々は怪物も人も嫌いではありません。怪物とも人とも言えぬ『彼』の事だって大好きです。最近はやたらと出目の引きが良い――――というかどん引きするほど良い女の子を弟子にしてました。『彼』が、彼女達がどうなっていくのかは神々にだって解りません。だって、神々はダイスの出目を弄ったりしないのですから。だから彼等が進む道をワクワクと眺めます。

そして、そんな神々ですら気付かぬ――――気付けぬ領域から見下ろす別の神がおりました。

彼／彼女はダイスを振りません。彼／彼女はただの傍観者です。流れが変わっていく世界を、外れていく世界を見て楽しそうに笑みを浮かべていました。

昇級と剣聖

今日も今日とてゴブリン退治。

何時ものように村人に感謝され、ギルドのある街に戻る。

全身漆黒の鎧という目立つ装備に加えて常にゴブリンを殺しにいく彼は当初は金にものを言わせて装備を揃えたが冒険できない貴族、運良く何処かの遺跡から鎧を見つけることが出来た弱虫などと揶揄されていたが、この街最強の一角を完膚無きまでに圧倒してからは余計距離を取られている。侮辱していた自覚がある者達が、報復を恐れているのだ。

勿論ゴブリンスレイヤーはそんなことしないが。だってどうでも良いし。

とまれ、ゴブリンスレイヤーは街での評判はそんなに良くない。ただし街では、だ。先も述べたように近隣の村々では感謝されている。彼に憧れ弟子入りを志願した者は、残念ながら気配を感じ取るという試験を越えられず村に帰る。

目隠しや音が聞こえない状態なら、まだ見込みがある奴はいるのだが気配を感知できたのは今のところ彼の一番弟子だけ。

その彼女もメキメキ腕を上げ今や冒険者でも彼女を超える者は少ない。直ぐに抜かれるだろう。

優秀な弟子を得たゴブリンスレイヤーも己の技術を見直し改良している。が、勝敗を文字通り時の運で左右されることが多い。殺し合いともなれば別だろうが、ルールありでは弟子が勝つ回数も増えてきた。

年齢制限がもどかしい。とっととゴブリンの巣に突っ込んで殺しに行かせたい。まあ問題無いとは思うが最初は付き添うが。

「早くゴブリン退治行けばいいのに」とはゴブリンスレイヤーのもう一人の保護対象、弟子からは姉ちゃんと呼ばれている司書からの言葉だ。

「し、昇、級……しん、さ?」

何時ものようにゴブリン退治の報告をしたゴブリンスレイヤーは弟子に水没した箇所のある遺跡にゴブリンが住み着いた時に備えて鎧を着せたまま河に落とすか、などと次のことを考えていたら受付嬢からそんな話をされた。

昇級。つまりはランクアップだ。

「興味、ない。い、ま……から弟子、河に落とす」

「いえ出来れば受けて欲しくて……え、今なんて？」

「修行、を……してくる。もう、良い？」

「いや、ですから修行内容を――！ではなく、昇級に――いや、でも結構聞き逃せない内容――ああ、もう！」

ギルド職員としての仕事とまともな感性を持つ一般人としての行動の板挟みで混乱する受付嬢。彼が来てから頭を抱えることが多くなった気がする。

「その、実は都から《剣聖》様が来ていて、一目みたいと……時間を取らせないために昇級審査に混じる、と――」

「――けん、せい？」

「はい。あの《剣聖》様です」

「……知らん」

ゴブリンスレイヤーのあっけらかんとした言葉にパクパク口を開く受付嬢。と、ゴブリンスレイヤーの腕をクイクイ引く者がいた。司書だ。

「剣聖は、その代で最も剣を極めたとされる一代一人限りの称号だよ。今は王都に道場を作ってる」

「そうなのか……」

「うん。役に、たった？」

「たった」、そういって頭を撫でてやると目を細める。次いで「これ、で彼奴に本格的……剣の修行をつけてやれる、かも」と言うと一瞬笑みが消えたが気付いた者は居なかった。

「めん、だん……するな、ら……一つ、叶えて欲しい願い、ある…と…伝えといてくれ」

「剣聖様にお願いするんですか」

普通なら、一介の冒険者が一目会えるならどんな要求だって飲むような相手に逆に要求をするなんてやっぱりこの人普通じゃない、と呆れる受付嬢。

というかそもそも身元不明の身で昇級できること事態、かなり幸運なことなのに理解しているのだろうか？してないだろうな。というか彼ならゴブリンの依頼を受けられるから一生白磁級で良いとか言い出しかねない。というか絶対思っている。

変な人だなぁ、とギルド職員であり至高神に仕える監督官は目の前の漆黒鎧を見つめる。

装備は良いのに何時もゴブリン退治。それは周辺の村々としては助かっている。彼の妹のような存在である司書ちゃんも最近ではほぼ職員のようなもので資料の整理もしてくれるし――その中からゴブリンの可能性があるものを依頼が出る前にゴブリンスレイヤーに教えたりする――ギルドへの貢献率は高い。それでも身元不明だ。そういう場合、少しでも警戒を減らそうと出来る限り装いまじめに見せて来るものだが……しかも今回は彼の剣聖までいるのに。

「えっと――では今更ですが、貴方は過去犯罪行為を行ったことはありますか？」

本当に、今更だ。とはいえ白磁等級には犯罪者や逃亡農奴だってなれる。簡単になれる。しかし階級があがればあがるほどその紹介するギルドの責任も強くなる。まあ多少犯罪行為に手を染めていても、ギルドに来てからの行動を見れば余程の犯罪歴でない限り大丈夫だろうが……。

「……人、何人か殺した。住んでる場、踏み……込まれ、殺されそうになった。こっち、から、殺す……に行ったこと、ない」

「……」

嘘ではない。《看破（センス・ライ）》……嘘を見抜く奇跡はそう判断を下した。

「では、次は私から……良いかな？」

「構わない」

ズッシリと存在感を感じさせる声が響く。剣聖が口を開いたのだ。
今回は鎧を着ていないが引き締まった筋肉は手入れしてない剣なら弾きそうだな、という感想まで抱く。
「君の持つ真銀（ミスリル）の剣……それは私が嘗て弟子に渡した者だ。彼と君の関係は？」
「……師、の一人？戦い方、学ばせてもらった……剣、は……ゴブリンの巣の中……拾った」
「……」
チラリと此方を見てくる剣聖。真偽を問うて居るのだろう。監督官は頷く。嘘ではない。
「なる程……ゴブリンは新人をもっとも殺す怪物だから油断するなと伝えていたはずだが、それを実行できる弟子のなんと少ないことか。その剣は、君が貰ってくれて構わない。ゴブリンが上位種に存在しなくて助かった」
「か、感謝……する」
あ、嘘だ。感謝してない。まあ、その点は別に良いか。長い間使っていればもう自分の物だと思っても誰も文句は言えまい。
「ちなみに、話を切く限り君はとても只人（ヒューム）とは思えない身体能力をしているようだが」
ゴブリンスレイヤーはチラリと監督官を見た、ような気がする。兜のせいで解らない。
「俺、は……俺は、只人（ヒューム）だ」
「……？」
何だろう、これは。嘘？本当？至高神も判断に迷っている？
初めての感覚に首を傾げる監督官。とはいえ、嘘……ではない。本人はそれを嘘だと思っていない、とか？自分が違う種族であると知りながら育ててくれた両親が只人（ヒューム）とか？
取り敢えず本当ではないが、嘘ではない。至高神様は彼を人間ではないと言い切れてない。そう判断するべきだろうか？と、迷っているとじゃあ只人（ヒューム）ってことで、と聞こえたような気がして、嘘ではないという反応になった。

「……えっと、只人（ヒューム）です」
「そうですか……まあ、闇人（ダークエルフ）みたいに混沌の勢力だったりする人も居ますし、たとえ只人（ヒューム）で無かったとしてもその事で責めることは無かったんですがね」
「そうなのか」
「はい。取り敢えず、黒曜等級への昇級は問題在りません」
「そう、か。では、本題……入ろう」
　と、大して悦ぶこともなく剣聖に視線を向けるゴブリンスレイヤー。そういえば面会する代わりに何か要求をするのだったか、何を要求するのだろうか？
「弟子に、剣術教えて……欲しい。俺、は、所詮猿真似」
「ほう、戦い方を学んだというのは見て学んだという事か？徒党（パーティー）を組んでいたか？」
「冒険者に、なる前の話、だ」
　嘘ではない。彼、冒険者になる前から戦闘経験があるのか。そりゃ白磁等級では考えられない強さを持つはずだ。
「弟子？貴方の弟子だろう？良いのか？」
「少しでも性能、上げておく。あれは、どのみち長く持つ……なら、仕事の速度を上げておきたい。俺が鍛える、などと……拘らない」
「……ふむ。素質は？」
「ある。志願してしてきた奴等、駄目だった。彼奴、全部こなした……」
「……」
　剣聖は顎に手を当て考える。性能、仕事の速度……おそらく彼は弟子をゴブリン退治の専門家にしようとしているのだろう。己と同じように。そこに別に文句はない。自分の流派が雑魚狩りに使われる？その雑魚こそ村々にもっとも被害を与えていると言っても良いのだ。是非もない。
　彼自身も自分で鍛えるという拘りはないらしい。
「解った。預かればいいか？それとも、貴方も来るか？見て覚えたと言うが、貴方自身本格的に学ぶ気があるなら歓迎するが」

「……」
顎に手を当てる。思案しているのだろう。彼の剣聖の誘いだ、断る方がどうかしているが彼は剣聖について知らなかったらしいし、ゴブリン殺しが趣味だ。王都周辺にいないとは言わないが辺境に比べれば本当に稀だろう。

さて、そんなゴブリンスレイヤーとしての感想だが、迷っている理由は別だ。
そもそも彼はその性質上人の命を省みない。自分が修行している間に村が滅びる。そんなことどうでも良い。結果的に自分の技量と将来の道具の性能が上がればゴブリン共を殺し尽くせる可能性があがる。
結果さえ伴えば過程など気にしない。本当に、全く、その間誰が不幸になろうと……と、そんな己の心境に首を振る。心の中で俺は人間だ、と呟く。
「……わか、った――俺も、弟子入り、する」
人が多いところでは正体がバレる可能性も出る。が、王都……王都だ。こんな辺境で見れる剣よりずっと良質な剣が揃っていることだろう。ともすれば鉱人（ドワーフ）の鍛えた剣や、念願の魔剣の類が見れるかもしれない。それは剣術を鍛える以上に己を強化できる。
「王、都の……武器を、みたい――良いか？」
「ふむ。武器を替えるのか？」
「いや――興味が、在るだけ……だ」
「ほほう。そういうことなら、家に代々伝わる古い剣がある。私も、父も、祖父もその剣を使い冒険や戦争に出て、剣聖になった。見てみるかね？」
「是非……」

「明日、昼から――――王都へ向かう。途中、水の街よる――――質問は？」
「えっと……取り敢えず何でボク河に落とされそうになってるの？」
橋の側壁。ゴブリンスレイヤーは己の弟子を猫のように掴みぶら下げていた。その普通なら衛兵が駆けつける状況も町民は何だ、ゴブリンスレイヤーとその弟子かとスルーしていく。最近、自分が師匠のせいで非常識人扱いされている気がする。心外だ、師匠はともかく自分は違うのに。
「修行。説明し、たはず」
「あ、うん……まあ……」
何でもゴブリン退治に遺跡に行ったら所々水没していたとか。水の中は進みづらく、鎧の重さで泳ぎにくい。かといってゴブリンの居る場所でいちいち脱ぐのは自殺行為。あと水の中での気配の感じ方も覚えてこいとのことだ。それと水の中で長く活動できるようにこれから毎朝桶に顔を突っ込むらしい。
「いやぁ、あのさ……これから剣の修行も控えてるんだから風邪引くようなことは控えて――――」
ポイ、と投げられた。襲いかかる浮遊感。腹の奥がひゅ、とした。
「絶対許さないからなぁ！覚えてろぉぉぉ！」
と捨て台詞を残してドボンと水柱があがる。水を吸った布と鎧の重さであぷあぷ沈む。結局その日は飛び込んできたゴブリンスレイヤーに助けられた。何気に彼は全身鎧で泳げるらしい。彼は少なくとも自分に出来ないことはやらせないのだ……。
つまり裏を返せば、自分も出来るようになると期待されているという事。弟子入りを志願した村の子達は皆帰ってしまったからなぁと弟妹弟子達の顔を思い出そうとして、やめた。覚えてない。
まずは気配を感じるという初歩が出来ずに挫折した皆。まあ、憧れが本物なら別の形で冒険者を目指していることだろう。それにしても、冒険者になるって大変なんだなぁ……。

水の街。
大きな街だ。何せ数年前魔神王を倒した徒党（パーティー）の一人、剣の乙女が居る神殿まであるのだ。街並みも美しく、観光客も多い。
ゴブリンスレイヤーはそんな感想など抱かず早速剣を見に行った。こういう時剣聖が便利だ。黒曜等級という駆け出しから漸く抜けたとも、抜けてないとも言い切れぬ等級では金がないと思われるし見下される。彼がいれば店の奥から良い武器も見繕われる。
「……どれか、買ってやろう、か？」
「え？」
「……ん？」
鎧などは買ってやったが武器はまだ。弟子にプレゼントしてやろうと振り返ればそこには先程立ち寄った本屋で貰った本を抱える司書だけ。弟子の奔放さに頭を抱えるゴブリンスレイヤー。
ゴブリンスレイヤーの弟子に近い年の娘が居るらしく、プレゼントとして剣を選んでいる剣聖に一声駆けて街を散策することにした。
「お兄ちゃん、手を繋いで良い？」
「ん？ああ……人、多い、しな……良いぞ」

久方ぶりに二人きり。司書はこの時初めて彼の弟子に感謝した。
とは言え、だ。彼の特別になるかもしれず、彼の中で自分を薄くするかもしれない、彼の中で自分の家族に対する負い目を消させるかもしれないあの女はやはり好きになれない。
が、それでも彼にとっては有用な道具なのだと理解している。勝手にいなくなるなと思うし、死なれるようなことも困ると考えるようにはなった。
要するにだ、彼の優先度を変えなくてはならない。人のふりをするために償いという形で世話をしている自分より同じく償いと、将来役立つから共にいる彼の弟子とではどちらが優先されるかなど分かり

切った事。ならば彼の役に立てばいい。家族を見殺しにしてすまなかったと、言い続けてやるぐらいには彼の中で価値が無くてはいけない。

そのためには知識だ。前にも受付嬢に言ったがゴブリンに勝てるようになるわけには行かないのだ。だから彼に役立ちかつ戦わない方向で己を磨かなくては。

しかし彼奴何処行った？

剣の乙女、そう呼ばれる世界有数の金等級冒険者は現在大司教（アークビショップ）。

女神のような美しさを持ち、目元を黒い眼帯で隠した美しい女性。何時ものように祈りを捧げる。この街をお守りくださいと、そして、あの怪物からどうか自分をお守りくださいと。と、その時だった。

「こんにちはー！」

「……？」

元気な声が響く。気配は、無かった。というかこの聖域に入ろうとする信徒などまず居ないし、そもそも立ち入り禁止だ。なのに聞こえた少女の声。振り返ると気配がゆっくりと現れる。

「こんにちはー！」

「えっと……こんにちは？貴方は？何処から来たのですか？」

「田舎の方から。師匠と一緒に来たんだけど、こんな大きい神殿見たこと無かったからさ。ちょっと覗こうかなって」

「そう。ですがここは立ち入り禁止です。見つかったら、怒られてしまいますよ？」

「え？そうなの？」

と、首を傾げる少女。剣の乙女にはその姿は見えないが音で、気配でだいたい察する。それ故に、先程まで少女の存在を感じ取れなかったことに僅かな緊張を覚える。

「解っていたからこそ、気配を消していたのでは？」

「え？気配は消せないでしょ？」

「？消せない？」
「師匠が言ってたんだ。『小鬼は鼻が利く、夜目も利く、それらは騙せる。けど気配は消せない』って」
「――――ッ」
　小鬼と聞き、自身の身体が強ばるのが解る。声こそかなり幼く、明るさを感じさせる少女だがここまで接近して自分に存在を気付かせない。いったい何者だろうかと警戒する。
「『だから溶け込ませろ。そこにその気配があって当たり前と思わせろ』ってね……」
「何故、それを行いながらここへ？」
「師匠ったら初めての都会なのに観光する気ないんだよ？ボクは観光したかったからね。気配を溶け込ませて、逃げて来ちゃった。ここが立ち入り禁止だとは知らなかったんだ。ごめんよ、すぐに出て行くよ」
　嘘は、ない。これでも至高神に使える身。嘘を見抜く奇跡をこっそり発動する程度訳はない。
「では、帰りは私が送りましょう。かわいい未来の冒険者さん」
「あれ？ボク冒険者の弟子って言ったっけ？」
「ゴブリンを退治するのは何時だって冒険者ですから」
　何せ2、3回冒険者を送れば倒せてしまうのがゴブリンだ。国はまず動かない。初耳なのかふーん、と返す少女。
「変なの。ゴブリンって、すっごく怖いのにね」
「どうして、そう思うの？」
「……ボクの村。ゴブリンに滅ぼされたから」
「……ごめんなさい」
「んーん。気にしないでいいよ。師匠にも言ったけど、悪いのはゴブリン。あれはほっとくと村を滅ぼす。だから、師匠はゴブリン専門の冒険者なんだよね」
「ゴブリン、専門……？」
　「うん！」と誇らしげに返答する少女。ゴブリン専門などと、普通なら馬鹿にして見下しそうな者だが彼女にとってそれは誇るべき事ら

しい。
「本当はね。師匠や姉ちゃんと一緒に冒険したいんだぁ。遺跡を探索して、ドラゴンを倒して……でもそれをしてる間にゴブリンは村を襲う、女を攫う。だから師匠みたいにゴブリンを確実に殺せるベテランが必要なのは、ま、解るんだけどね……」
「……きっと、一緒に冒険できますよ?」
「そうかな?そうだと良いなぁ」
そうこう話している間に神殿の出口。自分の姿を遠巻きに眺める視線を感じつつ、少女と共に外に出る。と、少女が「あ!」と声を上げる。知り合いを、姉か師匠、あるいは両方を見つけたのだろう。
「勝手に、動き、回る……な」
何処かたどたどしい言葉遣い。目隠しをとり目を開く。輪郭しか見えない目だが、鎧姿らしいのは何となく解った。ぼやけた像が濃く映るのは黒かそれに近い色合いの鎧を着ているからだろう。
「師匠、姉ちゃん、ごめんなさい……あのおじさんは?」
「一、度……別れた。その、女は?」
と、己の弟子の近くにいた自分に意識を向けてくる男。
「剣の乙女と呼ばれている者です」
「お前、が……そうか。迷惑を、かけた……すまん。俺、はゴブリンスレイヤー」
「ゴブリンスレイヤー……」
名乗り終えると話は終わりだとばかりに少女に拳骨一つ落として歩き出す。
残された剣の乙女は再び彼の名乗った名を呟く。
小鬼(ゴブリン)を殺害(スレイ)する者。自分からすれば、何とも素敵な相手の筈だ。しかし、しかしだ……自室に戻り、倒れるように膝を突き息を吐く。
何故だろうか?彼が、とても恐ろしくてたまらない。叶うことならこの出会いが最初で最後の邂逅になるように心の底から願う。
数年後どうしても彼を呼ぶべき事件が起き、しかし名乗りは同じ、だが彼とは別の人物が来た時彼女は安堵とも落胆とも付かぬ感情を覚えることになる。

未来の剣聖と賢者の日記

○月×日

お父様が変なのを連れてきました。え？お客様を変なの扱いは良くない？

ですが、本当に変なのです。全身黒い鎧をした、一見すると騎士。しかし冒険者なのだとか……。冒険者といえば顔を売るのも仕事の内と言わんばかりに顔を売ろうとする者が殆ど。顔を隠す者などまずいない。少なくとも私の常識では。

彼はお父様の弟子の一人の遺品を拾ってくれたのだとか。ゴブリンにやられたそうです。その報告に、お父様の弟子達は憤慨してました。ゴブリンではなく、殺された弟子に。笑っている人もいました。同門が殺されたというのに。

お客様の名前はゴブリンスレイヤーというらしいです。名前からしてゴブリン専門の退治屋。お父様の剣術を学びゴブリン退治にいかすのだとか……後、お父様の《剣聖》という立場を使いいろんな剣を見てみたい、とも。

何だ此奴、それが私の感想でした。別にそれ以外はありませんでしたがお父様の弟子達はお父様の剣術がゴブリン退治に使われるなんて！と怒り、挑み、返り討ちにされました。

お父様の剣術に比べれば余りに拙く、それでも数年修行している者よりずっと美麗。ゴブリンスレイヤーさん曰わく見て覚えた、使い手が良かったとの事でした。見ただけであそこまで使えるなんて、本格的に学んだらどうなるのでしょうか？

○月△日

ゴブリンスレイヤーさんのお弟子さんと剣を打ち合うことになりました。私だけではありません。他の弟子達も。

何でもゴブリンスレイヤーさんが本格的に学ばせたいのはむしろ此方なのだとか。ゴブリンスレイヤーさんは独学で既に師範代行クラスなのでお父様と修行しに、残されたお弟子さんに昨日の鬱憤を晴らそうと考える浅ましい者達も居ました。私の制止を無視して「時間

がもったいないから一度にやろう！」と挑発……挑発？
それで勝ってしまうのだから本人は本音を言っていただけかもしれませんね。小柄な体型を生かしてかわして、打ち合って、武器を叩き落としたら拾って投げて、壁や天井すら足場に代えて……。というか後ろからの完全な不意打ちを見もせずかわすってどういう気配察知能力してるんでしょう？
その後ゴブリンスレイヤーさんの妹さん？にちょっかいかけようとした者も居たそうですが、察したのか主に人気のある場所、人気がなくなったと思ったらちょうど襲おうと思った瞬間人が現れる場所に移動したりしました。もちろん、鬱憤をその人の連れで果たそうとする者など破門です。
○月■日
今日はゴブリンスレイヤーさんのお弟子さんと妹さんと話した。
ちなみに昨日、普通に1対1で戦って負けてしまいました。同年代の人は勿論年上にだって早々負けたことないのに。
それにしても、冒険者になるって大変なんですね。駆け出しが相手するゴブリンですら目や耳を封じた状態で動きを察せるようにならなくては行けないらしく、毒を使うからと色んな毒を毎日少量食べさせられたり傷口から塗られたりしているのだとか。おかげでお弟子さんやゴブリンスレイヤーさんは毒がいっさい効かないらしい。後、ここに向かう前日なんて鎧着たまま河に落とされたとか。
妹さんの方はゴブリンが怖く、冒険者にはなれないが兄の役にはたちたいらしいので、『賢者の学園』を勧めてみました。あそこで学べば知識は付くでしょうし……。

○月×日
今日で丁度一年。ゴブリンスレイヤーさん達が来てから、一年で色々あった。
『賢者の学園』に通いたいと言った妹さん、お父様は筋の良いゴブリンスレイヤーさんやお弟子さんを逃したくないからか学費を払うと

言ったが妹の世話は自分で果たしたいと言ったゴブリンスレイヤーさんは冒険者らしく依頼をこなしました。ゴブリンスレイヤーなのにゴブリン以外の……まあ、都の近くにゴブリンが出ることは少ないですからね。

ただトロルやワイバーン、オーガを黒曜等級が倒すなんて、今でも信じられない。いえ、お父様との普段の剣劇を見れば強いのは解るのですが……お父様曰わく家宝の剣を見てから特に腕を上げたとか。

今では銀等級。一年で黒曜級から銀等級……すごい人ですね。そのお金の殆どは妹さんの学費ですが……彼、魔剣とか名剣のたぐいを集めていたのでは？

聞いてみたら見るのが趣味なそうです。

○月☆日
転校生がやってきた。
○月▲日
特にない。
○月●日
特にない。

☆月☒日
転校生凄い。

ゴブリンスレイヤーを兄と呼び、本好き故に司書と呼ばれる――というか実際ギルドで本の管理も手伝っていた――幼子は『賢者の学院』に入学して、まず巻物（スクロール）について研究した。

自ら魔法を覚えようとしない彼女を見下す生徒は多い。その悪意

を実行に移した者は何故か次の日から体調不良を訴えたが。
巻物（スクロール）とは今は失われた古の秘術で魔法を刻まれた巻物であり、遺跡などで見つかる。刻まれた呪文に関しては千差万別で、《転移（ゲート）》などの価値をつけることすら難しい物から、《インフラマラエ（火点）》のような魔力の有る者なら無駄遣いしてしまう程度の物まで様々だ。
とはいえ魔法を学ぶ『賢者の学院』において、魔法を使う術ではなく、誰でも魔法を使えるようにする道具の研究はやはり目立つ。
転校生で、そこそこ顔も整っていて、彼の剣聖の知人。目立つ。期待される。面倒なので錬金学にも手を出した。世話になっている彼が以前研究していた火薬、それの研究。彼は黒色火薬と呼んでいた。
そんな研究ばかりしていたが、呪文が二回も使えると自慢してくる生徒の視線がいい加減に鬱陶しかったので、手作り爆薬で作った爆弾で脅しておいた。
次の日からなんか変なのが付いてきた。無表情で此方をじっと見てくる変なの。確か次代の賢者候補……いや、既に卒業と同時に賢者の名を襲名するらしいから次代賢者か？
自称妹が言うように、そこに在るのだから在ることを感じるなどという離れ業は使えないが、気配を隠す気もない彼女に気付くなど容易い。
本当、何なのだろうか？今は魔剣の研究で忙しいのだ。
巻物（スクロール）はもう作れた。覚知神から知識を与えられたから。というか何で覚知神？助かったけれど、これは邪神の類ではないだろうか？
しかしその後気付く。確かに多少役立つだろうが彼に取っては一回限りより魔剣の方が都合が良かったと。
しかし今度手を貸したのは知識神。奇跡を授けてくれたがそれだけ。だから今は忙しいのだ。解析できる時間制限内に出来る限り解ったことを書き写す。集中力が散るから失せて欲しい。
「……ねぇ」
とはいえ話しかけられたなら答えないわけには行かない。面倒くさそうに、全身で抗議しながら振り返る。
「何でしょう？」

「どうして貴方は古代の秘術を蘇らせたの？」
「覚知神です」
「じゃあどうしてそうなの？」
そう、とは……なぜまともな思考をしているの？と言うことだろう。覚知神は恐ろしい神だ。例えば少し苛ついていた青年が世界が滅びないかな、などと冗談半分で呟き、覚知神の目にとまったとしよう。彼は世界を滅ぼすための外法を手にして行動に移す。ゆえに巻物（スクロール）を作りたくて作り方を知った彼女は延々と巻物（スクロール）を作るだけの存在になりそうなものだが、なっていない。
しかし、そもそも根底が違うのだ。彼女にとってそれは自分に家族がいたことを唯一直接知る存在の中で自分という存在を確立させるための手段、役立つための手段の一つ。巻物（スクロール）が造れた？彼奴は魔法をぽんぽん打つぞ。本当、どうなってるんだろうあれ……。
「そんな事より魔剣を造りたい……既に見つかって手元にある魔剣の量産だけなら、出来るんですがね」
「それはそれで凄いこと」
「でも手に入る効果はどれも微妙。切れ味を増したり敵が近付くと鳴ったり……」
「使える魔剣は全部本人が手元に残すか、売る」
「それは解ってるんですけどねぇ」
次代賢者に言われずとも解る。それぐらい常識だ。だからこそ困っているのだ。
正直魔剣よりもこの前造った新しい爆薬――彼はそれを見てニトログリセリン？と言っていた気がする――の方が少量でも眼鏡の魔法が二回使える生徒の目の前の地面を吹っ飛ばす威力があるので余程有用。しかし彼の能力を考えるならやはり剣だ。
……いや、ぶっちゃけてしまえば新しい魔剣は造れるのだ。刻み込む魔法さえあれば……しかし彼女が行える魔法はなく、奇跡も一つ……
「……あ」
「……？」

そういえば隣にいるこれは次代賢者だった。
そしてこれが、後に賢者となる少女と導師と呼ばれる二人の出会いだった。

「そろそろ彼女も卒業だな。君は、この後どうする？」
巨大な狼のような魔物を斬り殺し報酬を受け取って戻ってきたゴブリンスレイヤーに剣聖が尋ねる。
彼がこう言った仕事を受けるのはあくまで学費のため。彼の剣聖の弟子という後ろ盾で人格面接はほぼスルーで銀等級になったが、彼は別にランクなど興味ないだろう。
「金を集める必要がなくなる」とゴブリンスレイヤー。「ならゴブリンだ」と続ける。そんな一応弟子である顔も知らぬ男の言葉に呆れたように首を振る。
「君ならそれこそ金等級にもなれるだろうに……」
剣聖とて、ゴブリンを軽視しているわけではない。それはつまり、攫われる村娘や殺される新人達を軽んじると言うことなのだから。
単純にそれ以上の脅威があるというだけのこと。そこに彼が居てくれたら、そう思ったのだ。それに、その……彼は世界の危機の間に村が滅びる、それは見過ごせないなどというたちには思えない。
「……例えば」
と、語り出す。
「ある日突然人を斬りたくなるとする。それはもう、心の底から……喉を潤すために水を求めるように血を求め、心地良い眠りが欲しくて静寂を求めるように悲鳴を求めるようになったとする」
「……」
想像して、余りいい気分はしない。鎧に包まれた指が剣聖の胸を刺す。
「お前はそれに必死に耐える。家族や友人、娘と共に人の世を歩んだ記憶があるからな。だが、ある日見つけるんだ」と、声に僅かな苛立ちと尋常ならざる憎悪を込めるゴブリンスレイヤー。

「同じような衝動を持って、それに身を任せる者を……自分が必死に押さえているそれを抑えようともせず、血を啜り悲鳴を堪能する。それはきっととても羨ましい事だろう、妬ましい事だろう……」
ここ一年で流暢になった共通語。彼の知識の他に、それこそ声帯が共通語に合わせたのではないかと思わせるほど滑らかに話すようになった彼の言葉は、耳によく通る。
「自分がこれだけ耐えているというのに、奴等は好き勝手。その苦労も知らずに、いざ自分が斬られる側になれば自分は何も悪いことをしていないと喚き出す。腹立たしい……腹立たしい腹立たしい腹立たしい腹立たしい腹立たしい腹立たしい……だから殺す」
「……それは、君にもあるのか？ゴブリンに似た、衝動が」
「あるさ。殺すのは楽しい、悲鳴は心地良い。思いのまま女を犯せばきっと最高だろう……そんな感情をクソッタレな神に植え付けられた。だから何かを殺すことで晴らしている……冒険者ってのは丁度良い仕事だよ」
嘘ではない、だろう。クソッタレな神……魔神王はその名に神の文字を持つ。が、違うだろう。次に思いつくのは覚知神。彼は武器に、それも主に剣に高い興味を示す。彼の神から祝福を受ければ与えられて知識を実行しようとする。例えそれが女に振られた腹いせに世界の滅亡を願っただけでも、やり方を教われば必ず実行に移す。
例えば彼は、世界の全てが欲しいと望んだとする。すると彼は世界を手にする方法とともにそれを実行に移したい衝動に襲われるわけだ。それは略奪を好むゴブリンのように……。
故にこそその衝動に身を任せることが出来るゴブリンが妬ましい。と、想像はするが真実は解らない。彼自身、教える気もないだろう。
「仮に全てのゴブリンを滅ぼせたら、君はどうする？」
「死ぬ」
「……」
余りに、余りに堂々とした言葉に思考が停止する。
「……死ななくても、良いのでは？」
「この衝動が抑えられなくなった時。それは俺がゴブリン共と同等の

存在になるということ。俺の強さは知っているはずだ……それが世に牙を剥く前に死ぬ」
「……」
確かに彼の強さなら良く知っている。この一年で剣術では自分に追いつき、膂力を以って自分を圧倒するほどだ。
彼が敵になったならばと思うと、確かに恐ろしい。
「それは、抑えられないのか？今だって……」
「どうだろうな……抑えられるかもしれないし、無理かもしれない。時折この衝動が囁く。殺して奪え、奪って笑え、笑って犯せってな……特にあの脳天気な馬鹿弟子……その衝動に襲われてる時にゃ殺気でてるはずなんだから近付くなって言ってるんだが…」
本当に勘弁して欲しい。あんな懐いた子犬のような顔でこられたら、四肢を砕き組み敷いて、親愛の表情が恐怖に変わる様を見てみたくなる。そういう時は取り敢えず何かの群の討伐だ。叶うなら大型が望ましい。だいぶすっきりする。
「まあ、どのみち君一人でゴブリンを殺し尽くせるとは思えないが」
「確かに、奴らは数が多い。なのにこの世界の人間はどうも他人が犯されると聞いても、笑う。あんな雑魚に負けて犯されるなんて間抜けな奴だ、とな」
「ではどうするのかね？」
「……そうさな。教えてやるか……ゴブリンは恐ろしいぞ。確かに雑魚だが、成長すれば銀等級！そら、そこらに居るぞ！殺せ殺せ育つ前に！なんて歌が出来る程度に恐ろしいとな」

4人の少女達

「貴方のお兄さん、本当にゴブリン退治ばっかりだね」

魔法付与店にて、世界で初めて導師――世を導く者の称号を与えられた少女に、若くして賢者の名を襲名した少女が呟く。

魔法が使えぬ導師は、魔法を扱う賢者と協力して魔法の込められた道具を造る。その技術は既に外部にくれてやったが、導師ほど完璧に魔法を込められる者も、賢者ほど強力な魔法を扱える者もいない。故に一番高価な魔剣、巻物（スクロール）が存在している。

それは冒険者や商人達に感謝されると同時に、恨まれたりもする。何せ巻物（スクロール）や魔剣といえば一攫千金。そのまま使うも良し、高値で売るも良しな逸品だ。本来なら再現不能な古代の異物。それを復活させるという事は新しい物流が生まれ、魔物退治が楽になると同時に苦労して手に入れたが故に高値で売れるはずだった商品の価値が下がると言うこと。

金の余った商人達が腹いせに暗殺者を放った。既に世に広まってしまったが、彼の者達が襲撃されれば他も大人しくなるとも思って。まあ、冒険者でもない見習い剣士二人にやられたのだが。

片方は年の割に立派なものを持った少女、片方は幼さを残した夜明けの日のように底抜けに明るい少女。

未だ冒険者でもない少女達だが、その実力は既に金等級。一人だけ戦闘力は低いがダイナマイト――彼女の保護者が名付けたらしい――を投げてくる結構危険な子だ。

まあ賢者に導師、それに将来有望な剣聖の娘にして剣豪と謳われる少女や、一般的な冒険者の最高峰である銀等級の唯一の弟子にしてこの中でも最強という将来有望な彼女達を害そうとすれば王も黙ってはいないが。魔神王が復活し悪魔が沸く今将来前線に立つこと間違いなしの現状、くだらない理由で貴重な戦力と人類の強化をする切っ掛けとなった導師を襲う商人など文字通り首が飛ぶ。少しすれば襲撃もなくなった。

「まあ師匠はゴブリンスレイヤーだからねぇ――――おお、この魔剣凄

そう！」
「金貨１５００００枚」
「うーん……将来同じパーティーだしサービス」
「まだしない。貴方のお師匠様に魔剣渡したら勝手に冒険に出るだろうから渡すなって言われてる」
「む、失礼な！魔剣なんてなくても行くときは行くよ！」
「それはそれでどうなんだ」と呆れる剣豪。少女剣士は何処に吹く風。とはいえやはり冒険するならキチンと冒険者になりたい。別にギルドに縛られず冒険することは出来るが、それは世話になっている師匠や剣の師匠に迷惑かけることになるだろう。
まあ師匠はゴブリン退治にゴブリンが頻繁に現れる辺境に向かったっきりで手紙でしかやり取り出来てないが……。
「でも、新しい魔剣が出来た。これを届けに行くという言い訳はある」
「おお！」
「……はぁ」
とはいえ、彼女達だってやはり冒険に憧れる。自分達が強い部類に入るからこそ、その思いは顕著だ。賢者がゴブリンスレイヤーを追う言い訳にしている魔剣を掲げて顔を輝かせる少女剣士。それに呆れたような剣豪だが止めようとはしない。
後は導師だが、三人の視線に肩をすくめる。
「私だってお兄ちゃんに会いたいし、そもそもその魔剣は貴方一人じゃ造れないじゃん。それなのに貴方だけほめて貰うとか、狡い」
「別に誉めて貰おうとは思ってない。でもあの人のご飯は美味しい」
「あー、解る。師匠の料理は美味しいもんね。うーん、なんか話してるとますます会いたくなってきちゃった！」
思い立ったが即行動！が少女剣士の在り方だ。賢者が抱えていた魔剣をヒョイと受け取り店の外に飛び出す。そして店の外でクルリと振り返る。
「もうなにしてんのー？早くいっくよー！」
どうやら行くことは確定らしい。仕方ないと三人は顔を見合わせ戸締まりをしっかりして出発した。

「とぉ！てい、えいやぁ！」
「ふっ！」
「平和」
「……だね」
　ゴブリンスレイヤーが活動拠点を置く街に向かうために商人の馬車に乗った少女剣士一同。途中魔物が襲ってきたが少女剣士と剣豪が切り裂いていく。後方支援組は仲良くお茶を啜っていた。
「あ、あんたら手伝わないのか？」
「必要ない。魔法は限られてるし、温存するべき」
「持ってきた巻物（スクロール）にも限りあるし……お兄ちゃんの一番使える道――一番弟子が負ける訳ないし」
「今道具って言おうとした。そんなに嫌い？」
「……嫌い、というか。お兄ちゃんの中で大きくなられるのがいや」
　自分だって道具だ。人のふりをするための。それは自覚している。自覚しているからこそ、彼の中で自分と彼女にそこまでの差がないことは知っている。しかし、思い出すのだ。暗い洞窟の中、何も映さなくなったガラス玉のような姉達の目を。村に戻り目にした、がらんどうになった村人達の目を――。
　今までの自分を見ていた目。それが全て消えたと思うと、今まで自分が生きていた過去が消えたような錯覚に陥る。
　残念ながら自分は過去に囚われきってゴブリンを殺す復讐者にもなれなければ、少女剣士のように未来に期待することも出来ない。だから必要なのだ。過去に縋るための、己の家族を知る何かが……。
「お兄さんの素顔を知ってるのは貴方だけ。それは、貴方が特別だからじゃないの？」
「そうかな？そうだと良いな」

ゴブリンスレイヤーの最近の主な戦い方は、妹と妹の友人が造った魔剣を振るい巣を消し飛ばすという豪快なものである。一本金貨数百万枚はくだらない超高級品。安い物では銀貨十数枚で済むが、導師の保護者であるゴブリンスレイヤーは安く仕入れられる。そして一度仕入れたものは内包された魔力が尽きても買い換えない。買い換える必要がないからである。とはいえ、ギルドから苦情が来たため、仕方なく自重するようにした。

今回は通常種が２０程、田舎者（ホブ）が３、シャーマンが１。田舎者（ホブ）は１匹がシャーマンから離れ、２匹は常に護衛。あり得ないな、ゴブリンらしくない。

ちょうど昼餉の時間なので、田舎者（ホブ）の屍の腕を千切り、鎧の一部を消して食らいつく。

筋っぽくて脂が多く、お世辞にも美味いとは言えないが腹の足しにはなる。人目ならば、そもそも人がいないため気にする必要はない。

「――――」

そう、いないのだ。この群の規模で、孕み袋がいないなどあり得ない。いや、『はぐれ』や『渡り』が偶然であった可能性はあるが、それにしては田舎者（ホブ）とシャーマンの連携が出来すぎている。つまり、最低でも田舎者（ホブ）とシャーマンは群が出来る前から共にいたのだ。そうでなくとも、田舎者（ホブ）３匹は確実に共にいたはずである。

どう考えても可笑しい。小鬼共が群れるのは盾を増やすためだ。シャーマンを守ろうと考えるということは、シャーマンの有用性を理解しているという事である。役立つからまあまあ守ってやるかと思うということだ――孕み袋も居ないほどに真新しい群が？

可能性としては、この群のトップの４匹、最低でも３匹が元から一つの群にいたという事。群が滅ぼされたから逃げてきた？３匹も田舎者（ホブ）が居るのだ、逃げるわけがない。つまり、群から追い出された可能性が高い。

上位種が？だとすれば、その群はそれこそ上位種だけで形成されていることになる。

「チッ、失態だな……」

ひょっとしたら他の群もこうなっていたのかもしれない。巣を吹っ飛ばして、慌てて出てきた僅かな生き残りを殺すのを楽しみすぎた。

痛めつけて遊ばないようにして逃がさなければ、楽しんで良いと何処かで思ってしまったらしい。圧倒的な火力で、慌てふためく連中を見て楽しんで巣の状況を確認してこなかった。

本当にゴブリンの脳というのはつくづく救いがない。声帯を変化させるくせに脳の変化は他者を陥れ、苦しめ、嘲笑う時にのみ変化するのだから。

辺境の冒険者ギルド。昼間っから酒を飲む冒険者達はやれ自分はトロルを狩った、やれ自分は盗賊退治したと己の近況を自慢しあう。中には受付に報告してナンパする者もいる。と、その時冒険者ギルドの扉が勢いよく開く。

「たっのもー！」

扉がバーンと勢いよく開き底抜けに明るい声が響き渡る。誰もが其方に視線を向ける。

入ってきたのは黒髪の少女。見ているだけでほっこりするような、天真爛漫をその身で示す少女。その後ろには杖を持った一目で呪文遣い（スペルキャスター）と解るローブの少女と、背の割に中々立派なもの持った少女、明らかに振るえるとは思えない剣を持つ少女。

幼いが見目麗しい少女達の登場にヒュウ、と誰かが口笛を吹く。

少女達はキョロキョロと周囲を見回す。誰かを捜しているのだろうか？

「知り合いはいないのですか？」

「前居た場所とは別だしなぁ……聞いた方が早いね」

呪文遣い（スペルキャスター）の言葉に少女剣士が受付の下に行こうとする。年齢からして冒険者登録ではないだろうが魅力的な少女達、格好からしていずれ冒険者になりそうだと、唾を付けようとする者も現れる。

「やあ君達、誰か知り合いを捜しているの？良かったら俺が探そうか？」
「ん？」
「にしても、その格好冒険者に憧れてるのかな？登録まで後数年だろうし、良かったら俺達のところこない？」
「あー、良いよ。冒険者登録したら最初は師匠と組んで、後はボクたち4人で組むように言われてるし、お兄さん弱そうだから」
キラッと歯を光らせる青年剣士の言葉をバッサリ切り捨てる少女剣士。実力はかなりあるがその性格のせいで黒曜止まりの青年はピシリと固まる。
何処かで失笑が漏れた。
「し、師匠……？」
全員少女ということはその師匠も女性なのだろうかと想像する青年剣士。と、その時再び扉が開く。
「あ、師匠！」
「え？げぇ！ゴブリンスレイヤー！」
入ってきたのは全身漆黒鎧の騎士。ゴブリンスレイヤー。都からやってきた銀等級のくせに名前の通り雑魚狩り（ゴブリン退治）しかせず『都堕ち』などと揶揄されていたが魔剣などを使い、その魔剣をゴブリン退治なんかに勿体ない、俺に寄越せと言われても無視、腹を立てて闇討ちしようとした冒険者達を返り討ちにした冒険者。ちなみに返り討ちにされた中には青年剣士も含まれている。
「お前等か……どうした、ゴブリンか？」
「確かに都付近にゴブリンが出ても放置されるけど違う」
「お兄ちゃん、これ……新しい魔剣」
「ああ、わざわざ悪いな」
少女達の一人が剣を渡すと柄を手に取り刀身を抜く。鎧と同じく黒く輝く刀身、それを確認してしまう。
「雷か……」
「流石。解るんだ」
「ああ、お前の魔法だろ。流石賢者だ……お前も、良くここまで完璧

に移せるものだ。ここらに流れてくる粗悪品とは大違い、導師の名は伊達ではないな…」
「ん……」
「えへへ」
ゴブリンスレイヤーが頭を撫でると嬉しそうな顔をする導師と呼ばれた少女と誇らしげな賢者と呼ばれた少女。誰もがポカンと口を開け惚ける。
何せ、導師といえば魔法を巻物（スクロール）や剣に込める古代の秘法を覚知神から授かり復活させ、賢者といえばあの年で最高峰の魔法遣いと認められたという称号で、導師と手を組み伝説級の魔剣を製造していると聞く。
では残りの少女達が賢者と導師の友人で護衛、若くして剣豪と呼ばれる少女と４人のリーダーの剣士か……。
そんな相手に上から目線。青年剣士は顔を青くしてその場から離れていく。
「ギルドに報告がある。後でな……」
「……師匠、何かあった？」
「ゴブリンだ」
「いや、まあうん……ゴブリンだろうけど……後で話聞かせてよ？」

依頼達成の報告をするとゴブリンスレイヤーは４人の少女達を連れ買った家に向かう。
導師が開発したニトログリセリンなどを使ったダイナマイトや毒ガスを発生させるための道具など色々ある。散らかった机の道具を押しのけ地図を広げる。幾つか小さな×印が入っている。
「これは？」
「ゴブリンが居た場所だ。ここ半年のな……お前達のおかけで特に苦労することもなくあのゴミ共を殺せていたが、苦情がきて今日は地

道にやっていた。田舎者（ホブ）が数体にシャーマンが同じ群にいた。孕み袋はなしでな。居たという痕跡もない」
「へぇ、変な話だね」
　ゴブリンスレイヤーの弟子だけありゴブリンに関する知識をしこたま入れられた少女剣士は首を傾げる。自分達の種族こそ栄えるべきで、その中でも自分は一番偉いと考えるゴブリン。群を作る時、仕方ないから従ってやると思うのは可笑しくないが、田舎者（ホブ）が複数は流石に可笑しい。余裕があるならともかく女を攫ってないと言うことは出来たばかり、となると田舎者（ホブ）同士で争うはずだ。
「まさか王（ロード）が討たれた群の生き残り？」
「だとすると王（ロード）の目撃情報が在るはず。それがないという事は、群からはぐれたのではなく追い出された……」
「上位種が？ちょっと考えられないなぁ」
「実際多少の連携をしていた……それに……」
「？」
「駆け出し程度の粗末な品とは言え、その４匹は武装していた」
「てなると、ますます追い出されたとか考え難いんだけど……でもそう思うの？」
「ああ」
　武装を与えたまま上位種を追い出すという事は裏を返せば武装も上位種も満ちているという事。そんな群、普通は生まれない。何者かが支援している可能性が高い。
「ゴブリン共の最近の発生場所から、小鬼王（ゴブリンロード）の存在する群が在ると仮定する場合、候補は３つ……遺跡と廃村、廃坑だ」
「その調査を手伝えばいいの？」
「馬鹿言え。そんな事させられるか……取り敢えず一つ一つ調査するにしても、群を見つけ、逃げた場合村が襲われるかもしれない」
　ゴブリン共を殺している間に何匹か逃げ出すかもしれない。いや、確実に逃げるだろう。ゴブリン共は仲間が戦っていたらやることは二つ。勝てそうならとどめは貰い自分の功績だと自慢する。勝ち目がなさそうなら仲間が盾になってくれている間に逃げる。

そうして、突然理不尽に襲ってきて仲間を殺した只人達に仕返しするのだ。
「要するにボク等は知り合いの冒険者とたまたま一緒に行動して、たまたま襲われたから返り討ちにする。そんな感じ？」
「……お前本物か？」
「熱でもあるのですか？少し休んだ方が」
「何か拾って食べた？貴方、毒とか効かないけど」
「不気味」
剣豪はおでこに手を当てる。熱はない。導師は脈拍、呼吸をはかり瞳孔の動きを確認する。異常はない。せっかく師匠の意図を察したのに全く持って不本意な反応をされプンプン怒り出す少女剣士。
「本当に自分で考えたんだ。不気味」
「二度も言った!?」
「何でさ！」と叫ぶ少女剣士。一同はそんな様子を見て笑った。

「ゴブリン退治？やだよ、金にならねぇし……それに群から逃げたらって、そんなの村人でも倒せるだろ？」
「やぁよ、彼奴等汚いし……別にほっといても問題ないでしょ？」
「巻き込むなよ、俺は紅玉等級だぜ？あんたも素人用のモンスターじゃなくて、もっと世のため人のためになることをしろよ」

とまあ、一応他の冒険者達に頼んだのだがすべからく断られたゴブリンスレイヤーは４人の少女を連れ馬車に乗る。魔剣は防衛手段として導師に渡しておいた。
最初は廃坑。ゴブリンは居たが規模は小さい。しかしやはり装備が整っている。次は森の中に飲まれた廃村。とはいえ、流石に遅い。一度村に戻りやすむことにした。

村で妙な子供に絡まれた。弟子達と同じぐらいの年齢の少年。何でもゴブリンスレイヤーは本物の冒険者じゃないらしい。

冒険者というのは仲間と一緒に遺跡に潜り魔物と戦うもの。ゴブリンなんて自分でも倒せる。それなのに銀等級なんて可笑しい！そう叫ぶ。幼馴染らしい少女格闘家が申し訳無さそうにしていた。彼が少女剣士達を年が同じだから一緒に冒険者になろうと誘った時は何とも言えない顔をしていたが、まあ、そう言うことなのだろう。

しかしこのガキ五月蠅いな。本物の冒険者？なんだそれは、くだらない。ゴブリンを倒した？群から焼き出された手負いを追い払ったから何だというのだ。

好き勝手喚くな、五月蠅い、ウザい、鬱陶しい。

その自分は最高峰の冒険者になれると、英雄候補の一人だと信じて疑わないキラキラした目をえぐり出して如何に無力か解らせた上で好意寄せてくれている少女の悲鳴を聞かせてやろうか？と、頭の中で考えるだけですむように押しとどめてやっているのにまだ喚く。少女剣士がぶっ飛ばさなければ子供の死体が出来ていたことだろう。

ゴブリンスレイヤーは一人屋根の上で星を見る。夜の闇も昼のように見えるこの目は人間以上に星が輝いて見える。その点だけはこの身体の素晴らしさを誉めてやりたい。

だが、周期が短くなってきた。本能の声が強くなってきた。押しとどめ続けていたものが外に出ようとしている。そんな感覚。ゴブリン共を殺す前にさっさと自決でもした方が良いかもしれない。と、音もなく屋根におり立つ気配を感じた。

「ヤッホー師匠、月見？」

「そんな所だ……」

「今日はどっちもよく見えるねぇ……」

と、赤と青の月を眺める少女剣士。ストンとゴブリンスレイヤーの隣に座る。

「数、多いかな？」

「だろうな……」

「……ねえ、師匠は何でゴブリンを殺したいの？」

「前にも言ったろ。俺は彼奴等が大嫌いだからだ」

「うーん……じゃあ、えっと何で嫌い……でもなくて、ええっと……」
「……どうして同族でそこまで嫌うか、か？」
「人が折角言葉を濁そうとしたのに」と呆れる少女剣士に「お前にゃ無理だ。難しいことを考える頭がない」と返すゴブリンスレイヤー。
少女剣士は導師の次に最も長く共にいた存在だ。
毒に対する耐性や水の中でも魔法、アイテム無しで１０分近く活動できるように鍛えたし、戦い方も教えた。気配察知だって教えた。いずれはバレると思っていた。
「ね、師匠。ボクの村を襲ったゴブリン達の関係って？」
「俺が昔取り逃がしたゴブリンが『渡り』になって造った群の一部だ」
「そっか……まあ師匠が滅ぼそうと思ったら死体は原型なんて残ってないか」
うんうんと頷く己の弟子の姿にはぁ、とため息を吐くゴブリンスレイヤー。
「で、師匠は結局何で同族が嫌いなの？」
「……人間に、なりたいからかもな」
「なる程」
「笑わねえの？」
「笑わない」
と、真っ直ぐ見つめてくる少女。その少女に伸びそうになる右手を左手で押さえる。
「人間になったら、今度は何になりたいの？」
「そうだな……その時は、勇者でも目指すか」
「それはなれないね」
「……そこはなれるよじゃねぇのかよ……」
「だって勇者になるのはボクだからね！」
剣を抜き放ち月光を反射させる少女剣士。そう言えば、この剣は自分がやったんだったかと思い出す。上等な剣であることは確かだがずっと愛用してくれているのは気分が良い。
「お前が、勇者ね……顔も知らねぇ有象無象になられるよりは、まあ安

心できるな。お前なら確かに世界を救っちまいそうだ」
「ふふん。そりゃね、ボクは何たって師匠の弟子だもん！」
まだ冒険者にもなれない年齢の少女が世界を救うなどと嘯く、しかし彼女なら本当にやるかもしれないと思えてくるから不思議だ。
「だから、さ……その時は一緒に世界救おうよ」
「あ？」
「ボクでしょ、姉ちゃんに、賢者と剣豪……そして師匠。皆で世界を救うんだ。そしたらきっと、誰も師匠をゴブリンめ！なんて言えなくなるから」
「……なる程、な……ああ、それは楽しそうだ」
「えへへ！だよねだよね！皆で色んな冒険しようよ！」
森に行って、山に行って、遺跡に行って、海に行って、まだ見ぬ景色を夢見て楽しそうに笑う少女を見てゴブリンスレイヤーは己の胸を押さえる。
楽しそうじゃないか、楽しいに決まっている。期待しろよ、胸を高鳴らせろよ、何故呆れる、呆れる要素が何処にある。馬鹿なことなんかじゃない、なのにどうして、自分（お前）は笑おうとしている？

ゴブリンスレイヤーは振り分けられた客室に戻ろうと歩く。少女剣士は自分たちの客室に戻った。扉が閉まり、しかしゴブリンスレイヤーの足は縫いつけられたように動かない。
若い女がいる。自分に笑顔を向けてくる女達がいる。救ってやったんだから、何をしても良いのが2匹。放漫な胸を持った柔らかそうなのが1匹。賢者などと呼ばれすました顔をしてるのが1匹。
「……ゴブリン共、数が多いと良いな」
悲鳴を聞き、絶叫を笑い、血を浴びれば、少しはこの衝動が収まるだろう。せめて後一年、彼奴等が冒険者になったら、一度くらいは一緒に冒険する、それまで持ってくれ。

その小鬼は部下の報告を聞き、思わず部下を殺してしまった。

奴だ！奴が現れた！女と一緒にいるらしい、４匹も！
そうか、そうか奴め！そのために仲間を殺したのか！女を独占して、自分達が野晒し雨晒しで苦労してるなか何の苦労もなさそうな人間なんかに紛れ込むために！
許せない！
今日も彼奴のせいで部下を殺してしまった！
苦しめてやる！後悔させてやる！
女達の特徴を聞くかぎり、あの時の女も居るらしい。彼奴が独占しようとしていた女……奪おう。奪って、彼奴の前で犯してやろう。彼奴はそれだけ非道な行いをしたのだから！
「おい、何を騒いでいる」
ふと、偉そうなのが話しかけてきた。五月蝿いなぁ、ゴブリンでもないくせに。でも強いから逆らわないけど。
でも絶対何時か殺して食ってやる。大人しく女と武器を差し出してればいいんだ、奉仕したいくせに偉そうにするなんて変な奴め。おまけに住処にあった剣を抜こうとしたり壊そうとしたり、出来なかったら今度は守っていろだなんて、何を考えてるんだ？きっと馬鹿なんだろう。
とはいえ此奴に一度相談しないとどうせ文句言ってくる。だから教えてやる。
「ふん、くだらん。そんな理由か？まあ良い、好きに襲うと良い。だが役目は忘れるなよ？」

滅びる村

住む者も失せた廃村。

畑だった場所には人の子より頭一つ上の背の高い草がぼうぼうと生えている。ゴブリンスレイヤーは徐に短剣を投影して草むらに投げつける。『ＧＯＧＹＡ!?』という叫びの後周りから複数のゴブリン、家の扉を突き破り田舎者（ブ）数匹、さらに草むらの向こうから魔法も飛んでくる。

全て切り払う。炎の魔剣を投影して地面に突き刺すと、周囲に大量の火柱が立つ。

生き残りはシャーマンだけ。元々己が生き残ることに貪欲なゴブリンはガタガタ震え、跪いて喚き出す。

《ここでもなかったか。となると、お前達の王が居るのは遺跡か？》

《――まま、待ってくれ！お、俺じゃない！あのクズだ！あのクズが畏れ多くも貴方様を殺そうなんて言い出したんだ！》

《その反応、俺がゴブリンだと知ってやがったか。やっぱ隻腕の彼奴か？》

《あ、ああ！酷い奴だ、仲間を襲えなんて！俺はあんたの下につくよ、あんたなら最強の群も――――！》

お前も仲間を襲えと言われて楽しんでいたくせに何を、とは思ったがその後浮かべた笑みと背後から感じる殺気に尋問を取りやめシャーマンを強化して盾代わりに振り返る。

ガギャアアアンッ!!と金属同士のぶつかるような音と共に衝撃で内臓が潰れたシャーマンが血を吐き出す。

現れたのはオーガと見紛う程の巨体。手に持つのは巨大な戦鎚。田舎者（ブ）いや、小鬼英雄（ゴブリンチャンピオン）……。

此奴何処から現れた？突然現れた。気配を隠していた？小鬼の英雄風情が？

と、視界の端で何かが煌めく。鏡だ。なるほど、以前自分が投影したあの鏡と同じ《転移（ゲート）》の鏡。以前あれで逃げ出しているのだ、使い方を心得ていたのだろう。

「ＧＯＢＯＯＲＢＯＯＯ!!」
「……喧しい」
たかが1匹に魔剣を使うなど勿体ない。我こそは5番隊隊長などと吼えているが、くだらない、所詮は小鬼だろう。俺も、お前も。
そんな苛立ちと共に振るい慣れた真銀（ミスリル）の剣を投影する。以前使っていた拾い物ではなく、剣の師である剣聖から贈られた剣。ちなみに本物はとある田舎者（ホブ）に突き刺さったまま崖から落ち急流に飲まれた。
数合の打ち合い。しかし技量と武器で遙かに勝るゴブリンスレイヤーが英雄（チャンピオン）の四肢を切り落とす。尋問を続けよう。頭を踏みつけ力を込める。
《群の規模を教えろ。５番隊隊長だったか？お前クラスが後５匹は居るってことか？》
《……お、教えたら助けてくれるのか？》
《さっさと答えろ》
ミシミシと頭を踏みつける力を込める。上位種故に中々死ねず、しかしドクドクと血が流れ死が近付き、頭に上る血が減り思考力が低下する。
《じ、１５隊ある……一個小隊、５、５０……副官と、何人かは俺達と同じで英雄（チャンピオン）だ》
《７００以上の群だと？盛ってるんじゃねえだろうな》
《ほ、本当だ！あんたになら全部話す！そ、そうだ！俺達は、この辺の村々を襲うように……！》
グシャリと頭を踏みつぶす。直ぐに転移の鏡を投影して、飛び込んだ。

「ゴブリン来ないねぇ」
村境の柵に腰をかけプラプラ足を振る少女剣士。逃げてきたゴブリンが来るとしたら一番近くのこの村の可能性が高いが来ない。そこまでの規模ではないのだろうか？と、その時だ、慌てた様子で馬に

乗ってかけてくる男達が見えた。
「ぼ、冒険者居るんだろ!?助けてくれ！」
「ほいほいどうしたの？」
「ま、魔物だ！種族はわかんねえ……人型で、でっかくて……頼む、助けてくれ！」
「あ、おらんとこも出ただぁ！助けてけろぉ！」
「う、うちにも！うちにも出たぁ！となりん奴食われちまっだ」
「「「――――」」」
４人は顔を見合わせる。３ヶ所同時に魔物の襲撃、明らかに計画的な行動だが、こんな辺境で？
「ど、どうする？」
「どうするって――」
「戦力を分けるしかないと思う。けど、敵が解らない以上悪手」
「だ、だったらおらんとこぉ！」
「てめ、ふざけんな！うちなんて隣人食われてんだぞ！」
「うるせ――!?」
「てめぇこ――!?」
賢者の言葉に我先にと救援を要請する村人達。少女剣士は殴りかかろうとした彼等の間に剣を振り下ろす。
「――姉ちゃん、《転移（ゲート）》の巻物（スクロール）ある？」
「５枚……どうするの？」
と、非常時の撤退用に用意していた《転移（ゲート）》の巻物（スクロール）を取り出す導師。
少女剣士は３つ取り２つを剣豪と賢者に渡す。
「全部の村に行く。けど、優先は村人の救助。危なくなったら逃げて……剣豪はそっちの人と、賢者はそっち」
「わかりました」
「了解」
少女剣士の言葉に馬に乗せてもらい村を案内して貰う２人。残ったのは少女剣士と導師。少女剣士は導師をじっと見る。
「姉ちゃんは……どうする？」
「自衛ぐらいは出来る。足手纏いにはなりたくないから、いって…」

「でも……」
　複数の村が襲われたのだ。この村だって襲われる可能性がある。正直言って、置いていきたくない。何せ彼女は弱いのだから。と、少女剣士の頭をつかみ引き寄せる導師。
「足手纏いにはなりたくない。貴方だって、知ったんでしょ？だから、置いてかれるわけには行かないの」
「……正直になったね。ボク、そっちの方が好きだな」
「……そ、なら姉命令。早く行って」
「うん。任せたよ、姉ちゃん！」
　そう言うと村人の乗った馬の尻をたたく少女剣士。走り出した馬は、当然馬なのだから足は速い。が、少女剣士は地面を蹴ると疾風のような速度で駆けあっと言う間に追い付く。この方が速いと思ったのだろう。
　残された導師は残りの巻物（スクロール）やダイナマイトを取りに宿に向かう。すると、昨日の少年剣士が何かを決意した表情でやってきた。
　逃げたゴブリンなど少女剣士達で十分だと思っていたがまさか複数の村が魔物に襲われるなんて、そう苛立っている彼女の前に立つ少年剣士。邪魔だ、凄く邪魔だ。
「地下とか、床下に避難してて。そこで転がって土の匂いをつけといて」
「俺だって戦う！俺だって、ずっと鍛えてきたんだ！」
「邪魔。私は貴方を守らないよ？」
「大丈夫だ、むしろ、俺が守ってやるよ！」
　昨日少女剣士に一方的にぶっ飛ばされたのにこの自信は何処から来るのか。冒険者になったら大した経験もつまずにゴブリン退治に向かって死ぬタイプだな、と呆れ横を通り抜けようとする。
「待ってくれ！だから、君も避難を――あで！」
　腕が掴まれる。ふりほどこうにも近接に置いて自分は４人中最弱。冒険者になる前提で在る程度の護身術を学ばされた賢者どころか鍛えた一般人にも劣る。思わず舌打ちしそうになると少年剣士の頭を叩く者がいた。少女格闘家だ。

「この馬鹿！いい加減にしなさい！彼女達の強さは昨日知ったでしょ!?私たちは隠れるのよ！」
「だ、だけど！」
と、その時だった。ズン、と村境の柵が壊される。全員が振り返る。そこにはオーガのような巨体を持った魔物が１０匹、それより一回りほど小さな魔物が２０程、その後ろに杖を持った人の子供ほどの魔物が１０数匹。
「な、なんだあれ――――」
「――――ゴブリン」
「え、ゴブリン？で、でも！滅茶苦茶でかいぞ！」
「田舎者（ブ）が群れるだけでも珍しいのに、英雄（チャンピオン）まであんなに……それにシャーマンまで」
少年剣士の事は取り敢えず無視だ。ほら戦ってこい、守ってくれるんだろう？
急いで宿屋に駆け出す。と、一匹だけ英雄（チャンピオン）の肩に乗っていたシャーマンが頭に被った家畜の骨の隙間からじっと導師を見つめる。
「ＧＯＢＧＯＯＯＲ!!」
その叫びと同時にゴブリン達が向かってくる。狙いは自分のようだ。懐からダイナマイトを取り出し《インフラマラエ（火点）》の巻物（スクロール）で導火線に火をつけ投げつける。
田舎者（ブ）の一匹がバラバラに弾け飛ぶ。
とはいえゴブリン共は数で勝っている間はよほどのことがない限り退かないだろう。魔剣を抜き、巻物（スクロール）を構える。
「う、うおおおぉぉ！」
「あ、ま……待ちなさい！」
少年剣士が田舎者（ホ）の一体に切りかかる。が、戦闘経験を積んだ『渡り』に素人剣術など通じるはずもなく吹っ飛ばされる。丁度良いので棍棒を振るった体勢の田舎者（ブ）に巻物（スクロール）を向ける。放たれた雷が胸を大きく抉った。
「ＧＯＲＯＢ！ＧＯＲＯＯＢ!!」
「ＧＲＯＯＢ!!」

新たな巻物（スクロール）を開く。炎の壁が現れ周囲を包み込んだ。近接戦に持ち込まれれば負ける。賢者のように数多く魔法を放って近付けないなんて戦法もとれない。となれば周囲を守りながら魔剣や巻物（スクロール）を使う。

炎の壁を前に立ち止まるゴブリン達。姿は見えている。ダイナマイトを投げつければ燃えてゴブリン達に当たり大爆発を起こす。

「ＧＯＲＢ」

「ＧＲＯＯ……」

炎の熱と爆発で死んだ己の同胞を見て後ずさるゴブリン達。シャーマンが呪文を唱えるが小鬼如きの魔法で賢者と謳われた少女の魔法を貫けるわけがない。導師はダイナマイトが尽きたのを確認すると今度は魔剣を構える。バチバチ紫電を走らせ、いざ放とうとした時――

「ぐあああああ!?」

人の悲鳴。恐らくは少年剣士。炎で見えないが何処かにいるのだろう。また聞こえてきた。

ああ、と察する。要するに人質だ。炎の壁を消さなければもっと痛めつけるという。くだらない。そんなガキどうなろうが知ったことか。仮にも冒険者を目指すなら自己責任だ。今度は女の短い悲鳴が聞こえた。少年剣士を助けようとした少女格闘家だろう。

助けてくれるとは限らないのだ。助けがくるとは限らないのだ。何せ神は何時だって、サイコロを振るう。残酷な目が出ても、哀れみ、悲しんでも、救いはしない。

結局、ゴブリンに襲われるなんて運が悪い、その一言で済まされる。

「――――!!」

ガシリと後ろから延びてきた手が導師の腕を掴む。ミシリと骨が軋むほど強く握られ、次の瞬間へし折れる。

「あぐ――!?」

魔剣が落ちる。引き寄せられ、無理やり振り返らされる。

「ＧＡＲＯＲＯ――」

ニタァ、と笑うのは2メートル近くあるゴブリン。枝で出来た王冠

を被り、ニタニタとゴブリンらしく嫌らしい笑みを浮かべる。その後ろには鏡面。しかし鏡面に移るのは何処かの遺跡。
「ＧＵＧＥＧＥ！」
「かあ――ッ!!」
腹に膝がめり込む。拳ではない。そのゴブリンには片腕がないから、獲物を捕まえれば後は足で攻撃するしかないのだ。
空気を吐き出し気絶した女。ベロリと頬を撫でゲタゲタ笑うと肩に担ぐ。と、地面に転がっている剣を見つけた。使いやすそうな剣だ。自分が持ってるそれよりよほど上等。持ち帰ることにする。
炎の外の連中は、ほうって置いて良いだろう。聞いてない、お前のせいで仲間が死んだなどと喚くに決まっている。全く同じゴブリンだというのにどうして他の奴等はこうも自分勝手で浅ましいのだろうと首を振りながら炎の壁が消える前に鏡面の中を潜った。

少女格闘家は幼馴染に駆け寄る。冒険者に、英雄になると意気込み剣を振るう幼馴染。自分も父から受け継いだ武術を人のために使おうと鍛えてきた。だけど、怖い。
自分達よりずっと大きな魔物達。これがゴブリン？今までのと、違いすぎる。ゴブリン達は炎の中に隠れた導師をどうにか捕まえようとしているようだが、埒があかず苛立ったのか民家の一つを壊す。人は、居ない。地下に隠れたのだろう。と、大型のゴブリンの一体が気絶した少年剣士を見てニタリと笑った。
「こ、こないで！」
伸びてくる大きな手。自分の胴を簡単に握り潰しそうな手に蹴りを放ち、しかし逆に弾かれる。大型ゴブリンは少年剣士を持ち上げると彼の腕を人差し指と薬指と中指の隙間に挟みへし折る。
「ぐあああああ?!」
気絶していた少年剣士が激痛で目を覚まし泡を吹き絶叫する。続いて足が折られる。
「や、やめなさい！」

と手刀を放つ。しかし太い木でも叩いたかのような激痛に顔をしかめ、大型ゴブリンは鬱陶しいというように足で小突く。それでもこの慎重さ。地面を転がりゲホゲホせき込む。

体中が痛い。体の奥が燃えるように熱いのに、凍えそうな程悪寒が走る。と、そんな少女をひっくり返す者が居た。恐らくじれてきたのだろう。そこで雌だ。興奮した様子の中型のゴブリン。

ゴブリンが何故女を攫うか知っている少女格闘家はそのゴブリンに見えず、しかし明らかに獣欲をはらんだ目で見てくる魔物に顔を青くする。

「い、いや！放して、放してぇ！誰かぁ！」

必死に暴れようとするが力は向こうが上。押さえつけられ、服を破り捨てられる。ゴブリンが腰布を解き人の腕ほど在りそうな己のものを剥き出しにする。

「や、やめ――お願――？」

「――？」

涙目で懇願する少女の様子を楽しんでいたゴブリンは少女の視線が背後に向けられたのに気づく。なんだなんだと振り返れば己の頭目がペコペコ頭を下げているゴブリンではない変な奴が移動するときに現れるのに似たのがあった。自分達もこれを使ってきた。増援だろうか？あの炎の壁を消せるのか？

消せたらあの女も犯そう。なんか殺すなとか犯すなとか言われたような気もするが突然仲間を殺したあの非道な小娘はさっさと苦しめるべきだろう。と、あの小娘が泣きわめく姿を想像して涎を垂らすゴブリン。その首が切り落とされる。

「――田舎者（ブ）か」

ドシャリと体が倒れ倒れた衝撃から傷口から血がブシャリと噴き出す。現れたのは漆黒の鎧に身を包んだ長身の男。

ゴブリン達が反応し――次の瞬間には死ぬ。圧倒的だ。圧倒的なほど強い。剣についた血を払った鎧の男――ゴブリンスレイヤーと名乗っていた――少女格闘家の口に瓶をつっこむ。痛みが引いてきた。

「あ、あの――」
「他の奴等は何処行った？」
「ほ、他の村が襲われて――そっちに」
「分断させられた訳か。あの炎の壁は？」
「えっと――ど、導師様が――」
「――あ？」
その言葉にゴブリンスレイヤーは訝しみ剣を振るう。魔剣なのか突風が起こり炎の壁が天に向かって散っていく。炎の壁が消えると、そこには誰もいなかった。
「え？そ、そんな！確かに――！」
「――」
困惑する少女格闘家と異なりゴブリンスレイヤーは先程、突然英雄（チャンピオン）など大型が現れた時みた鏡を思い出す。
「戻ってきた奴等に伝えとけ。俺は遺跡に向かう」
「え、あ、はい――あ、あの！」
「何だ？」
「く、薬を……彼奴にも」
「ああ……」
鼻から上が切り取られた死体の上に転がった少年剣士を指差す少女格闘家。ゴブリンスレイヤーは一瞥すると水薬（ポーション）を渡し駆けだした。
その日、冒険者を目指していた一人の格闘家が夢を諦めた。彼女の幼馴染も同様だ。村で当たり前の幸せを、当たり前のように享受した。

その日４つの村が壊滅的な被害を受けた。その村々は生き残り同士で手を組み何とか再び村らしく活動することが出来た。しかし、実質的に３つの村が滅んだ。ゴブリンによって。
やはり国は動かない。ゴブリンの被害などありふれたもので、それ

にどうせもう解決したことだ。それにその日は喜ばしい事が起きた。
遺跡の最奥に封印されし剣が抜かれた。勇者が生まれた。
彼女達はゴブリンに拘っていたようだが国として、王としてまず魔神王の討伐を命じた。

ゴブリン

森の中を駆ける。まずは洞窟が見えてくる。見張りは田舎者（ホブ）にシャーマンが2匹ずつ。

シャーマン2匹が呪文を唱える前にナイフを投げ殺し、ホラ貝を吹こうとした田舎者（ホブ）を切り裂き、棍棒を振り下ろしてきた方の頭をつかみ壁に叩きつける。

グチャリと脳が壁にへばりつく。

そのまま洞窟の壁を削りながら進み腕を引っこ抜く。足は止めない。

その音を聞きつけたのか出るわ出るわ小鬼共。丸々太った個体や顔を隠し杖を持った個体がわらわらと。

ああ、本当に……邪魔くさい。魔剣を投影し弓につがえる。

本来なら熱線を放つ魔剣は自身を熱線に変え行く先を阻む全ての者を消滅させながら進む。

文字通り骨すら残らない。曲がり角にでもぶつかったのか轟音が響き洞窟が揺れる。

しばらく進むと溶けて出来た新しい穴を無視して横穴に飛び込む。すぐに現れる小鬼の群。しかし所詮は小鬼の群。

「邪魔だ……」

数は先程に比べて少ない。だから、切り刻みながら突き進む。

しばらく進むと洞窟から遺跡に変わる。それにしても、候補に選んだ三つの内最後に当たる自分も分断直後攫われる彼奴も、つくづく出目が悪い。この状況で、どうせ頑張れ頑張れと応援しているだけの神の姿を想像して殺意を漲らせる。

小鬼の脳は、すぐに八つ当たり出来る存在にその怒りを押し付けた。

遺跡の中を突き進む。同胞の匂いが濃く残っている道が同胞が頻繁に扱う道なのだろう。

開けた場所に出た。ゴブリンの癖に、壁に松明を立てかけ火を焚いている。そして、前方から暴風の塊が、上方から二つの鉄の塊が振っ

てくる。
「――――!!」
とっさに魔法を切り裂くが僅かに速度が落ちる。頭上から振ってきたのは英雄（チャンピオン）が振り下ろした巨大な戦鎚。
即座に身体強化、加えて鎧にも緑のラインが走る。振り下ろされた戦鎚に指の先端が尖った攻撃的な鎧がめり込む。腕を曲げ、足を曲げ、腰も曲げ勢いを殺したが地面が柔すぎる。膝近くまで足が沈む。が、手に力を込める。ピシリと亀裂が広がり戦鎚が砕けた。
「――――!?」
驚いた顔の英雄（チャンピオン）。通常の個体と異なり一周りほどデカい。その首に鎖分銅を巻き付ける。
「――ＧＵＧＡＧＡ!?」
振り解こうと首を振り、その勢いを利用して足を抜いて英雄（チャンピオン）の背に飛び乗る。このまま頸椎に剣を突き刺し殺すのは簡単だが、それをすると女が潰れて死ぬ。
英雄（チャンピオン）の身体には女や子供が鎖で縛り付けられていた。英雄（チャンピオン）を殺せば下敷きになるだろう。
取り敢えずそう言うのが無い個体に向かって魔法による毒が付与された魔剣を放つ。距離がある田舎者（ホブ）や英雄（チャンピオン）は防ぐ。
「ＧＯＢＵＧＯＯＲ!!」
突っ込んできて棘の付いた鉄球を振り下ろしてくる。かわして地面に接触した鎖を剣で縫いつける。その鎖の上を駆けて首を切り落とす。シャーマンが魔法を放って来たので英雄（チャンピオン）の兜飾りを掴み振り回し魔法を払う。焦げた首を遠心力そのままにシャーマンが集まった場所に投げつけ何匹か巻き添えに殺す。
動揺しているシャーマン達の下に跳ぶが田舎者（ホブ）数匹と英雄（チャンピオン）２匹が邪魔してくる。
田舎者（ホブ）達は『肉の盾』を構える。舌打ちして、三日月刀（シミター）を投げつける。大きく弧を描いた三日月刀（シミター）は盾の後ろに隠れた田舎者（ホブ）達の首を刈り取る。
「ＧＯＯＢ！」

「ＧＯＲＯＯＲＯＢＯ!!」
そのまま英雄（チャンピオン）や田舎者（ブ）達を切り裂く。呪文を唱えようとするシャーマン達の喉を的確にナイフで潰していく。
だが、それでも数が多い。遺跡の通路から次々ゴブリン達がやってくる。何匹かは『肉の盾』や『肉の鎧』を用いて……。
ここ周辺で女が攫われたとは聞かない。あの鏡を使って離れた場所から攫って来たのだろう。
「ＧＯＢＵＲＯＯＯ!!」
「ＧＯＯＢＧＯＯＯＢ!!」
「――――――■■■■■■■■■■■ッ!!」
ギャアギャア騒いでくるゴブリン共に喧しいと叫び声を上げる。人の言葉を使える程度には声帯も変化した。それでも、その喉から放たれる咆哮は獣性を宿し英雄（チャンピオン）達でさえ竦み上がらせる。
「ほう、大したものだな……本当にゴブリンなのか？」
まずはシャーマンを殺す。次に鎖や投石機を持った奴等。と、遠距離攻撃の手段を持つ奴等から殺そうと算段をたてているとパチパチと拍手が聞こえ来る。聞こえた言葉は共通語。ギロリと兜に刻まれた一本線からそちらを睨みつける。
そこには妙な男がいた。
台座の隣に立つその男の額に一本角を生やした浅黒い肌に筋骨隆々の体。しかしオーガや英雄（チャンピオン）のようにでかいわけでなく大きさとしては田舎者（ブ）程度。やけに豪勢な服を着た、明らかにゴブリンでも、かといって秩序の眷属とも思えぬ容姿。
「何者だ？」
「ほう？人語を解するのか。成る程、ゴブリン程度でも稀にこうして話せる者が生まれるとは」
完全にこちらを見下した目。ゴブリンだから、と言うよりは自分が誰よりも優れていると思っている目。まあつまりゴブリン共と同じ目で良いだろう。
「我こそは冥府よりいでし十六将が一人。貴様のような雑兵では一生に一度目に出来るだけで幸福なことだ」

「冥府？」
「ああ。魔神将と言えば解るな？」
「知らん」
　ゴブリンスレイヤーの言葉にピクリと眉根を下げる魔神将とやら。明らかにいらだっていて、しかし仕方ないという風に首を振る。
「多少知能があろうと所詮はゴブリンと言うことか。貴様等混沌の、無秩序の使徒達の支配者たる魔神王様に使える十六将の一人だ」
「――――――！」
　ゴブリンスレイヤーの体が強ばるのを見て笑みを浮かべる魔神将。しかしゴブリンスレイヤーの視線が剥いたのは、そちらではない。
　その隣に現れたゴブリンだ。枝で作られた王冠をかぶり、肉の盾を持ったゴブリン。王（ロード）だろう。木の板に括り付けられた少女には、見覚えがある。自分と一番ともにいた少女。
　全身痣や擦り傷だらけ、股からは血が流れている。
《久し振りだなぁ、裏切り者――》
　片腕しかないそのゴブリンはゲタゲタ笑う。ゴブリンスレイヤーを見て、馬鹿にしたように、嘲笑う。次の瞬間にはゴブリンスレイヤーは王（ロード）の前に現れる。その首を切り落とそうと――しかし
「貴様！ゴブリン風情が、我を無視するか！」
　ゴブリン如きに無視され、ゴブリン如きを優先された事に腹を立てた魔神将が至近距離で魔法を放つ。炎の風の猛威に吹き飛ばされ遺跡の壁に激突する。
　瓦礫を蹴り飛ばし、王（ロード）でも、魔神将でもなく『肉の盾』にされた少女を見る。自分の役に立ちたいと、神の声を聞いて古代の秘術を復活させた少女、導師。
　ふざけるな。ふざけるな！それは自分のものだ！嘗て家族を見殺しにした少女を育てることこそ、自分が人間だと言い張るための手段だったというのに、台無しだ！
「――――ッ！」
　そんな思考に吐き気がする。純粋に導師を心配してやれない自分を今すぐ殺したくなる。だが、まずは助けてからだ。そのためには魔

神将が邪魔だ。幸い対したことはない。武器さえキチンとしていれば弟子でもどうとでもなる相手。魔剣を数本打ち込んでやればそれで決着が付く。付くのだが――

《動くな！》

「あ、う――っ!!」

その動きを察知したのかロードが導師の腕に杭を突き刺す。破傷風になること間違いなしの錆びた杭。先端が劣化で丸くなり、皮膚を貫くのではなく突き破り鈍い痛みを与える。目を覚まし呻く導師の声に動き止めたゴブリンスレイヤーに向かって『肉の鎧』を着た英雄（チャンピオン）がハンマーを振り下ろす。

「――!!」

とっさに強化を使い防御するが内臓が揺さぶられる。僅かにダメージを負ったのか、ゴボリと鎧の隙間から血を吐き出す。

「人間の女が人質になる、か。つくづくゴブリンらしくないな」

「……黙れ、俺は……人間だ」

立ち上がり魔神将を睨み付けるゴブリンスレイヤー。自らを人間だと名乗ったゴブリンスレイヤーに魔神将は鼻で笑う。ゴブリン風情が人間を名乗ることが可笑しくてたまらないのだろう。

《クカカカ。くだらんなぁ……人間？人間だと？莫迦な奴だ、人間は『肉の盾』を前に何も出来なくなるマヌケだというのに》

ゲタゲタ嘲笑うロード。ゴブリンスレイヤーが睨みつけるとヒッ！と慌てて肉の盾の裏に隠れ導師の肩に杭の先端を押し付ける。

《てめぇは絶対殺す。地の果てに逃げようと追い詰めて四肢をもぎ取ってケツの穴に熱した鉄棒を挿して獣に食わせてやる》

《――は、ハハハ！強がるな、人間ぶるお前に、人質を見捨てることなど出来るものか。なぶり殺しにしてくれる！》

ゴブリンスレイヤーの殺気に完全にビビっていたロードだったが知恵を神より授かったとは言えゴブリンはゴブリン。相手を自分より下に見る。特に、こんな状況では勝ち気になって自分が死ぬなど考えない。

集まったゴブリン共もニタニタ笑い得物を構える。

突然攻め入り、多くの仲間を殺したこの悪人をいたぶれると思うと楽しくて仕方ないと顔が語る。
「まあ待て」
しかしそれに待ったがかかる。魔神将だ。ニヤニヤとゴブリンみたいな笑みを浮かべゴブリンスレイヤーを見下ろす。隣のロードは止められたのが不服そうだが逆らわないのは、暗にこの数のゴブリン達では太刀打ちできないという事を解らせる。
「貴様はゴブリンにしては随分やるようだ。我が配下に加わるが良い。そうすれば、この娘を返してやる。それとも、また新しく育てるか？好みのサイズになるまで」
「……ッ!!」
どうやら魔神将はゴブリンが人を育てるのは、知恵を手にしようと結局はそう言うものだと言う認識らしい。好みの見た目が、好みの年齢に育つまで育てて、犯す。どうせお前はその程度しか考えていないんだろう？そう目が語る。腹立たしいと睨めば魔神将は小さな火を生み出し導師の左目を焼く。
「あああああああああっ!!」
「態度に気をつけろゴブリン。この女の顔を焼いて、抱けぬ見た目にしてやろうか？」
「……てめぇ……ゴブリン相手にそんな戦法とってよく将だ何だと名乗れるな」
「……貴様。つくづく道理を知らぬ……口の利き方をわきまえよ！」
無数の魔法が飛んでくる。ゴブリンスレイヤーは床を蹴り壁を走りかわす。その高速移動に狙いを定められない魔神将の愚鈍さを鼻で笑い、痺れを切らして範囲魔法を放ってきた瞬間飛び込む。
鎧に強化を施し皮膚に強化を施し肺に強化を施す。迫り来る炎の壁を抜け、目を見開く魔神将の顔面を殴りつける。
「ぶげぁ?!」
流石魔神将を名乗るだけあり硬い。が、鼻の骨が折れ吹き飛ばされる。そして、目を見開き慌てて肉の盾を構えようとするロードに向

かって剣を振り上げる。
文字通り真っ二つになって左右に倒れるロード。ゴブリンスレイヤーはすぐさま導師を連れてこの場から撤退しようとして、雷に焼かれる。
「――――――！」
「――さ、ま――――貴様貴様貴様きさまきさまきさまキサマキサマキサマァァァッ!!」
慌てて導師から離れる。ゴブリンスレイヤーを追うように放たれる魔法の暴風雨。雷が、炎が、石礫が、氷が、風の刃が、水の槍が殺到し遺跡の壁を大きく抉る。
「ゆる、ざんぞ！ごの魔神将の言葉をむじし、あまづさえ殴りつけるなど！」
頬の骨が砕けたのだろう。歪な顔の形になった魔神将が憤怒の表情で魔法を放ち続ける。やがて使える回数の限界がきたのかポシュという音と共に掌から煙が出る。
「ゴブリンどもぉ！やづをごろぜぇぇ！」
魔神将の言葉に顔を見合わせるゴブリン達。ロードが死んだ。あの偉そうなのもなんか疲れてるみたいだ。
どうする？
どうしよう？
答えは直ぐ出る。なにせゴブリンなのだ。
「――ご――あ？」
ズブリと魔神将の胸を1匹の英雄（チャンピオン）が貫く。ゴボ、と血を吐き出し振り返る魔神将。英雄（チャンピオン）はニヤニヤ笑い、次の瞬間魔神将の内側から雷が迸る。
「がああああ――――――ッ!?」
本来なら並の剣で傷つけられるはずない魔神将は、ゴブリン達がどれだけ剣を振るおうが関係なかった。しかしその剣は彼がゴブリン達に与えたものではなく、片腕しかないため肉の盾を扱えば他に何も扱えないロードが一番隊隊長に渡した魔剣。都の有名な鍛冶師が鍛え、都一の魔法の使いである賢者と外なる知恵の神の恩恵を受けた導

師が魔法を付与した魔剣。いかに魔神将でも耐えきれず、煙を吐き絶命した。
「ＧＯＲＡＲＡＲＯＯＯＯＢ!!」
「「ＧＲＯＯＯＢ！ＧＯＢＲＯＯＯＯ!!」」
英雄（チャンピオン）が死体の刺さった剣を掲げ叫ぶと他の英雄（チャンピオン）も含めたゴブリン達が叫ぶ。偉い地位はほしい、けど導くなんて面倒。それを代わってくれたんだから賞賛してやろう。
新しく群の長になった英雄（チャンピオン）は縛り付けられた女達を見て、ハァ、と吐息を吐き涎を垂らす。
さてどれにするかと見回す。そして、まだ一度しか使われていない締まりが良いであろう女を見つける。手を伸ばし――
「――ＧＡ？」
伸ばした腕が切り落とされる。何時の間に現れたのか、黒い鎧の騎士が剣を振り抜いていた。
「ＧＵＧＡＡＡＡ!?」
腕を押さえ叫ぶ英雄（チャンピオン）。魔剣を振り下ろそうとするが喉に大剣が突き刺さり倒れる。
「――ＧＵ、ＧＡ――」
周りのゴブリン達が叫ぶ。ああ、五月蝿いな。
五月蝿いな、喧しいな、消してしまおう。
「ＧＵＧＹＡＡＯＯＯＯＡＡＡＢ!!!」
「――!?」
無数の剣が空中に生まれる。慌てて肉の盾や肉の鎧で防ごうとするゴブリン達は、しかしそれごと切り裂かれる。
１匹が何とか黒騎士がやけに執着していた肉の盾を掴む。構えて、安堵した瞬間鉄の杭に心臓を盾ごと貫かれた。
「ＧＥＧＹＡＨＡＨＡＨＡＨＡ!!!」
無様だなぁ。無様だ――何だその様は？
うるせぇ、黙れ。仕方ねぇだろ、彼奴が人質にされてんだ。

だから？だからどうした。そんな事、気にするタマか。お前はあの女なんてどうでも良い。死ぬ？勝手に死ね。お前には何の関係もない。

――――――ッ

言い返せないか？そうだろうよ、お前は今この瞬間も、彼奴の安否じゃなく、自分が人間じゃなくなるのを心配してるからなぁ。ゲゲゲゲゲ！

ごちゃごちゃ、ごちゃごちゃうるせぇな！それが、何だってんだ！お前が死にかけている理由だよ。くだらねぇ、人のフリをするからだ。どうでも良いくせに、守ろうとするからだ。

素直になれよ。縛り付けるのは止めろ。思うままに暴れろ。本能を、解き放て

「ＧＩＨＩ――――」

砕けた兜の隙間から除いた金の瞳がギョロリと周囲を見回す。兜が邪魔なのか、手を当て力を込める。メキメキと音を立て砕けた兜の破片が地面に落ちる。

剥き出しになったゴブリンの顔。人の言葉を発するためにだいぶ人に近付いたとは言えそれでも醜い人外の顔。大きく裂けた口からベロリと長い舌を垂らす。

「ＧＲＢＧＯＯＯＢ!!」

「ＧＯＲ!!」

英雄（チャンピオン）も田舎者（ブ）達の背もゾクリと震える。カタカタと震えていると、黒い風が吹く。振り返ろうとした瞬間上半身がずり落ちる。

「ＧＹＡＯＵ?!」

「ＧＵＧＹＡＡ!!」

直ぐに己の得物を振り下ろす。しかし、当たらない。高速で動き回り切り刻んでいく。ゲタゲタと笑い声が響き渡る。その度に、ゴブリン達が死んでいく。

「ＧＵＧＹＡ!!」

「ＧＯＢＲＯＯ!!」
慌てて武器を捨て跪くゴブリン達。相手もゴブリンなのだ。跪き、命乞いをして下に付くと示せば見逃されるはず。此奴の部下になればきっと群も大きくなり良い思いも出来るはず。
その希望は隣で跪いたまま頭を踏みつぶされた仲間を見て潰える。
「――ＧＯ、ＧＵ」
「ＡＨＡ――」
震えた英雄（チャンピオン）の首を掴み頭にかぶりつく。頭蓋を砕き、脳をすすりグチャグチャと噛み潰していく。
ああ、美味い。この味は、何だろう？アドレナリン？知らない、興味ない。ただ、美味いからもっと喰おう。
「ＧＯＧＩ！ＧＵＧＹＡＡ!!」
「ＧＯＢ！ＧＵＲＯＯＢ!!」
「ＧＹＨＡ――ＧＹＡＨＡＨＡＨＡ!!ＧＹＡＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ!!!」
逃げ出そうとするゴブリン達だったが出入り口の上部に剣が突き刺さり出入り口を崩す。逃げ場が消える。
獲物は数百。狩人は1人。
狩りが始まる。

「ゴブリンが陽動なんて――――！」
「小鬼王（ゴブリンロード）が居たとしても、不可解……おそらく覚知神から軍の動かし方を学んだ」
「話は後！姉ちゃんと、師匠！」
遺跡に向かって駆ける2つの影。剣豪と少女剣士、少女剣士におぶさった賢者。村を襲う英雄（チャンピオン）や田舎者（ブ）、シャーマンなど上位種のみの群。
それだけでも異常なのに導師のいる村に戻れば4人が分かれたタイミングでゴブリンの群に襲われたという。そして、導師が攫われ

た。偶然とは思えない。計画的な犯行としか思えない。ゴブリンが？

ね、師匠。ボクの村を襲ったゴブリン達の関係って？

俺が昔取り逃がしたゴブリンが『渡り』になって造った群の一部だ

「――――」

ふと、昨夜の会話が蘇る。嫌な予感がする。

洞窟が見えてきた。進んでいくと妙な破壊後があった。そこを無視して進むと遺跡――いや、神殿のようになっていく。

崩れた通路を蹴り飛ばす。途端、肺を重くするほどの血の匂いが流れてくる。中には夥しい数のゴブリンの死体が転がり床を赤く染める。

「これ、ゴブリンスレイヤーさんが？」

「姉ちゃんと師匠はどこに――――」

顔をしかめながら中に踏み込む少女達。と、転がった死体の中に明らかに人の物もあるのを見つけた賢者がその場でうずくまり吐き出す。いや、人の一部がなかったとしても余りに凄惨な光景だ。

３人が顔をしかめているとグチャグチャと粗食音が聞こえてくる。

「――師匠？」

音の発生源を見れば、見えるのは黒い鎧。パキキとシャーマンと思われる掌を踏み、指の骨が折れる音が響く。

肩を揺らしていた黒い鎧は動きを止めゴブリンの腕を放り捨てると立ち上がり振り返る。その顔は、人の顔ではなかった。

「「――――!?」」

少女剣士と剣豪は剣を構え、賢者は杖を構える。

「あれは、ゴブリンか？」

「何でゴブリンスレイヤーさんの鎧を……」

「――２人とも、構えて」

困惑する剣豪と賢者とは反対に、冷や汗を流し警告する。

「ＧＩＨＩ――ＧＹＡＡＨＨＡＨＡ!!」

「――――ッ!!」

切りかかってきたゴブリンの一撃を剣で防ぐが、踏ん張りが利かず

吹き飛ばされる。
「ッ！この！」
「ＧＯＧＩＨＡＨＡＨＡ!!」
剣豪が切りかかり、ゴブリンも同様に剣を振るう。剣同士がぶつかり合い火花が散る。その剣技に目を見開く剣豪。
本能のままに振り回しているようでその剣技には見覚えがある。当然だ、自分が使っているものなのだから。ゴブリンが、魔物が、無秩序の劣兵が？
「ふざ、けるな！」
全身全霊の力を込めて振り下ろす。が、ゴブリンはそれを受けず剣を斜めに構え受け流す先程とは異なる剣術。剣豪はしかし動揺こそすれ体幹をぶれさせることなく地を踏み込み肩をつきだしゴブリンに体当たりする。僅かにバランスを崩したゴブリンに追撃しようとするがゴブリンは体勢を崩したまま剣を振るう。
「――ッ!!」
身体を仰け反らせ回避する。胸当てをガリガリと剣先で削られ、体勢を立て直そうとする前に足をかけられる。そのまま腹に衝撃が走った。
「あ、が――――！」
ミシミシと腹に膝が食い込む。バランスを崩した状態では踏ん張れるはずもなく吹き飛ばされゴブリンの死体の山に突っ込む。
追撃しようとしたゴブリンを炎が襲う。魔剣を何処からともなく取り出し旋風で払うが、燃えていく巻物（スクロール）を捨てた賢者は既に呪文を完成させていた。
「《フローズン・ケージ》！」
「――ＧＩ！」
直ぐにその場から飛び退くゴブリン。先程まで立っていた場所が一瞬で凍り付く。ゴブリンも片足が氷塊に捕らわれ空中に固定される。
「やった――――ッ!!」
と、ゴブリンは弓を取り出す。矢につがえたのは矢ではなく剣。賢

者も見たことがある。お湯を沸かせる程度の熱を発する魔剣だ。それが放たれる。
すんでのところで回避する。通り抜けた魔剣は壁に突き刺さると同時に爆発した。内包されていた魔力が暴発したのだ。
あの程度の魔剣で、あの威力。なら――
「ＧＹＡＨＡ！」
魔法が封じられた魔剣がゴブリンの手に現れる。あれを何発も撃てるのか。なら、もしかしてもっと格が上の魔剣も？想像し顔を青くする賢者。と――
「てやぁぁ！」
「ＧＵＧＩ!?」
魔剣を放つ前に、少女剣士が切りかかる。師から貰った剣。しかしゴブリンはその剣を防ぐ。固定されている分ゴブリンの方が少女剣士より踏ん張れる。と、少女剣士はさらなる攻撃を放つ――
「もう、一発ぅ！」
「――――!!」
神々しい光を放つ剣。弓で受けようとしたゴブリンだったがぶつかった瞬間激しい光が周囲を多い、氷が砕け吹っ飛ばされる。
「ＧＵＧＩ！ＧＹＡ――ＧＵＧＹＡＮ!!」
床を転がり柱に激突するゴブリン。瓦礫を吹っ飛ばし憎々しげに少女剣士を睨む。
「２人とも、無事か!?」
と、剣豪がやってきて剣を構える。動きがいつもよりぎこちない。やはり無視できるダメージではないのだろう。
「なあ……あのゴブリン、鎧だけでなくあの剣技――」
「それに、あの魔剣を作り出す能力――」
「――うん、師匠だね」
「「――――」」
少女剣士の言葉に２人は目を見開く。そして、苦虫を噛み潰したような顔をする。
「どういう事ですか、何故あの人が……ゴブリン達が何かしたのです

か」
「だとしたら、人に直す方法はある？一度、捕らえて……」
「違う。師匠は、最初っからゴブリンだよ。気付いたのは数ヶ月前だけど」
「最初から!?で、ですが……彼は！」
「うん。優しかった……ううん、優しいよ……でも、今は様子が可笑しい……取り敢えず止めるよ」
少女剣士の言葉に賢者と剣豪は得物を握った手に力を込める。
「止めるって……出来る？殺さずに倒そうとして」
「正直、私は噂に聞く魔神将とやらよりあの人の方がずっと恐ろしいのですが」
「殺す気で来られたら……どうかな……でも、剣豪を斬らずに殴ったり、魔剣は格が低いのを使ったり……ゴブリンが様子見なんてするとは思えないし」
「……まだ理性が残ってる可能性があるって事？」
「だと良いんですが」
「――ＧＵＧＩＧＹＡＧＹＡ!!」
床を踏み抜き迫るゴブリンスレイヤー。少女剣士は光り輝く魔剣で防ぐ。剣豪が切りかかり、距離を取ったゴブリンスレイヤーの足場が溶け沼のようになる。ゴブリンスレイヤーは魔剣を投影して弓につがえる。狙いは、賢者。
「させるかぁ！」
が、少女剣士がそれを弾く。
「――この剣凄い」
「それ、たぶんこの辺りの遺跡にあると言われてる聖剣」
「え、ボク選ばれた勇者なの？師匠との会話が現実になっちゃった……うん。なった……だからさ、師匠。もう一つの約束も現実にしようよ」
剣をしまい、聖剣を両手で構える。
「行くよ師匠。今日こそ、勝ち越す！」
「ＧＯＯＯＯＯＯＢ!!」

ゴブリンスレイヤーは使い慣れているであろう真銀（ミスリル）の剣を投影する。聖剣ならそれこそバターのように斬り裂けるだろう。しかしゴブリンスレイヤーの剣に緑のラインが走る。そのまま幅の広い剣を生み出すとそれを足場に飛び出してくる。

「――ケホ」

「――――」

剣がぶつかり合うその瞬間、聞こえてきた小さな声。本当に小さなその声に、ゴブリンスレイヤーも少女剣士も動きを止め振り返る。

「――ん――――に――ち……」

「この声……姉ちゃん、何処に!?」

「ＧＵ――」

辺り一面血だらけだ。肉片だらけ。何か探すには向かない状況だが、見つける。英雄（チャンピオン）と思われる大きな死体、細切れになった肉片が僅かに震える。

「姉ちゃん！」

その肉片を蹴り飛ばし、下にいた導師を見つける。腹に穴があいているが、内臓はそこまで傷ついていない。《小癒（ヒール）》の巻物（スクロール）を使用して傷を癒す。傷が深くて、完全に治療は出来ないが……。少なくとも内臓の傷は癒せたはずだ。

ほっと息を付いて、ゴブリンスレイヤーを見る。剣士も賢者も様子を見る。止まったが、理性を取り戻したのだろうか？

「お――にい、ちゃん――」

「姉ちゃん！待って、喋っちゃ駄目だ！傷は治ったけど、血が――！」

「な、にを――してるの？」

ゴブリンスレイヤーの身体が震える。怯えるように、後ずさる。導師は血で汚れた顔を上げゴブリンスレイヤーを瞳孔が開いた瞳で見つめる。

「――ＧＩ――ＧＵ」

「何を、してるの？わた、しを――忘れようと……して、るの？そんな事……許、さない」

導師の言葉にゴブリンスレイヤーが明らかに震える。警戒するよ

うに唸るが導師に襲いかかることはしない。
「それが、責任……私の家族を、見捨てた……あな、たの……覚え、続けて……そ、したら……人間扱い、して……あげる、から」
「……」
「ＧＵ、ＧＩＧＩ!!」
「――いい、の？あなたは、良いの？ゴブリンで――」

声が聞こえる。
この声は、誰だったか――。ずっとそばにいた気がする。言い訳がしたくて……言い訳？何の？
自分が何かだと、そう言いたかった筈だ。何か？自分は何だ？人間？ゴブリン？自分は何といいたくて、誰と居た？

「ＧＵ、ＧＩ――ＧＵＧＡＡＡあああああああっ!!」
頭を押さえ叫ぶゴブリンスレイヤー。大きく仰け反り、地面を転がり壁に頭を叩きつける。
「あ、ぐ――はぁ――はぁぁ」
ゴブリンスレイヤーの瞳に理性の光が戻る。導師はただでさえ血を流しすぎていたのだ、再び意識を失う。
「ゴブリンスレイヤーさん、戻ったのですか？」
「色々聞きたいことはあるけど、取り敢えず良かった」
「流石姉ちゃんの声……すごい効き目」
賢者と剣豪はその場で膝を突き少女剣士もはぁ、と嘆息する。
「もう、迷惑かけたんだから師匠が皆を運んでよね」
「そうですね。それぐらいの我が儘は許されるでしょう」
「疲れた」
「……」
「どうしたの師匠？ほら、帰ろうよ……」

少女剣士が首を傾げるが、ゴブリンスレイヤーは目を細めて首を振る。
「……いや、俺は帰れない」
「……え？」
「それは、私達に正体がバレたからですか？確かに驚きましたがあなたが多くの村を救ったのは解っています」
「他の人にバレたらどうなるか解らないけど、少なくとも私達は貴方のことを知ってる。さっきまでは怖かったけど、もう戻ったなら」
「戻れた、か……」と呟くゴブリンスレイヤー。
「むしろさっきまでが、本来あるべき形に戻ってたんだよ」
そう言って、新しい兜を投影する。
「で、でも、だって……皆で冒険しようって」
「ここに散らばってる死体、殺したのは俺だ。人間もゴブリンもな……そいつに傷つけたのも俺。そんな俺が、人として生きる？笑わせる――」
「ま、待って！」
慌てて追おうとする少女剣士の前に無数の大剣が壁のように現れる。剣豪や賢者の周りにも檻のように現れる。
「人間ごっこは終わりだ。本当に、くだらない時を過ごした」
「師匠！」
剣を砕いてゴブリンスレイヤーに駆け寄ろうとする少女剣士に無数の鎖が絡み付く。
「俺はゴブリン――そうだな……ユダ。異端の小鬼（ゴブリン・ユダ）だ」
その名を残して、ユダは弟子達の前から姿を消した。

ゴブリンスレイヤー

魔神王が倒される。それは秩序の民にとって文字通りお祭り騒ぎの出来事だ。

魔神王を倒したのは伝説の聖剣を持った少女に、その少女と同門の剣士にして剣聖、そして賢者。

しかもどの娘も頭に美を付けるような少女達だ。彫刻家と画家は彼女たちの姿を残そうとし、詩人や楽士は容姿と功績を讃える歌を作ろうとした。

しかし彼女達は王への挨拶と白金等級の昇級が終わると、とっとと旅立った。残党を処理して欲しかった王達に「悪魔共を放置して、辺境に何をしに向かうのか」と尋ねられ「ゴブリン……」と口揃えて答えたそうだ。

まあそれでも、通り抜け様に片手間で潜んでいる邪教だの残党だのを潰してくれていたが。

見返りを求めぬ理想の英雄として民からの人気がますます上がった。

都ほどではないが祭りも近付いてきた今日この頃、辺境とは言え冒険者ギルドも存在する街はやはり活気づいていた。

そんな中ギルドの受付嬢に祭りを共に回らないかと誘われたゴブリンスレイヤーと呼ばれる銀等級冒険者。日頃世話になっているからと応えた。午後からだ。ちなみにその後居候先の牛飼娘に午前中回ろうと誘われている。

とはいえ祭りまでまだ時間がある。故にギルドへやってきてゴブリン退治を手伝ってもらったメンツに酒をおごるゴブリンスレイヤー。と、その時――

「たっのもー！」

バァン！と扉が勢い良く開く。何事かとそちらを見やれば3人の少女達。

中々整った装備をしているが若い。貴族などの子女で、装備を調えて冒険者登録にきたか？と誰もがそう考え、黒髪の少女が首からかけた白金の認識票を見て目を見開く。中には飲んでいた酒を噴き出す者も居た。

冒険者の頂点。そして黒髪で、駆け出し程度の年齢。腰に差すのは重厚な剣と真銀（ミスリル）製の剣。

知っている。詩人達が歌う歌と同じ容姿、しかし何故彼女がこんな所に!?

「わ、わ！見てくださいゴブリンスレイヤーさん！勇者様ですよ！」

「賢者様まで――――！」

最近ゴブリンスレイヤーとよく組む女神官が興奮する。そう、彼女は魔神王を打ち倒した、あの勇者だ。

そんな将来語られるであろう今を生きる伝説に興奮している女神官の友人で、丁度良い依頼が無くてギルドで代筆屋や代読屋をしていたら気づけばギルド職員によりあの手この手で抜け出せなくされた女魔術師も自分と殆ど同期でありながらあっと言う間に飛び級した賢者を見て興奮しているようだ。

が、不意に顔を青くしてキョロキョロ周囲を見回す。

「ど、どうしたんですか？」

「い、いえ――賢者様と仲の良い彼奴も来てるんじゃと思って」

「彼奴？」

「五月蝿いとか言って人に向かって爆弾投げてくるような奴よ。確か、導師とか呼ばれてたかしら」

「導師様ですか？」

と、彼女達が会話している間に勇者達は受付の下まで移動する。

「ね、ね、この辺りにゴブリンスレイヤーって名乗ってる人が居るって聞いたんだけど、どんな人？」

「へ？ゴ、ゴブリンスレイヤーさん……ですか？」

受付嬢は同僚のお気に入りの冒険者の呼び名が出て困惑する。いや、注目していた冒険者達も、か。何故最高峰の冒険者が雑魚狩りの冒険者を……。

と、そんな空気を無視してゴブリンスレイヤーが彼女達に近付いていく。
「俺だ」
「へ？」
「ゴブリンか？」
「えっと……君は？」
突然やってきたゴブリンスレイヤーに首を傾げる勇者達。
「ゴブリンではないのか？」
「ええっと……貴方がゴブリンスレイヤーですか？」
「ああ……」
と、勇者の連れ――恐らく剣聖と思われる少女が尋ねてくる。ゴブリンスレイヤーが肯定すると3人の少女は顔を見合わせる。
「ごめん、人違いだった」
「人違い？」
「ん。考えてみれば、逃走中のあの人がわざわざ解りやすい名を名乗る筈ない」
「まあ、あえて名乗っている可能性も否定できませんでしたが」
「……？よく解らんが、ゴブリンではないのか？」
「うん」
「はい」
「ん」
「そうか……」
自分に用事と言うことはゴブリンかと思ったがそうではないらしい。では用はないと席に戻るゴブリンスレイヤー。いやいや、と妖精弓手が呆れる。
「もっと聞くことあるでしょう。何でゴブリンスレイヤー探してるか、とか」
「確かにのう。おぅい、娘っ子ら、少し良いか？」
「ん？ボクたち？」
鉱人道士が呼ぶとあっさりやってくる勇者達。その足取りに警戒はない。というか、警戒する必要がないのだろう。

席に着いた勇者達に一品奢るから話を聞かせてくれと頼むと皆思い思いに注文する。剣聖だけは気を使ったのか安いのを頼んだが。
「お前さん等かみきり丸探しとったんだろ？まあこっちのかみきり丸とは別のようだが、何故だ？お前さん等は白金等級に金等級、小鬼なんぞ簡単に殺せるだろう？」
「カミキリムシ？」
「かみきり丸、だ。他にもオルクボルグ……まあ小鬼殺し殿の字名だな」
と、蜥蜴僧侶が答えるとああ、と納得する勇者。注文した揚げ物の詰め合わせが届きまずは唐揚げを口に含む。
「別にゴブリン退治のスペシャリストを探してたわけじゃないよ？いや、名前とか変えてる可能性もあるし、探しているとは言えるのかな。ボクたちが探してる人が昔、ゴブリンスレイヤーって名乗ってたんだよね」
「その名の通り主にゴブリンを狩ってましたね。お金が必要な期間では銀等級に相応しい依頼をこなしてましたが、急遽集める必要がなくなればまたゴブリン狩りに」
「はあ？オルクボルグ以外にそんな変な奴が居るの？」
妖精弓手が信じられないと眉根を寄せるとゴブリンスレイヤーはそう言えば、と思い出す。
「以前水の街で彼奴も俺を見て訝しんでいたな」
「ああ、剣の乙女さん？確かにあの人も師匠と一度会ってたっけ」
「師匠？勇者様達の？えっと……そのゴブリンスレイヤーさんが？」
と、女神官が首を傾げる。言いよどんでいるのは何も同名の知り合いが居ると言うだけではあるまい。そんな女神官の様子を見て勇者はケラケラ笑う。
「アハハ。まあ、確かに……魔神王倒したボクの師匠がゴブリン専門なんて妙な話だよね」
「い、いえ……そんなつもりじゃ」
「良いって良いって。言葉にすると自分でも変な感じだからね……でもね、師匠は強いよ。ワイバーンもトロルもオーガも師匠の前じゃ

雑魚だったもん」
「それなのに、ゴブリン狩りを？」
　女魔術師は不思議そうに言う。彼女にとって冒険者とは怪物を退治し、人々を救う者達であると同時に常に上を目指すべき存在だ。ゆえにゴブリンスレイヤーの事を当初は嫌っていた。同時期に冒険者になった後何となく話す機会が増え子犬みたいだなぁ、と思う内に仲良くなった女神官が居なければ今でも嫌い、とはいかなくても苦手ぐらいにはなっていたろう。
　今ではゴブリンスレイヤーは自分に出来る範囲で人を救っているのだと思えるがオーガだのワイバーンだの倒せるのならもっと人のためになる仕事を……。と、考えていると勇者が心を読んだかのように呟く
「ゴブリンは村を滅ぼすよ」
「へ？」
「ボクは……ボク達は、冒険者になる前、師匠の仕事に初めてついていった時、その光景を見た」
「建物は壊されて、家畜は食べられて、畑は焼かれて、女の人は犯されて男の人は食べられた」
「ですが実際に襲われた事のない者達は口々に言うでしょう。運がなかった、と……」
　ゴブリンは弱い。村の力自慢なら追い払えるのが当たり前。全員、そんな風に考える。簡単に倒せて、国を動かす必要なんてないから、放置されることが多く、稀に村を襲えるほどの規模になる。その稀な被害にあった者を、かわいそうで済ませる。災害のようなものだと、何年も経つのだからもう気にするなと窘める。
「災害なんかじゃないよ。だって彼奴等、楽しそうだった。獣のように暴れるトロルや、魔神王の為に、って意志のあるオーガとかとは全然違う。ある程度の知能を持って、それが楽しいことだと理解して、やるんだ」
「まあ獣の中には得物で遊ぶのも確かにいますが、ゴブリンのそれは方向が違う」

思い出したのか、ブルリと震える剣聖。彼の剣聖が、ゴブリンに怯えている。

「ゴブリンは確かに弱い。駆け出しでも、簡単に倒せる。でもそれは戦いやすい場で、数が少なかったら……洞窟の闇の中、剣が振るいにくくて、数が多くて、毒を使う……たいていの駆け出しは殺されて、後に送られた駆け出しが疲れたゴブリン達を倒して簡単だったという」

賢者が果汁水をクピクピ飲みながら呟く。ゴブリンスレイヤーがその言葉に頷いていた。女神官も初めての冒険者としての仕事を思い出したのか俯いていた。

「そもそも国はもう少しゴブリン退治に報奨金を出すべきだと思うんだよ。基本的に人が少なく攫いやすい辺境が襲われるから、お金が用意できない。お金がないから、白磁等級しか雇えない、白磁等級しか雇えず、白磁等級でも数を送れば最終的には倒せるから、誰も危険だと思わない……」

サクサクとポテトフライを食べながらボヤく勇者。実際金にならないからとギルドに勧められても依頼を突っぱねる冒険者からすれば耳の痛い話だ。

「厄介なのは倒しきれないこと。生き残ったゴブリンは成長する……『渡り』になって田舎者（ホブ）やシャーマン、まれに英雄（チャンピオン）や王（ロード）になる……英雄（チャンピオン）までなら銀等級でも何とか勝てると思うよ。1対1ならね」

「ゴブリン共が群れぬなどありえない」

「そうだよね。だから銀等級のチームが必要……王（ロード）に至っては数チームは必要だよ。最低でも80、もっと大きいとボク等なんて700近くで上位種だらけの群にあったし……まあそれは殆ど師匠が殺し尽くしたんだけど」

「優秀だな」

「優秀だよ！」

えっへん、と誇らしげに胸を張る勇者。しかし直ぐに落ち込む。

「でもその日以来どっか行っちゃったんだよね……」

「それって……」

「ううん。死んでないよ……全部殺した後、ボク達の前でどっか行っちゃった。一年ほど前にね……だから探してるんだよね。師匠が居れば、きっと寝たきりになっちゃった姉ちゃんも起きるだろうし」
「成る程。それで小鬼殺し殿の噂を聞いてここに……」
「それもあるけど基本的には辺境でゴブリン退治にね……ゴブリンあるところに師匠ありだからね」
　ゴブリンあるところに師匠、って……なんかゴブリンスレイヤーみたいだとゴブリンスレイヤーの知り合い達がゴブリンスレイヤーを見る。いや、彼女達の師匠もゴブリンスレイヤー……何かややこしくなってきた。
「ところでゴブリンスレイヤーさん、ゴブリンを追ってて変な事無かった？」
「変なこと？」
「既に群が滅ぼされてたとか、黒い鎧を着たゴブリン見かけたりとか」
「……いや、何故だ？」
「んーと……師匠が――賢者、説明お願い！」
　と、説明を賢者に任せる勇者。賢者ははぁ、とため息を吐く。
「ゴブリン・ユダって名乗る、共通語を解するゴブリンが居る。その目撃証言があれば師匠は間違いなくそこにいる」
「追っているのか？」
「そんな所」
「共通語を話すゴブリン？そんなの居るわけないでしょ……」
「……いえ、確かこの前のロードも少しだけ人の言葉を話してました。変異していけば、何時かは……」
「普通に話せるようになるよ」
「そうか、やっかいだな。人の世に紛れるかもしれん」

　ギルド職員、その中には多大な逆恨みを持たれる者がいる。
　昇級審査の監督官だ。嘘を見抜く奇跡を至高神より授かった彼女或いは彼等は昇級審査で冒険者達の嘘を見抜く係。

そもそも既にバレている上での尋問が多く、原因だって金をネコババしようとした冒険者が悪いのだがそのせいで降格された者達は彼女に恨みを持つ。主に先行し宝箱などを空ける斥候などにその手合いが多く、故に気配を消す。少なくとも戦闘職ではないギルド職員に気配を感じるなど不可能だ。祭りの準備の賑わいを利用して、裏路地に連れて行かれた。

自分達が行った悪事を正当化するために俺と同じ事をしている奴はこんなに居ると見せつけるように群れ、痛めつける前にその身体を楽しもうといやらしい笑みを浮かべる。

毅然な態度で彼等の虚言を指摘した彼女の怯える様を見てさらにニタニタと笑う。まるで――

「――ゴブリンだな」

ギルドでよく聞く言葉。同僚のお気に入りの口癖。それが聞こえた瞬間、男達が倒れる。

「いって――何、がああ!?」

自分達は倒れたのに己の足の裏はまだ地面についているのを見て目を見開き叫ぶ男達。監督官が顔を上げると、そこには全身鎧（フルプレート）の人物が立っていた。

「て、てめぇ!こんな事して、ただで済むと――!」

ゴキリと首の骨が折られる。ヒッ、と男たちが黙り込む。

ここは路地裏、建物の影、とても薄暗い。しかしその影すら飲み込む闇を体現したかのような漆黒の鎧を纏った――先ほどの声からして――男は倒れた男達を見回す。下腿を半ばほどから失った彼等が今後冒険者として活動するのは不可能だろう。いや、ギルド職員を襲った時点で不可能か。切り口は綺麗だし、今すぐ神殿に行って金を積めば治せるかもしれないが誰が神殿に連れていくというのか。

「立てるか?」

「――え」

男達の足からドクドクと流れる血が広がり服が汚れても呆然としていた監督官に鎧の男は話しかけてくる。

「立てるなら早く行くといい。俺は此奴等に訪ねたいことがある。立

てないなら運んでやる」
「あ、えっと――あ、あれ……」
立ち上がろうとしたが上手く力が入らない。腰が抜けてしまったようだ。
「――チッ」
（舌打ちされた――）
と、男が手を叩くと少女が現れた。襤褸布を纏った、痣だらけの獣人の少女だ。
「連れて行ってやれ」
「はい」
「それと、ギルド職員だ。冒険者登録してこい」
「はい」
「俺とお前もここまでだ。後は好きにやれ」
「はい」
義務的に返す少女。獣人らしく身体能力に優れているのか、監督官をヒョイと持ち上げる。そのまま歩き出した。
「あ、あの――ありがとう」
「いえ、師匠の命令なので」
「師匠って、あの人？」
「はい。私に小鬼の殺し方を教えてくれました」
「……その、あの人の名前って？」
「師匠です。他の呼び方は知りません」
「そ、そっか……」

「さて、彼奴等が来てるし、出来るならさっさと失せたいんだ。誰に騒ぎを起こすように言われた？」
《小癒（ヒール）》の巻物（スクロール）を使い男達の血を止め尋ねる鎧の男。男達が憎々しげに睨むとベキリと一人の男の掌の骨を踏み砕く。
「質問に答えろ。俺は気が長い方とはいえない――単刀直入に聞くが

闇人(ダークエルフ)は何処だ？」
「な、何の話だよ！俺は何も――」
ゴキリ、また一人の首の骨がへし折れた。
「ま、待ってくれ！本当に知らないんだ！ただ、武器と金をやるから暴れろってフード被った奴に」
「何だ、使えない――ん？」
と、足音が聞こえてくる。恐らく衛兵だろう。このままでは捕まる男達だがむしろその足音は救いの足音に聞こえた。鎧の男は舌打ちすると適当に2人を担ぎ上げる。
男達が悲鳴を上げる前に、壁を駆け上がり屋根の上を跳び街の外まで移動する。
「お、俺達をどうする気だ！」
「か、勘弁してくれ！白磁に落とされて、ちょっと俺達の苦労を解らせてやろうと――！」
「――腹減った」
人を殺そうとしておいて、自分が殺されるかもしれない状況になったとたん命乞いを始める男達に、鎧の男はポツリと呟く。日常的な会話のように、しかし話の文脈を無視して。
「こんな身体だからな、時折発散させなきゃならん。苦しめて、いたぶって、泣きわめく様を楽しまなきゃならん……じゃねぇとまた、暴れる。その点お前等みたいのは大歓迎だ。特にアドレナリン、それが入ってる脳を食えば数日は持つ……」
「は、は？何を言ってやがる……」
「タイミングが良かった。彼奴とも別れたり、食事で衝動を抑えるしかなかった。ゴブリンより人間の方が長く持つ……山賊捜す手間が省けた、感謝してやる」
嫌な予感がする。脳を食うとか、食事とか……嫌な予感がするが、心の何処かでまさかと首を振る。人間が、秩序の民がそんなまさかと――しかし、兜が消え絶望に顔が歪む。
「ああ、良いなその顔……それだけでも2日は持ちそうだ。まあ、それじゃ足りないからなぁ――いただきます」

弟子

冒険者ギルドに変なのが来た。それがその少女を見た時の第一印象。

襤褸布を纏った少女。足音がしない。ふと目を離せば見失ってしまいそうなほど存在感がない。

「ゴブリンだな」

「何でよ」

ゴブリンスレイヤーの言葉に妖精弓手は呆れたように呟く。と、勇者はスンスンと鼻を鳴らす。

「あ、本当だ。あれゴブリンの血や臓物の臭いがするね」

「ゴブリン共は増えれば女を取り合ったり序列を付けようと喧嘩する。そうでなくとも喧嘩するし、盾にもする。同族の臭いが染み着いているからな、あれは臭い消しに丁度良い」

勇者の言葉にゴブリンスレイヤーが珍しく説明する。普段言葉の足りない彼なのにゴブリンについて説明する時はこんなにも流暢に喋るのか。

「てか、それ私に血をぶっかける前に教えなさいよ」

「教えただろ？」

確かに「奴等は鼻が利く」などとは言われたがそこまで詳しく説明された覚えはない。されても絶対嫌だが。

そのゴブリンの血の臭いが染み付いた襤褸布を纏っているという少女は白磁等級の認識票を受け取る。

「ではゴブリンをお願いします」

「え、っと……ゴブリンでしたらチームを」

「大丈夫です。何度か狩っているので……巣の中のも」

焼き出されたゴブリンではなく、巣の中にいるゴブリンを倒したことがあると言う少女。受付も困っているようだ。

「では、せめて解毒剤（アンチドーテ）を買いますか？」

「いえ、師匠に毒が効かないように鍛えられてるので」

「ふむ……」

あ、と女神官は思った。ゴブリンスレイヤーが興味を持った。ゴブリンは毒を使う、毒が効かない方法があると聞けば学ぼうとするだろう。鍛えられて、彼女はそう言った。つまり鍛えて得られるという事。

「毒ならボクも効かないよ。そう鍛えられてるからね」

「方法は？」

「毎日少しずつ毒を飲んだり傷口から刺したりするの。ボクは師匠にそうされた……ん？」

と、勇者が少女に目を向ける。自分と同じく毒が効かない。それも、先天的ではなく後天的に修行で得た力。師匠も同じだったりするのだろうか？

「あ、ええと……今はゴブリン退治は無いみたいですね」

「そうですか。解りました」

受付の言葉に少女はそれだけ呟き踵を返す。話すチャンスだと勇者が近付いてく。

「こんにちは！」

「……こんにちは」

元気よく挨拶され戸惑ったように目を見開く少女。

「勇者様が私に何か用でしょうか？」

「うん。あのね、君の師匠ってゴブリン退治に拘ったりしてない？」

「……してますよ」

「やっぱり！ね、その人って今何処にいるの!?」

「解りません。だいぶ前に別れたので今は何処か……」

「嘘だね」

「……何故そう思うのですか？」

「何となく！」

ニコッと太陽のような笑みを浮かべて他者の言葉を虚言と断じた理由がただの直感であると言い切る勇者。流石に失礼じゃないかと妖精弓手や蜥蜴僧侶達が呆れたように見る。少女ははぉ、とため息を吐いてフードを取る。

ピンと上に向いた耳が現れる。片方は、痛々しく半分ほどで切り裂

かれていたが。
「流石、あの人の一番弟子」
「それで、何処にいるの？」
「解らないのは本当ですよ。この街で別れました。私はただ好きにしろとだけ命じられたので……目的があったとしても私は知りません。他の場所のようにゴブリンを殺すように弟子を置いていったのかと」
「……弟子？」
ピクリと勇者が目を細める。「ええ」と獣人少女は応えた。勇者は面白く無さそうに顔をしかめる。
「ちえ、なんだいなんだい、一年しか経ってないのにもう弟子を……」
「ゴブリンの巣で拾ったり、滅ぼされた村で拾ったのが１５人程。私は１３番目です。どうぞ十三番と」
淡々と返す獣人少女、十三番……弟子が１５人。ますます面白く無さそうな顔をする勇者。
「まあ貴方ほどの弟子は居なかったと言ってましたが」
「それ本当!?」
「ええ」
「やったー！」
と、嬉しそうにピョンピョン跳ねる勇者。どうやら相当懐いているらしい。そして、はっ！と顔を上げる。
「こうしちゃ居られない！師匠はまだ近くにいるはず、捜すよ！」
「どうやって？」
「勘！」
賢者と剣聖は顔を見合わせ、肩を竦める。何時もの事なのだろう。十三番は残された揚げ物の詰め合わせをジッと見る。
「これ私が頂いても？」
「あ、ああ……構わん」
鉱人道士から許可が下りるとパクパク食べ出す十三番。表情からは何を考えているのか察せないが耳がぴくぴく動いているのを見るに喜んではいるのかもしれない。手で摑んで食べて、ペロペロ指で舐める。

「なあ飯やったんだ。お前さんの師匠について教えてくれんか？」
「むぐ？」
「かみきり丸と同じく小鬼ばっかり狩っとるじゃろう？どれぐらい似てるか気になっての」
「カミキリムシ？」
「反応が同じですな」
　と、勇者と同じ返しをした十三番に蜥蜴僧侶が勇者達と同じように説明する。彼女達の師匠も同じようなことを言うのだろうか？
「貴方がゴブリンスレイヤーさん？」
「ああ、そう呼ばれている」
「……場所は山の麓の洞窟……ダイナマイトが手元にあったら？」
「まずは他に出入り口がないか探し、なかったら巣に投げる。あれはそこそこ値を張るが、良い物だ」
「成る程合理的」
「やめてくださいよ!?山が崩れたらどうするんですか！危ないですよ」
「「ゴブリンを放置する方が危ない。洞窟が崩れれば二度と住まれることもない」」
「もう！貴方達、もう！」
「わっはっは！息ぴったりじゃのう！」
　女神官が息ぴったりな２人を叱り鉱人道士がガハハと笑う。蜥蜴僧侶は興味深げに見て妖精弓手は呆れたように肩を竦める。
「そう言う発想がでるって事は、仕込んだ奴はそうとうオルクボルグに似てるのね」
「いいえ。師匠は強いですから、私達不出来な弟子やこの人のような戦い方はしませんよ。話に聞く弟子一号の勇者様もそうでしょう」
　言外にゴブリンスレイヤーが弱いと言われむっとする女神官に妖精弓手。しかし十三番は気にしない。
「私達は勇者様のように目も見えず耳も聞こえない状況で、気配を感じることが出来ない。だから空気の流れを感じるように、頭や腕などを出しておくように言われました」

「そのために毒が効かぬ為の特訓か……」
「はい。後万が一負けた時のために」
「？」
「体を遅効性の毒で満たしておけば食べた小鬼達を殺せるでしょう？」
　生き残れば毒の耐性があがるだけだし、と何でもないかのように呟く十三番。あの勇者と師を同じくする者の口から聞ける師の話だとこっそり聞き耳立てていた全員が顔をひきつらせる。
「他にも死後半日で周囲一帯を吹き飛ばす魔剣も持ってます。これは弟子全員……ああ、勇者様は持ってないでしょうが」
「成る程、己自身を毒餌にして、さらに死後の爆発か……魔剣ならゴブリン共が戦利品として持つだろうし、合理的だな」
「やめてくださいね!?死ぬ前提なんて、縁起でもない」
「？その方は初めからゴブリンの巣で死ぬ可能性を考えてその装備なのでは？」
「ああ。質の良い武器を与えてしまえば奴等は簡単に上位種になるからな」
　もうやだこの人達と頭をかく女神官。そんな彼女を見て成る程、と何かに納得したように頷く十三番。
　しかしこの十三番の師、ゴブリンスレイヤー以上に徹底している。まさか死んだ時喰われたりする前提で、しかも自爆までするというのだから。
「なんか、ちょっと好きになれそうにないタイプね」
「ええ。むしろ、我々十五人は勇者様達と違いそうなるように育てられましたから」
「？そうなるよう？」
「お互い、好きにならないように。何れ殺せるように……だから番号で呼ぶし、抑えるために必要とはいえ殴るし犯す」
「……え？」
「なんと……自身を殺させる？そこにいったいどんな意味が」
　妖精弓手が固まり蜥蜴僧侶が目を見開いて尋ねる。殴るだの犯す

だのと聞こえた。そこまで徹底的に己を恨まさせ、殺させようとする理由が解らない。
「師匠はまあ、少し特殊な事情で人を殺したくなるし犯したくなるんです。普段は盗賊や邪教徒、ゴブリンなんかを殺して発散してますが不定期で十分発散はしていても衝動に飲まれそうになることがある。そう言う時は私達が相手していました。師匠に殴られたり、犯されたり……」
と、襤褸布から腕を出し指を這わせる。白い肌に、斑模様のように青痣やひっかき傷、噛み痕などがあった。
「お、犯されるって……それで良いの、あんたは……」
「堕胎薬なら飲んでます。とはいえ、毒は効きにくいので気分が悪くなる量接種するのは手間ですが」
「そうじゃなくて――！その、そういうのは――」
「初めては小鬼共に奪われたので。妹や母も同様に――そして、死んだ2人は食べられました。その群にはシャーマンが居たので、私は少しでも長く持つように食事も与えられました……話の流れから解るように、2人の死体を無理やり――」
「「――ッ!!」」
妖精弓手が顔を青くする。女神官や、話を聞いていた何人かは口を押さえる。中には外に飛び出た者や、間に合わずその場で吐く者まで現れる。
「だから、その群を滅ぼしてくれた師匠に頼んだのです。強くしてくれと――師匠はその体質故にあまり弟子をとりたがらない。ですが、その体質を誰よりも疎んでいる。それでも小鬼達がのさばっている間は死ぬに死ねない」
だからこそ交換条件。近くにいるという事は衝動に襲われた時諌めるのを手伝う。小鬼を殺すのを手伝う。衝動に飲まれきった時、殺すのを手伝う。だから小鬼を殺す術を教えろ、と。
「師匠は勇者様に殺されるのは避けたいでしょうね。勇者様はどうやら師匠の事が大好きな様子。殺せばきっと後悔する。だから後悔せず自分を殺してくれる相手を用意した」

「それがお主か？」
「ええ。あの方には、そこまで嫌悪はありません。むしろ必死に衝動に抗おうとする姿は、それなりに好感を待ちます。でも殺す。殺せる――いえ、強いので殺し合いになったら殺されますけど、殺そうとすることは出来る。何の後悔もなく」
だからこそ鍛えてもらえたのだから。もし少しでも彼を手に掛けることに躊躇いを覚えるようになれば、その時点で彼は彼女をその場に置いて去ったろう。彼女はそうならなかった。ゆえにこそ、十三番目の彼女だけが最後まで残っていたのだから。人は、存外何かに依存しやすい。ゴブリンに襲われ弱っているなら尚更に……。
時間はかかるが、依存しないよう精神を鍛えることは確かに出来るだろう。ただ、彼女達の師はそんな時間をとるよりもゴブリン殺し専門の冒険者の数を増やすことを選んだ。
「後は十六番と五番、九番が師匠を殺せますね。一番である勇者様とは、どうか出会わさない事を祈るばかりですが――」
と、その時だった。
大きな爆音が聞こえた。なんだなんだと冒険者達が外に出る。どうやら街の外で爆発があったらしい。
いったい何が原因なのかと誰もが見に行こうとする中十三番はポツリと呟いた。
「――手遅れでしたね」

再会

黒い鎧を着た男は街の外の、森の奥を歩く。と、緑の肌を持った小さな影が飛び出してくる。振り向き様に裏拳を叩き込み頭を潰す。

矢が飛んでくる。掴んで、投げ返す。

練習した。増えた弟子達に毎朝毎夜、隙が出来たと思ったら殺しに来るよう命じた。その弟子の中で弓を不得意とする力の弱い圃人（レーア）の小娘の方がまだ威力も正確性も高い。

「ＧＲＯＯＲＢ!!」

「ＧＢＯＯＲＯ!!」

「通常種ばかり……祭りで浮き足立ってるとはいえ、冒険者のいる街に……素人（ヌープ）が」

無数の短剣を何処からともなく取り出し両手の指に挟む。その数、６本。腕を振るい放たれた短剣はゴブリン共の心臓を貫く。何体か考える頭があるゴブリンが仲間の死体を盾にしたり質のいい短剣を抜こうとした瞬間、死体が燃え上がり炎に巻き込まれる。

「ＧＲＯＯ!!」

「ＧＲＡＡＢＯ!!」

炎に巻かれる仲間に巻き添えになっては適わぬと手に持っていた槍で燃えたゴブリンを突き刺すゴブリン。仲間が死んだ、彼奴のせいだと喚き鎧の男に向かっていく。

頭を狙い飛び出した一体が足を掴まれる。

「ＧＵＧＩ――ＧＹＡ！」

逃れようと暴れたゴブリンだったがそのまま他のゴブリン達を殺すための道具にされる。叩き付けられ骨が砕け肉が潰れ皮膚が裂け、肉塊になった身体が飛ばされていく。

男は残った足を見て兜の一部を消すとかぶりつく。

「「――――!!」」

ゴブリン共はそれで怯える。自分達は常に食う側だと、奪う側だと思っているから、食われる側であると自覚するととんと戦う気が失せる。

背を向け逃げ出すゴブリン達は、隙だらけの背をさらす。それを見逃す理由などありはしない。
その場から逃げられる者は存在せず、死体が増える。実に簡単な作業だ。
しかし彼女も面倒な頼みごとをしてくる。いや、新しい魔剣を得るためには必要な行為ではあるのだから、一概に彼女の我が儘とは言えぬのだが……それでも大半は彼女の探求心だろう。何せ神代の神の残した道具なのだから。盤上から抜け出した魔女が今更盤上に興味を持つとは、面倒な話である。
とはいえやはり力が欲しい。それを解っているからこそ彼女も神代の権能を復活させようとしているのだろうし……。
と、鎧の男は突然その場から飛び退く。先程まで立っていた場所が、白光に飲まれる。
「そこか――」
着地地点の木を蹴り飛び出す。わざわざ連発の効かない威力の高い魔法を放つなど莫迦な奴だ。せめてシャーマンを揃えていたなら解るがその気配はない。単なる莫迦。そのくせ図に乗って何でも出来ると勘違いしやることは派手。まるでゴブリンだな。
木々を抜け、驚愕した表情の闇人（ダークエルフ）を見つける。
「――くっ!?」
金属音が響く。防がれた。どうやら多少の近接戦の心得があるようだ。しかし――
「男か、つまらん」
女なら鎮静剤代わりに持って帰ったのだがどうやら男らしい。
憎々しげに睨んでくる男の視線を受け流し短剣を投擲する。が、闇人（ダークエルフ）の胴体視力は森人（エルフ）と同等。かわされる。
「ちいっ、よもや私の計画を見抜くような手合いが、この街にいるとはな……」
「それ、寄越せ」
闇人の言葉など知ったことかと無視して彼が手に持つ一本の腕を指差す鎧の男。闇人は「何？」と訝しむ。寄越せ？破壊する気か？し

かしそのような目的には見えない。
「これを手にしてなんとする」
「てめぇにゃ関係ねぇだろ。こっちは急いでんだ、さっさと寄越せ」
「――っ、貴様ぁぁぁ！」
相手にされていない。その事実に闇人は激高し叫ぶ。自分は混沌の神々より託宣（ハングアウト）を受けた無秩序の使徒。しかし激高したところで強くなるわけでもない。魔法を放とうとして、見失う。背後の気配に気付き、振り返ろうとする前に剣が振られる。
「ぐあぁぁぁぁっ!?」
鮮血が舞い二本の腕がくるくる宙で回転する。その内片方を掴む鎧の男。闇人は取り返そうと迫り――
「あ、いた！」
「――あ？」
やってきた少女に吹っ飛ばされた。

勇者の勘を頼りに森に向かえばゴブリンの死体を見つけた。この時点で3人は頷き合い、駆けだしていた。道中何か強力な熱魔法が放たれた痕も見つけ、そこをたどり見つけたのは黒い鎧。誰かと戦っていたようなので気絶させる程度に吹っ飛ばした。
「……どうしてここが解った」
「たまたまだよ（クリティカル）」
得意げな勇者に黙り込む黒鎧。恐らく兜の下では苦虫を噛み潰したような顔をしているのだろう。顔を見たのは一回こっきりだが。
「久し振り、師匠……ユダって呼んだ方がいいかな？」
「師匠、ね……二度とそう呼ぶな」
嘗て小鬼を殺す者（ゴブリンスレイヤー）と名乗り、今は異端の小鬼（ゴブリン・ユダ）を名乗る彼は弟子と妹弟子、妹の友人と普通なら再会を喜ぶべき相手を見て忌々しそうに呻く。
何せ彼は混沌の劣兵であるゴブリンで、彼女達は秩序の民の最高戦力である勇者と、その徒党（パーティー）である剣聖と賢者。並の混沌の民なら尻尾を巻いて逃げ出し、魔神王に仕えていた者なら挑み殺される、そう

いう存在なのだから。
「姉ちゃんさ……あの日から、目を覚まさないんだ」
「そうか」
「……師匠が居れば、目を覚ますと思う」
「師匠と呼ぶな」
「……戻ってくる気は、ないの？」
「ない」
「――そっか」
仕方ないというように肩を竦め首を振る勇者。彼女とて、言葉一つで戻ってきてくれるとは思っていない。それでも、導師の話をすれば少しくらいは迷ってくれると思っていた。断られたんなら仕方がない。
剣を抜く。剣聖も同様に剣を抜き、賢者も杖を構える。
「だったら力ずくで、連れて帰る！手足の一本、覚悟してもらうよ！」
「――――!!」
地を蹴り、切りかかってくる。舌打ちして剣を弾く。神々しい光に包まれた剣は勇者に加護を与え体格で上回る異端の小鬼を吹っ飛ばす。地面を削りながら勢いを殺した異端の小鬼はその場に伏せる。頭上を剣聖の剣が通過する。
勇者の強みの一つである異常なまでの空間把握能力は彼が彼女を鍛えて植え付けた技能だ。そして、彼は自分に出来ないことを他人にやらせようとしない。彼に不意打ちを食らわせるなど不可能だ。
立ち上がりながら肘を放つ異端の小鬼。剣を引き戻す時間はない。片手をはなし防御するがミシミシと骨に力が加わり足が浮く。
異端の小鬼は回転しながら蹴りを放ち横腹を蹴りつけた。足が浮いた剣聖は踏ん張れずに吹き飛ばされる。
「――しぃ！」
「サジタ（矢）、ケルタ（必中）、ラディウス（射出）」
「――ッ!!」
しかし相手は一人ではない。勇者が再び切りかかり、賢者が力矢（マジックミサイル）を放ってくる。舌打ちしながらかわすが力矢が兜の留め具をかすり

破壊する。兜が地面に落ちて光の粒子になって消え、人語を介し続ける為に一年前よりほんの少し人に近付いた顔が曝される。
人に近付いた。しかし人にはなれない。時が経つに連れ小鬼の本能は強くなる。顔の変異も半年前に打ち止めになった。
「――連れて、帰るねぇ……アホらしい。俺はゴブリン、混沌の勢力だ。秩序の民の住処に、俺の居場所何かあるわけねぇだろ」
「欲しいから、彼処にいたんじゃないの」
「否定はしねぇよ。けど、今更だ……忘れたか？俺は本能に飲まれ人を殺した。この一年だって、本能に飲まれないために弟子にした奴等を殴って犯して、発散した。今更人の世に戻れ？出来るか、そんなこと」
一年前の出来事を思い出したのか、黙り込む三人。彼女達だって忘れていないし、解っている。ゴブリン達とは何度も戦った。力こそ別格でも、あの時の彼は他の小鬼達と同じ、殺しを、蹂躙を楽しんでいた。
正直言ってしまえば、怖かった。再会した時、あの時のようになってるじゃないかって……でも――
「でも、混沌側になりたくないんでしょ？」
「……」
「だから、その弟子達を使って発散して……理性を保ち続けてるんでしょ？ゴブリンだって狩ってるし、そういう人達も鍛えた。人間でいたいんでしょ？人間だよ、師匠は……誰がなんと言おうと、ボクは……ボク達は師匠が人間だって言い続ける」
「「……」」
他の2人も同じ意見だというように、異端の小鬼を見つめる。
ああ、本当にやめて欲しい。浅ましい小鬼の本能が、こう言ってるぞ？とケラケラ笑う。縋ればいいと唆す。縋ってどうなる？どうせ発散しなければまた暴走するのは目に見えている。
小鬼共をなぶり、殺し、食って発散するか？それで暫くは持つだろう。だけど、この方法が果たして何時まで保つのか解らない。ある日途端に、何の効果もなくなるかもしれない。

「俺はお前等が大好きだぜ。だから、近付くな」
「傷つけるのが怖いから？」
「ああ……」
「姉ちゃんを、傷つけちゃったから？」
「ああ」
「ボク達、傷つけようとしたから？」
「ああ」
「――――っ！舐めるな！」
「――――!?」
ガァン！と金属音が響き渡る。異端の小鬼の身体が吹き飛ばされる。ある意味好都合だ。転移の鏡を投影しようとして、接近する剣聖に気づき剣を払う。
人外の膂力と天性の才能を合わせた剣技。それを受けるのはあの日、無力感をこれでもかと味わい魔神王の勢力相手に己を鍛え続けた剣聖と讃えられし少女の剣技。
「ちぃ！」
そこに勇者も加われば、例え魔神将と言えど切り刻まれるだろう。ゴブリン・ユダは即座に剣を投影する。近接戦が得意な２人に近接戦で挑むほど間抜けではない。
「――――!!」
浮遊（フライ）の魔法が込められた思い通りに浮くだけの魔剣。材質はアダマンタイト。おまけに魔術の強化。如何に聖剣とはいえ一撃で砕けるものではない。２人はすぐさま距離をとり
「――――壊れた幻想（ブロークン・ファンタズム）」
「――――!!」
爆音が響きわたった。
「――――!!」
剣が硬くとも込められた魔法幻想自体は定位の物。爆発の威力は大したこと無くとも至近距離で予期せぬ爆音。聴覚が一時的に消える。

三半規管にも影響が出たのかふらつく2人。距離を取っていた賢者が魔法を放とうとするが飛んできた短剣が杖を砕く。
「サジ――――」
「知ってる」
杖を失いながらも単文詠唱で放てる魔法を放とうとして、腕を掴まれる。万力のような力に握られ詠唱が止まり、平衡感覚を失いながらも突っ込んできた勇者に向かって投げられる。
「触媒を常に複数持ち歩くように言ったのは俺だぞ？」
さらに言えば、落としにくい指輪型のにしろとも教わった。賢者は己の指にはまった触媒を撫でる。砕かれていない。まだ魔法を使える。
だが、ゴブリン・ユダは戦う気はない。森の中に向かって駆けだしていた。魔法は、間に合わない。
「この、とまれぇ！」
「――――!?」
が、勇者がぶん投げた聖剣は届いた。由緒正しい聖剣が飛んでくるのは流石のゴブリン・ユダも夢にも思わず目を見開き慌てて振り返り弾く。
動きが一瞬止まる。その一瞬で接近する勇者。平衡感覚に狂いが生じてよくここまで動けるものだと感心しつつも呆れる。聖剣もなく、どうするというのか。
「来い――――！」
「なっ!?」
再び驚愕に目を見開かされる。あえて遠くに弾いたはずの聖剣が意志持ったかのように飛んできて、勇者の手に収まる。飛んできて勢いを利用して回転し、足を狙って切りつける。
此奴、マジで捕らえるために足一本切り落とす気か！と毒づきアダマンタイト製の飛行剣を数本投影し足を守らせる。
「お前の情報は集めてたつもりだが、それは知らねえな」
「今やったら出来た」
「――――本当、強くなったな。お前に至っては今もなお強くなってるか」

「そうだよ。強くなった……まだまだ強くなる。師匠が暴れても、止められるぐらい」
「……」
「同じく」
「ええ、貴方を抑えられるぐらい、強くなって見せます」
「だから、帰ってきてよ……今度こそ、皆で冒険しようよ」
「止める、ね……次暴れた時、息の根を止めてくれんなら帰ってやるよ」
その言葉に、三人は黙り込む。
殺した方が、世界のためになるのだろう。本当は自分達を傷つけたくない彼の為にもなるはずだ。でも、彼と過ごした時間を覚えている。故に、応えを返せない。ゴブリン・ユダは舌打ちする。
迷っているくせに、逃げようとすれば向かってくるな。さて、どうするか……
「――!?」
不意にゴブリン・ユダがその上体を逸らす。頭のあった位置を芽の鏃の矢が通過する。同時に、足下が泥沼になり上から不可視の壁が押さえつけてくる。
「何だ、こりゃ――!?」
「なる程。本当に言葉を発するのか――だが、結局はゴブリンだ」
足音もなく駆けてくる気配。ある程度近付くと立ち止まり、何かを投げてくる。
「ゴブリンは死ね」
「――!」
次の瞬間、森の中に二度目の爆音が響き渡った。

爆音が聞こえた後、ゴブリンスレイヤーはゴブリンかもしれないと爆発音のした森に向かった。道中ゴブリンの死体を見つけやはりか、と生き残りを捜していると妖精弓手が見つけたと報告。ゴブリンらしい存在が勇者達と互角以上に戦っている。何の冗談だと普通の冒険者は思うがゴブリンスレイヤーはそうかと呟き距離を取った。

勇者達の実力は知らないが仮にも白金等級に金等級。彼が知る白兵戦を得意とする重戦士や槍使いより上。ならば不用意に近付けば足手纏い。故に、好機を待った。

待ったかいがあった。勇者達と何らかの会話をして、動きを止めた瞬間手出しできない間に立てていた作戦を実行。

矢で意識を向けさせ足下を崩し聖壁（プロテクション）で押さえ付けダイナマイトで爆破。妖精弓手は矢の一発で十分だと言っていたが備えるに越したことはないと却下し作戦に移った。

「やったか？」

ダイナマイトはゴブリンスレイヤーが好んで使う道具だ。巻物（スクロール）同様一度しか使えないし、威力は直撃すれば英雄（チャンピオン）すら葬れる。とはいえやたら硬そうな鎧を纏っていた。警戒するに越したことはない。と、煙が晴れる。先程まで持っていなかった剣を持ち氷のドームに包まれたゴブリンが居た。何時の間にか兜まで被っている。

「師しょ――――」

「チッ！」

ゴブリンは勇者達に向かって浮遊する剣を放つ。突然虚空から現れた。見たことない特殊な力を持った個体のようだ。勇者と互角に戦うほどの力も持っている。必ず殺そう。

ゴブリンは沼を凍らせ足を引き抜く。と、蜥蜴僧侶が竜牙兵（ドラゴントゥースウォリアー）とともに切りかかる。

「冒険者か――」

後ろに飛びかわし、背後の木を駆け上る。そのまま今度は弓を取り出し三本の剣を矢代わりにつがえる。剣の形が僅かに細く、それこそ矢のように変わると放たれる。

「嘘!?」

三本の矢は弧を描きながら同時に妖精弓手に迫る。見られたと感じてから一瞬の間もない。その上で木々をかわすように弧を描かせて放った!?

妖精弓手にも出来ないことはない。ないが、もう少し狙いを定める時間を要するし三本同時など不可能だ。弓の腕でゴブリンに先を行

かれたという屈辱より先にまずは回避。
あのままでは三本同時に貫かれていたことだろう。
「何者だ？」
ゴブリンは幽鬼のような、見窄らしい格好をした冒険者に問いかける。彼がこの徒党のリーダーだと直感的に思ったからだ。
それに対し、彼は何でもないかのように答える。
「小鬼（ゴブリン）を殺す（スレイヤー）者」